



magazine



KYOTO EXPERIMENT 2022

京都国際舞台芸術祭

10.1 Sat. - 10.23 Sun.

“ニューてくてく” “New tekuteku”

会場◎ロームシアター京都、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、
THEATRE E9 KYOTO、京都市京セラ美術館、京都中央信用金庫 旧厚生センター ほか

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、2010年より京都市内で開催している舞台芸術祭です。国内外の「EXPERIMENT (エクスペリメント) = 実験」的な舞台芸術を創造・発信し、芸術表現と社会を、新しい形の対話でつなぐことを目指しています。演劇、ダンス、音楽、美術、デザイン、建築などジャンルを横断した実験的表現が集まり、そこから生まれる創造、体験、思考を通じて、新たな可能性をひらいていきます。

このマガジンについて

KYOTO EXPERIMENTのプログラム紹介をはじめ、フェスティバルのスケジュール、チケットの買い方までのあらゆる情報、フェスティバルをより楽しむための記事やコラムを掲載しています。KYOTO EXPERIMENTへの来場前後にお楽しみください!



kyoto-ex.jp

Kyoto Experiment: Kyoto International Performing Arts Festival 2022

Dates: October 1st-23rd, 2022

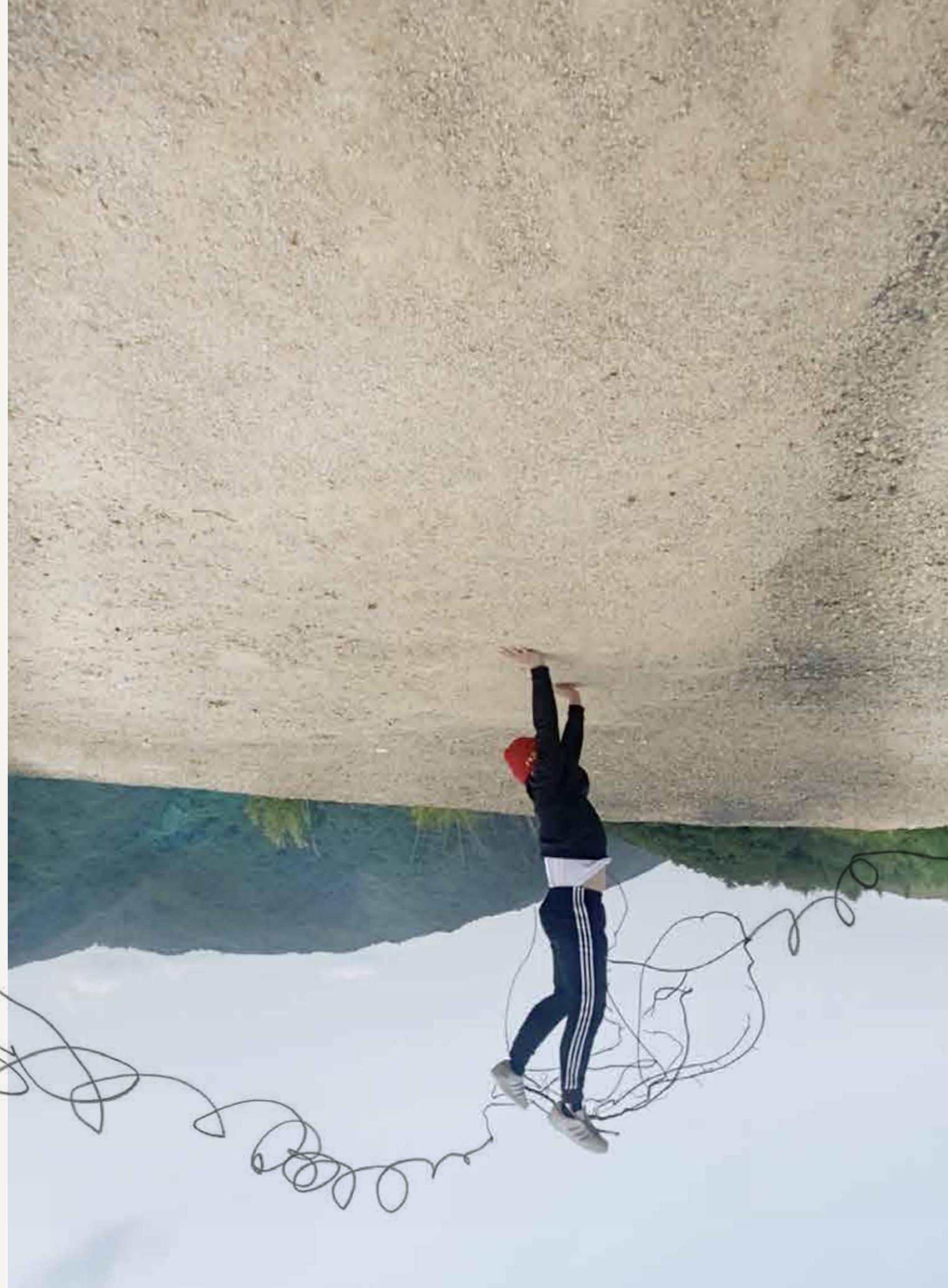
Venues: ROHM Theatre Kyoto, KYOTO ART CENTER, Kyoto Art Theater Shunjuza, THEATRE E9 KYOTO, Kyoto City KYOCERA Museum of Art, Former welfare center of Kyoto Chuo Shinkin Bank and other locations

Kyoto Experiment is a performing arts festival held in Kyoto since 2010. Dedicated to producing experimental performing arts—both from Japan and overseas—the festival aims to bring the arts and society closer together through new forms of dialogue. Featuring experimental works that move freely between genres such as theater, dance, music, fine art, design, and architecture, the festival hopes to open up new possibilities through the creations, experiences, and ideas that emerge from such a diverse combination.

This magazine includes information on the whole festival program, schedule and how to buy tickets as well as various articles that relate to the key concept of the festival. We hope you enjoy reading it before or after visiting the festival!

*KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭では、公益社団法人全国公立文化施設協会および、各会場の新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインに沿って、感染拡大防止対策を講じ、ご来場の皆さま及びアーティスト、フェスティバル関係者の安全と安心を確保することに努めて参ります。また、感染拡大の状況によってはプログラム内容を変更する可能性があります。感染拡大防止対策の詳細、最新情報につきましては、随時KYOTO EXPERIMENTウェブサイトに掲載してまいりますので、ご確認の上、ご来場いただけますようお願いいたします。

In order to ensure the safety and security of visitors, artists and festival staff, Kyoto Experiment will take measures to prevent the spread of coronavirus (Covid-19) in accordance with The Association of Public Theaters and Halls in Japan and the guidelines in place at each festival venue. Please note the contents of the festival program may change depending on the spread of coronavirus (Covid-19). Full details and the latest information on measures to prevent the spread of coronavirus (Covid-19) will be published on the festival website. Please check the website before visiting the festival.



ごあいさつ

常に新たな芸術表現に挑戦し続ける、「KYOTO EXPERIMENT」。コロナ禍の影響が続く中でも工夫を重ね、開催の運びとなりましたことを、誠に嬉しく思います。

今、長引くコロナ禍に加え国際情勢の緊迫などにより、世界に分断と悲しみが生まれています。そんな中、人々の心を潤し明日への活力を生む文化芸術の重要性はますます高まっています。さらに、世界の多様な価値観に触れ、共感することで、他者への理解を一層深める芸術祭は、SDGsの達成や世界平和にも貢献できる営みである。私はそう確信しています。

多様性、重層性に富んだ文化が息づく京都の地を舞台に、国際的に御活躍の個性溢れる表現者の方々が紡ぎ出すこの壮大な実験(EXPERIMENT)。御来場の皆様には、ここでしか感じるこのできない先鋭的な作品と、そこから生まれる新たな交流を、ぜひお楽しみください。この芸術祭が来場者の全ての皆様にとって、実り多きものになりますことを念じています。

結びに、開催に御尽力いただいた、天野文雄委員長をはじめとする実行委員会の方々、及び関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、挨拶に代えさせていただきます。

京都市長 門川大作

現代の舞台芸術における「知性」と「美」

昨年でしたか、たまたま購入した現代アートについての新刊書に、マルセル・デュシャンが、絵画は「知性」に関わるべきで、単に視覚的・網膜的であるだけでは不十分だと発言してから、現代アートに「美」はかならずしも必要ではないと考えられているとあったのに接して、妙に腑におちるものがありました。この傾向は現代の舞台芸術にもあてはまると思えたからです。

以下は能楽の歴史的研究を専門とする筆者の断想ですから、そのつもりで聞いていただければよいと思いますが、デュシャンのいう「知性」が時代や社会という外部に向けられた「主張」をさしていることはたしかでしょう。それまで王座に君臨していた「美」はその座を降りるときがきたというのです。いうまでもなく、これは現代という時代や社会の要請ですが、それはそれとして、その座を「知性」や「主張」に譲った「美」のゆくえはどうなったのか。私見によれば、「主張」が中心となっている現代の舞台芸術の場合、かつての「美」はその「主張」を支える「表現」として、たとえばウイット、風刺のような「遊び」としてすでに再生しているのではないかと思います。

今年で13回を数えるKYOTO EXPERIMENTのキーワードは、「ニューてくてく」です。それには今後の舞台芸術の「主張」を支える「表現」をどのように考えてゆくか、それについても「てくてく」考えようという含意もあるのだと思います。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 天野文雄

Greetings

Kyoto Experiment always endeavors to present new forms of art. It is with great joy that I welcome the festival again after the various workarounds it has deployed to continue even in the midst of the coronavirus pandemic.

In addition to the issues caused by the prolonged pandemic, international tensions have now led to tragedy and divisions in the world. As such, the importance of culture and art grows ever stronger as something that enriches people's minds and revitalizes us for the future. Moreover, by bringing us into contact and sympathizing with the different kinds of values in the world, an arts festival deepens our understanding of others further, and can also contribute to achieving the Sustainable Development Goals and global peace. Of this, I am convinced.

In the city of Kyoto with its diverse and multilayered culture, internationally active and highly individual artists conjure forth this magnificent experiment. Visitors, please enjoy these cutting-edge works that you can only experience here, and the new exchange that emerges from them. I hope that the festival is richly rewarding for all its visitors.

In closing, I would like to thank Fumio Amano and the other members of the executive committee, and everyone involved in the festival.

Daisaku Kadokawa
Mayor of Kyoto

"Intellect" and "Beauty" in the Contemporary Performing Arts

As I recall, it was in a new book about contemporary art that I happened to buy last year that I came across Marcel Duchamp's statement that painting should be intellectual, that it is not enough for painting to be simply visual or retinal, leading to the belief that contemporary art need not necessarily be beautiful, which oddly made a lot of sense to me. Because I thought this tendency is also applicable to the performing arts.

The following are the random thoughts of someone who specializes in historical research about noh and kyogen, which I hope you will keep in mind as you read, but what Duchamp calls "intellect" surely refers to outward-looking "assertion" about society and the times. Having reigned supreme until now, he is saying, the time has come for "beauty" to abdicate the throne. This, needless to say, is a demand of the contemporary society and era, but be that as it may, what then happened to that "beauty" after it passed the throne to "intellect" and "assertion"? In my opinion, in the case of the contemporary performing arts, centering as it does on "assertion," that previous "beauty" is already revived as the expression underlying the "assertion," as, for instance, wit or satirical "playfulness."

For its thirteenth edition, Kyoto Experiment explores the idea of "new teku teku." This connotes an aspiration to think "walkingly" about how we consider those forms of expression that underlie "assertion" in the performing arts in the future.

Fumio Amano
Chair, Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

もくじ

Contents

- 2 ごあいさつ
- 6 ディレクターズ・メッセージ
- 12 3つのプログラム
- 14 ミーティングポイント

- 16 Shows**
 - 18 小野彩加、中澤陽 / スペースノットブランク
 - 20 サマラ・ハーシュ
 - 22 フロレンティナ・ホルツィンガー
 - 24 松本奈々子、西本健吾 / チーム・チープロ
 - 26 メルツバウ、バラージ・バンディ、リシャール・ピナス with 志賀理江子
 - 28 梅田哲也
 - 30 ジャールナン・パンタチャート
 - 32 フォースド・エンタテインメント
 - 34 アーザーデ・シャーミーリー
 - 36 ミーシャ・ラインカウフ
 - 38 テイノ・セーガル

- 40 Super Knowledge for the Future [SKF]**
 - アーティストトーク、ワークショップ、山歩きなどの交流プログラム

- 48 Kansai Studies**
 - 50 演劇 | dot architects & 和田ながら
 - 52 3年間のリサーチを振り返る

- 56 関連プログラム
- 58 提携プログラム
- 62 フリンジ「More Experiments」 / ブックフェア

- 63 コラム: 読む、ニューてくてく**
 - 64 細馬宏通「歩くという表現」
 - 68 山崎健太「踏み出す足の下には何が」
 - 72 外山紀久子「上演芸術と歩行: "自然さ"のパラドックス」

- 76 批評プロジェクト2021 AUTUMN 選出作品

- 85 開催クレジット

- インフォメーション**
 - 89 チケット情報
 - 92 パートナーホテル
 - 94 会場アクセス
 - 96 カレンダー

- 3 Greetings
- 7 A Message from the Directors
- 12 Program Outline
- 14 Meeting Point

- 16 Shows**
 - 18 Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank
 - 20 Samara Hersch
 - 22 Florentina Holzinger
 - 24 Nanako Matsumoto & Kengo Nishimoto / team chiipro
 - 26 Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga
 - 28 Tetsuya Umeda
 - 30 Jarunun Phantachat
 - 32 Forced Entertainment
 - 34 Azade Shahmiri
 - 36 Mischa Leinkauf
 - 38 Tino Sehgal

- 44 Super Knowledge for the Future [SKF]**
 - An exchange program consisting of artist talks, workshops, a walking tour, and study group among other things.

- 48 Kansai Studies**
 - 50 Theater | dot architects & Nagara Wada
 - 52 Looking back on three years of fieldwork

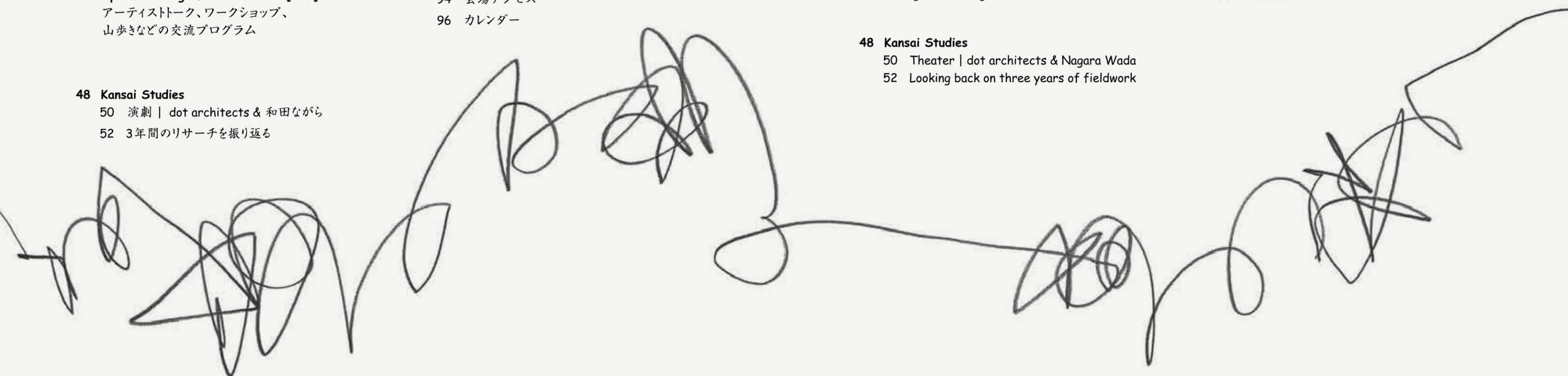
- 56 Related Programs
- 58 Partner Programs
- 62 Fringe: More Experiments / Book Fair

- 63 Articles: Reading "New teku teku"**
 - 64 Walking as Expression
Author: Hiromichi Hosoma
 - 68 What Lies Under Those Walking Feet?
Author: Kenta Yamazaki
 - 72 The Performing Arts and Walking: The Paradox of the "Natural"
Author: Kikuko Toyama

- 76 Performing Arts Criticism Project 2021 Autumn: Selected Review

- 85 Credits

- Other Information**
 - 89 Ticket Information
 - 92 Partner Hotels
 - 94 Access
 - 96 Calendar



ディレクターズ・メッセージ

KYOTO EXPERIMENTが始まってから13年目、そして新型コロナウイルス感染症による世界的なパンデミックが始まってから3年目の2022年。この数年、舞台芸術や国際交流のみならず、社会生活において当たり前の前提であった直接的なコミュニケーションがままならない中、さまざまな分断がより明らかになったように思う。あいちトリエンナーレ2019を発端とした表現の自由についての議論、国際・国内社会における経済格差や人種間・宗教間における分断、ソーシャルメディアでたびたび話題となるある種の問題への糾弾、舞台表現の現場における不均衡な権威構造の見直し(の始まり)、そしてもっとも現在進行形であるのはロシアによるウクライナへの軍事侵攻だろう。これらの事柄が表現領域に多大な影響を与えるのは明白であり、さらに今後数年の在り方を大きく変えるだろう。私たちは世界中の友人たちと連携をとる中でその変化を観察し、フェスティバルの在り方にも反映させられたらと日々考えている。

今年度のこのフェスティバルの開催にあたり、いま、こうした時代を少しでもポジティブに乗り越えようとするキーワードを提案できるとしたら何かと考え、「ニューてくてく」と設定することとした。

役立つ⇔役立たない

KYOTO EXPERIMENTは、現在進行形の実験的な舞台芸術を社会に提示するプラットフォームであり、そうした舞台芸術がどんなところへつながっていくかを、参加する誰もが考えることを目指す場所である。実験的な舞台芸術は、必ずしも万人が共感できる表現ではなく、そのため商業主義的な表現に与しないことも多い。資本主義社会においては、メインストリームではなくいわばサブストリーム、あるいはオルタナティブストリームともいえるものであり、直接的な効果を多大に生むものではないかもしれない。しかし、サブのもの、あるいはオルタナティブなものがなくして、今日の社会の本質は成り立たない。もっと言えばこの二項対立もある種の虚構である。生物が種々の多様性を保ちながら生態系を支えあっているように、人間社会が柔軟性を持ちながらその強度を保つには、誰もが楽しいと思える、快適で「わかる」表現以外にも、多種多様なこれまでに観たことがないような表現が生まれ、たくさんの人の目や感性に触れながら受容され、その次の思考へとつながっていくことが重要である。

大量の「いいね!」がついて短期的に利益をあげる「わかる」ものを目指すことで損なわれてしまう人間のイメージ力には、多くの場合一見無駄に思えるような寄り道が必要である。むしろ好奇心をもって「わからない」を大量に抱えて、人類はてくてく歩んできたのではないか。もはやそれは贅沢なことなのだろうか?このフェスティバルでは、現在進行形で実験されている表現を、いまを生きるみなさんと一緒に体験し、それが何なのか考えることで、私たちのありようと、これからのあり方を考えていくことを目指している。

「ニューてくてく」

「ニューてくてく」は、そうしたこれからの歩き方、意識の持ちようや問いの立て方を考えて設定したキーワードである。また、オンラインミーティングや配信での舞台鑑賞が普通になり、身体についての意識が希薄になったとともに、実際にある場所へと身を運ぶことが億劫になったこの数年を経て、私たちの身体性を具現化し、空間と時間を新たに共有し直すことを提案できるキーワードだと考えている。

「てくてく」は、日本語で歩くことを表象する言葉であるが、足を使って歩くことそのものをあらわす「てくてく」はもちろん、そこから発展して、移動することをあらわす「てくてく」、さまざまな意識における「てくてく」、異なる時間を行き来する「てくてく」、感情の「てくてく」、あるいはある規範やシステムへの動きをあらわす「てくてく」、など、いろいろな「てくてく」を考えることができる。

A Message from the Directors

This year marks the thirteenth since Kyoto Experiment began and the third since the start of the global coronavirus pandemic. Over these past few years, as we find ourselves unable even to communicate directly—something we took for granted not only for the performing arts and international exchange but in our lives in general—a wide array of divisions have come to the fore: the debate over freedom of speech sparked by the Aichi Triennale 2019; the racial and religious divides as well as economic disparity both internationally and domestically; the condemnation of certain problems that frequently go viral on social media; (the initial steps toward) revising the unequal power structures that exist in the workplace in the performing arts; and surely the most current, the Russian invasion of Ukraine. That these have had a massive impact on artistic expression is evident, but they are also set to greatly change the way things are over these next few years. Partnering with friends around the world, we are monitoring these shifts and reflecting them in our approaches to the festival.

This year's festival takes the idea of "new teku teku" as a framework for thinking about how we can transcend the zeitgeist positively, even if only in small ways.

Useful = Useless

Kyoto Experiment is a platform for presenting current examples of experimental performing arts to the public and a place that aspires to encourage any participant to think about the implications of such performing arts. Experimental performing arts often shun commercial forms of expression and, as such, are not always universally relatable or accessible. In a capitalist society, they are not part of the mainstream, but rather of substreams or alternative streams, so to speak, and perhaps do not produce many direct effects. Nonetheless, the very essence of society depends on such "sub" or alternative things. To wit, that whole dichotomy is a kind of myth. Much like how living creatures maintain their biodiversity to mutually support ecosystems, for human society to be versatile and maintain its strength, it is important that other than universally fun, enjoyable, and understandable forms of artistic expression, myriad and unprecedented forms appear, get viewed by many, and come into touch with sensibilities, and then lead to the next ideas. Impaired as it is by aiming only for what is "accessible," for what can attract lots of "likes" and short-term profit, the human imagination frequently needs detours that initially seem pointless. In fact, humankind has arrived steadily at where it is by acting on its curiosity and copiously embracing what it doesn't understand. Is that a luxury now? At this festival, we aim to think about our present circumstances and how things should be in the future by experiencing the latest experimental forms of expression together with our audiences today, and then pondering their meaning.

New Teku Teku

"New teku teku" is a term we conceived when thinking about such future forms of walking, attitudes, and ways to ask questions. Following the experience of these last few years when holding meetings online and streaming videos of performances became the norm, our awareness of the body decreased, and actually going to a place has become too much trouble, "new teku teku" proposes to make our physicality tangible, and share anew a time and space.

"Teku teku" is a Japanese word that expresses walking, but there are many types of teku teku: of course, the act of using your feet to walk, yet also, by extension, the act of moving or relocating, of being in various states of mind, of shuttling back and forth between different times, an emotional change, or even a move toward a certain set of standards or system. The "new" adds a sense of reinterpreting and rethinking teku teku after a major shift. The term is not an all-encompassing theme, nor does it neatly cover everything in the festival lineup. Instead of a response to the festival's programs, it is a suggestion or question to prompt new ideas and perspectives about the works.

Some five or seven million years ago, our ancestors evolved from moving around on four limbs to walking on two legs. There are various theories about this, but it was without doubt an immense turning point for the human species. People became able to move from location to

「ニュー」は大きな変動の後、「てくてく」を新たに捉え、考えることをイメージして付けた。このキーワードは、包括的な「テーマ」ではなく、ラインナップされるすべての作品が、その下にきちんと収まるようなものではない。フェスティバルのプログラムに対する答えではなく、作品に対する新たなアイデアや視点を生み出すきっかけとなるような、提案や問いかけのようなものである。

今から約500～700万年前、人類の祖先は4本足から2本足で歩くようになった。その理由は諸説あるが、人類にとって大きな転機となったことは間違いない。人はこれまでとは違う方法で空間を移動するようになった。今日のように形式化された舞台芸術ができる以前、そのルーツは移動と口承にあったと言えるかもしれない。文字や印刷が普及していなかった時代には、世界のほぼ全域で口づてに伝承が行われていた証拠が見つかっている。この場合、人々は歴史、文学、法律、歌、儀式などを、村から村へと歩くことによって伝えていた。

もちろん、人間が歩いて空間を移動する、あるいはA地点からB地点へ移動する理由は時代とともに変化している。私たちが暮らす現代社会を考えてみても、人が歩いたり移動したりする理由はさまざまだ。旅や巡礼のために歩く、政治的な行為として行進や抗議行動をする、あるいは何の目的もなく自分の思考を整理するために歩く。歩くという行為は、身体が空間を移動するということだが、この単純な行為を通して、私たちは過去を振り返り、いまを見つめ直し、未来を見つめることができる。

今年は観客のみなさんと、アーティストが作品を発表する上演会場、そしてミーティングポイントなどフェスティバルのさまざまな場所へてくてくして集まり、「ニュー」なてくてくを体験・想像したい。

プログラムについて

上演プログラムであるShowsでは、12演目を紹介する。2つの作品では、「歩くこと」が直接モチーフとして使われている。日本のノイズミュージックの草分けであるメルツバウとヨーロッパから参加するミュージシャン、バラージ・パンディとリシャール・ピナス、そして写真家の志賀理江子によるビジュアルコンサートでは、志賀の新作映像において東日本大震災後に建設された巨大防波堤を歩き続ける人物が映し出される。ドイツのアーティスト、ミーシャ・ラインカウフの展示では、地上では行き来が困難な地域の、でも実は海底にもある見えない国境を作家自身がてくてくと横断する映像作品が展示される。この作品は、国境の影響力やその強度を問い、ある種の遊び心を持って、身体を使って自由な空間を切り開く。

歩くことから、人間にとっては不可能な「飛ぶ」ことへと理想の美を追求したクラシックバレエの規範、あるいは芸術表現における女性の「美」そのものへの挑戦をパフォーマンスへと化したのは、ヨーロッパの舞台芸術シーンを席卷し、初来日となるフロレンティナ・ホルツィンガーである。絶対的な美の規範を、あっさりとはパロディ化してしまうその手法をぜひ目撃していただきたい。演者と観客の対話により上演が組み上がっていくのは、オーストラリアとヨーロッパを行き来しながら活動するサマラ・ハーシュによる作品である。会話がてくてくと展開することにより出来上がるような上演空間と時間は、その場にいる者だけが体験できる唯一無二のものである。この両作品では、知識や伝統をどのように世代から世代へと受け継いでいくのか、ということも大きな問いである。

スペースノットブランクの新作では、松原俊太郎による新作戯曲、映像表現と舞台表現の3つの要素における多様な行き来が体験できるであろう。そこでドラマティックに解体され、再生成されるものが何か、ぜひ劇場で体験していただきたい。テキストと身体の拮抗する関係性を作品化するの、チーム・チープロも同様である。京都での作品創作と発表が2年目となるこのユニットは、今回は女性性と相撲の四股を参照しながら新たな儀式を形成する。個人の旅や視点を通じて、大きな歴史の物語と未来の物語を見つめ直すのは、タイの演出家、

location in a very different way. Before they were formalized like they are today, the roots of performing arts arguably lie in migration and oral tradition. In eras when writing or printing were not yet widespread, evidence shows that lore was transmitted orally in almost all parts of the world. People passed on such things as history, literature, laws, songs, and rituals by walking from village to village.

Needless to say, the reasons people walk and move across a space, or go from A to B, change with the times. In the society in which we live today, people walk and move around for a variety of reasons. We walk to take a journey or pilgrimage. Walking can be a political act by marching or protesting. Or we walk not for a particular purpose but just to organize our thoughts in our mind. The act of walking is the body moving in a space, and yet through this simple act, we are able to look back on the past, to reexamine the present, and to scrutinize the future.

This year, we want to gather in teku teku ways with audiences at various places at the festival, from the venues where artists will present their work to locations like the Meeting Point, and experience and imagine "new" kinds of teku teku.

Festival Programs

The Shows program includes twelve productions.

Two of them deal directly with the theme of walking. The first is a visual concert featuring sound created by Japanese noise music pioneer **Merzbow** and two European musicians, **Balázs Pándi** and **Richard Pinhas**, and the photographer **Lieko Shiga**'s new video work that shows a human figure walking along the massive seawall built after the Great East Japan Earthquake. The second is an exhibition by German artist **Mischa Leinkauf** that features a video work in which the artist walks across invisible national borders on the ocean floor in regions where travel back and forth is difficult on land. The work questions the influence of national borders and their strength, and playfully uses the body to open up spaces of freedom.

Marking the first visit to Japan by a choreographer who has taken the European dance scene by storm, **Florentina Holzinger**'s performance embodies a challenge to notions of female "beauty" in art and to the norms of classical ballet that sought an ideal beauty by elevating the act of walking into a humanly impossible form of flight. Don't miss the way she effortlessly parodies our absolute standards of beauty. Working in Australia and Europe, **Samara Hersch**'s piece comes together through dialogue between performer and audience. The space and time of the performance that emerges as the conversation steadily develops is something unique and experienced only by those present. Another major question both these works explore is how knowledge and tradition is passed down from generation to generation.

In **Spacenotblank**'s new work, audiences find themselves shuttling back and forth between moving image and performing arts in **Shuntaro Matsubara**'s new play. What is dismantled dramatically and then regenerated? Be sure to experience it in the theater. **Team chiipro** likewise crafts work out of the rivalry of text and body. For the second year in its project to create new work in Kyoto, it references femininity and the *shiko* leg lift in sumo to form a new ritual.

The Thai director **Jarunun Phantachat** and the Iranian director **Azade Shahmiri** reexamine grand narratives from history and stories about the future through personal journeys and perspectives. Phantachat focuses on the history of Myanmar-Thailand relations, questioning who gets to write history. Shahmiri's work is set in the year 2070, investigating how we remember and record our and other people's lives.

Making its first visit to Japan in almost ten years, the British performance group **Forced Entertainment**'s two works enable audiences to see changes in certain systems and structures, frustrations over the loss of hope for those systems, and how to play with them. Though seemingly caught in a loop that goes nowhere, the jesting in both works invites us to ponder what is possible now.

Tetsuya Umeda and **Tino Sehgal**'s works both demand that audiences walk and make discoveries. In Umeda's, the audience experiences a teku teku that is neither the everyday nor a performance, while freely experiencing the space that is a building previously used for another purpose, and may well uncover a new way of walking in everyday life. Germany-based Sehgal's work is held over the entire festival at the Japanese garden at Kyoto City KYOCERA Museum of

ジャールナン・パンタチャートとイランの演出家、アーザーデ・シャーミーリーである。パンタチャートは、タイとミャンマーの歴史的関係に注目し、誰が壮大な歴史の物語を書くのか、疑問を呈する。シャーミーリーは2070年を舞台に、私たちが自分や他人の人生をいかに記憶・記録するかを問いかける。

ほぼ10年ぶりの日本での公演となるイギリスのパフォーマンス・グループ、フォースド・エンタテインメントの2作品においては、あるシステムや枠組みにおける変化、それに対する希望が打ち砕かれることや、それを遊んだりすることなどを読み解くことができる。両作品における、帰結の見えない状況で空転するかのような戯れは、「いま」何が可能かについて考えるように私たちを誘うだろう。

梅田哲也、ティノ・セーガルの作品は、いずれも観客が自ら歩き、発見することを求める。梅田の作品では、観客はかつて別の用途で使われていた建物のなかで、その空間を存分に体験しながら日常とも上演ともつかないてくてくを体験し、新しい日常の歩き方を発見するかもしれない。ドイツを拠点とするセーガルの作品は、京都市京セラ美術館の日本庭園でフェスティバルの全期間にわたって展開される。観客は、自分のために歌ってくれる人物に出会うために、自ら庭に足を踏み入れる。

フェスティバルを開催する京都、そして関西地域をアーティストの視点からリサーチし、今後の創作基盤につなげていく**Kansai Studies**は3年目を迎える。このリサーチプログラムの一旦の区切りとしてこれまでの探求を演劇作品化し、関西地域での行ったり来たりのでくてくをみなさんに共有する。リサーチと、そこから創造されるものが並列に、あるいはせめぎあいながら共存する作品は、どのような表現を獲得するだろうか。

エクステンジプログラムである**Super Knowledge for the Future [SKF]**においては、Showsに関係するトークやワークショップに加え、歩くこと、あるいはそこから発展するアートとポリティクスの関係を紐解くトークなど、多様な角度からフェスティバルに参加していただけるプログラムを考えた。

フェスティバル継続の危機について

最後に観客のみなさんには、このフェスティバルがこれまでになく継続の危機にあることをお伝えしたい。新型コロナウイルス感染症の影響による経済状況の変化が大きく影響し、このフェスティバルの運営主体である実行委員会が担う予算は、コロナ前と比べて半分程度減少することとなった。公私、国内海外さまざまな助成金を組み合わせてなんとか予定しているプログラムを実現させるために尽力しているが、予算額が減少したことに加えて渡航費のこれまでにない高騰、円安の影響も非常に大きい。そこで、この文章を完成させようとしている2022年6月のいま、予算を補填するためのクラウドファンディングに向けて準備を進めている。

今年度はこのような形でみなさんとプログラムを共有することを目指しているが、その先の継続のあり方についても対応策を講じていかねばならない。急激に変化するリアリティをまなざすための「実験」を舞台芸術において実践していくこのフェスティバルだからこそ、時代と並走していきたいと強く願っている。いかに継続し、対話を続けていくのか。これからもぜひ、共に思考し、このフェスティバルの挑戦をサポートしていただければ幸いである。

KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター
川崎陽子 塚原悠也 ジュリエット・礼子・ナッパ

Art. The visitor steps into the garden to encounter a figure who sings to them.

Now entering its third year, **Kansai Studies** undertakes research on the festival's host city of Kyoto and the Kansai region through the eyes of artists to lay a creative foundation for the future. As a tentative end point for the research program, it adapts the explorations done to date into a theater work and shares with audiences this back-and-forth teku teku in Kansai. With the research and what has been created from it placed in parallel, or rather as works that coexist in competition with one another, what form of artistic expression will they achieve?

The **Super Knowledge for the Future** exchange program features a wide-ranging lineup of talks and workshops related to the productions in the Shows program as well as talks that unpack the act of walking or, by extension, the relationship between art and politics.

The Crisis We Face to Keep the Festival Going

In closing, we would like to tell audiences about the unprecedented crisis the festival faces. The economic issues caused by the pandemic have also had a big effect on us, approximately halving the budget allocated to the festival's executive committee compared to pre-pandemic levels. We have poured our efforts into pulling off the festival's programs by cobbling together funding from both public and private sources, and Japanese and foreign subsidies, though the massive spike in airfares and weakening yen have greatly aggravated things further. In June 2022, as we put the finishing touches to this text, we are preparing to launch a crowdfunding campaign to cover other aspects of the festival's costs.

It is our aim here to share information about this year's programs, but we must also take measures to deal with how we can sustain the festival in the future. It is our ardent wish that this festival, as something that hosts experiments in the performing arts in order to examine our rapidly changing reality, keeps pace with the times. How can we continue the festival and its dialogue? Let's consider this question together. We hope for your support in our endeavors.

Yoko Kawasaki Yuya Tsukahara Juliet Reiko Knapp
Co-directors, Kyoto Experiment

KYOTO EXPERIMENT を構成する3つのプログラム consists of three programs

1

カンサイ・スタディーズ Kansai Studies

京都発の国際フェスティバルとして、自分たちが立脚する「地域」について自覚的に捉え、フィールドワークを通して探求するプログラム。アーティストが中心となり、地域住民やプロデューサー、研究者と一緒に、京都や関西の文化を継続的にリサーチしていきます。活動を通じて生まれた思考の軌跡やプロセスは特設ウェブサイト に蓄積され、誰もがアクセスできるオンライン図書館として公開。未来のクリエイターや企画のためのナレッジベースや実験場、アイデアソースとなることを目指します。

As an international festival based in Kyoto, this program focuses on the region upon which the festival stands and explores it through fieldwork. Artists take the lead in the program, researching the Kansai region's culture in team with local residents, producers, and researchers. Thoughts and observations derived from this research are published on the Kansai Studies website and archived in a way that allows viewers to follow their development. This is intended to be an "online library" accessible to all, which may one day serve as a source of knowledge and inspiration, as well as a testing ground, for future creators and projects.

2

ショウズ Shows

国内外から先鋭的なアーティストを迎え、いま注目すべき舞台芸術作品を上演するプログラム。京都および関西における舞台芸術の変遷と動向に注目しながら、ダンス、演劇、音楽、美術といったジャンルを越境した実験的作品を紹介します。

This program invites forward-thinking artists from Japan and overseas, staging works of performing arts that we think should be experienced right now. Closely observing the shifts and trends in the performing arts scene in Kyoto and the Kansai region, the program introduces experimental works that transcend the genre boundaries of dance, theater, music, and fine art.

3

スーパー・ナレッジ・フォー・ザ・フューチャー Super Knowledge for the Future [SKF]

アーティストは未来を予見する?! とりわけ実験的な舞台芸術作品と社会を対話やワークショップを通してつなぎ、新たな思考や対話、フレッシュな問題提起など、未来への視点を獲得していくプログラム。実験的表現が映し出す社会課題や問題をともに考え、議論し、現代社会に必要な智恵や知識を深めていきます。ここで獲得できるスーパー知識(ナレッジ)は、予測不能な未来にしなやかに立ち向かうための拠り所となるはずです!

Can artists foresee the future? The "SKF" program connects society with experimental performing arts through talks and workshops in an attempt to spark new ideas and dialogues, a fresh awareness of issues, and perspectives on the future. Think, discuss and debate together on various social problems and issues addressed by experimental works. We hope the "Super Knowledge" acquired will equip you to flexibly confront the unpredictable future!

ミーティングポイント

Meeting Point

制作: CMTK (森千裕 × 金氏徹平)

Works by CMTK (Chihiro Mori & Teppei Kaneuji)

🕒 10.1 (Sat)-10.23 (Sun) 12:00-18:00

10.1, 2, 8, 15, 16, 21, 22, 23 🕒 12:00-21:30

火・水曜休み
雨天時などは休場となる場合があります。
Closed on Tuesdays and Wednesdays
The venue will be closed temporarily in case of rain.

📍 ロームシアター京都 ローム・スクエア
ROHM Square, ROHM Theatre Kyoto

¥ 観覧料: 無料 (一部、有料イベントあり)
Free admission (some events require a participation fee)

📄 イベントの詳細はウェブサイトをご覧ください。
📄 Visit the festival website for information about the events.

令和4年度日本博イノベーション型プロジェクト
補助対象事業(独立行政法人日本芸術文化振興会/文化庁)
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan,
through the Japan Arts Council, Fiscal Year 2022



©Chihiro Mori

すんなりわかっただら面白くない
何事も、迷ってからが本番

KYOTO EXPERIMENTに来るのが初めて? どんな作品に出会えるか知りたい? なにか面白いものに出会いたい? そんな皆さんは、フェスティバル開催期間中にローム・スクエアに出現する「ミーティングポイント」へ――。

ここは、観客とフェスティバルとをつなぐ交流の場。今回は、森千裕と金氏徹平によるアートユニット「CMTK」が、大型のレンチキュラー印刷*を用いたインスタレーション作品を会場に制作・設置します。

独自視点による都市観察を通じて拾い集めたイメージの断片を取り込み、作品を制作する森と、身のまわりの事物を素材に、コラージュ的手法を用いて作品を制作する金氏。文脈に寄らず、新たな表現のあり方を探る両者がつくり出す、変化し続ける屏風、あるいは人を惑わす迷路のような壁。それによって空間は変容し、そのイメージを見るためには身体と眼を動かし続ける必要があります。

会期中の週末には、子どもから大人まで楽しめるイベントを開催予定。併設のフェスティバルボックスでは、コミュニティラジオの発信から、常駐スタッフのプログラム案内も。(何を見たらいいか迷ってる人はこちらに!)

*レンチキュラーレンズにより、見る角度によってイメージが立体的に見えたり、変化して見えたり、動いて見えたりする印刷手法

CMTK (森千裕 × 金氏徹平)

森千裕 (もりちひろ) 京都在住。独自の視点による都市観察を通じて拾った断片を取り込み、絵画、ドローイング、彫刻、アニメーション、写真、インスタレーションなど多様な手法で制作。その作品は、不穏さと美しさ、生の残酷さと面白さが共存し、アナキーかつ人間的である。個展「omoide in my head」(豊田市美術館、2017)など国内外での展覧会のほか、2019年には、「東京2020公式アートポスター」の制作アーティストのひとりに選ばれた。

金氏徹平 (かねうじてっぺい) 京都在住。日常の事物を収集し、コラージュ的手法を用いて作品を制作。彫刻を中心とした多様な手法で制作。一貫して物質とイメージの関係を顕在化する造形システムの考案を探求している。チェルフィッチュとのコラボレーションによる「消しゴム森」(金沢21世紀美術館、2020)など国内外での展覧会のほか、舞台美術や装丁も多数。「tower (THEATER)」(ロームシアター京都、KYOTO EXPERIMENT 2017)では、自身の映像作品を舞台化した。

クレジット

アーティスト: CMTK (森千裕 × 金氏徹平)
会場設計・施工: dot architects
協賛: 株式会社サンエムカラー、株式会社グランマール
協力: Atelier Tuareg、片岡構造、西住寺、六波羅蜜寺、ギャラリー・バルク
画像提供(一部): 京都国立博物館
主催: KYOTO EXPERIMENT

There's joy in discovery
You're always lost at first

The Meeting Point, a place for communication between audiences and the festival, can be found at ROHM Square for the duration of the festival. This year the artist duo "CMTK (Chihiro Mori x Teppei Kaneuji)" are turning the Meeting Point into an installation work using a large-scale lenticular printer*.

Mori's works incorporate fragments of images which she collects through observing cities from her own unique perspective, while Kaneuji uses collage techniques to create artwork and sculptures by using commonplace objects. These two artists explore new forms of expression through a myriad of contexts, and in this work, they create a folding screen that continually evolves—a labyrinth of walls that bewilders the viewer. The space is transformed by this work, and in order to see the image, the viewer must also constantly change their position and perspective.

On weekends throughout the festival, there will be events that can be enjoyed by children and adults alike. The site also has a Festival Box where there are Community Radio broadcasts and staff to introduce visitors to the programs (for visitors who are not sure where to start, this is the place to go!).

*A printing technique that uses a lenticular lens to make images appear three-dimensional, or as if they're changing or moving, depending on the angle from which they are viewed.

CMTK (Chihiro Mori & Teppei Kaneuji)

Chihiro Mori Based in Kyoto. Taking fragments of urban life from her own observations Mori creates work in a variety of different media including painting, drawing, sculpture, animation, photography, and installation. Her work is both anarchic and human, disturbing and beautiful, and raw and funny. In addition to exhibitions both in Japan and abroad, such as *omoide in my head* (Toyota Municipal Museum of Art), she was selected as one of the designers for the Tokyo 2020 Paralympic Official Art Poster in 2019.

Teppei Kaneuji Based in Kyoto. Kaneuji collects everyday objects and creates works using a collage technique. He works in a variety of media with a focus on sculpture. He consistently seeks to devise a form in which the relationship between material and image is actualized. In addition to exhibitions such as *Eraser Forest* (21st Century Museum of Modern Art, Kanazawa, 2020) he creates stage sets and designs book covers. He also directed *tower (THEATER)* (Kyoto Experiment 2017), a stage adaptation of his own video work.

Credits

Artists: CMTK (Chihiro Mori & Teppei Kaneuji)
Venue Design & Construction: dot architects
Sponsored by SunM Color Co., Ltd., GRAND MARBLE
In co-operation with Atelier Tuareg, Kataoka Structural Design Department, Saio-ji Temple, Rokuharamitsuji Temple, Gallery PARC
Images courtesy of Kyoto National Museum
Presented by Kyoto Experiment

Showsにプログラムされているそれぞれの演目の概要を紹介。

「あわせて楽しむ!」はプログラムをより複合的に楽しむためのヒントです。

セットで観劇・参加すると楽しいおすすめプログラムを紹介しています。

あわせて楽しむことで、もっとフェスティバルを楽しめるかも?

※新型コロナウイルス感染拡大の状況によってはプログラム内容を変更する可能性があります。

最新情報については、随時KYOTO EXPERIMENT ウェブサイトに掲載しますので、ご確認の上、ご来場をお願いいたします。

The next pages introduce each of the performances in the Shows program.

Check out the recommendations at the bottom of each page for suggestions on other performances, talks, and events to watch as a set!

(Please note the festival program may change depending on Covid-19 restrictions. Please check the festival website for the latest information before visiting.)

アイコンについて / Symbols

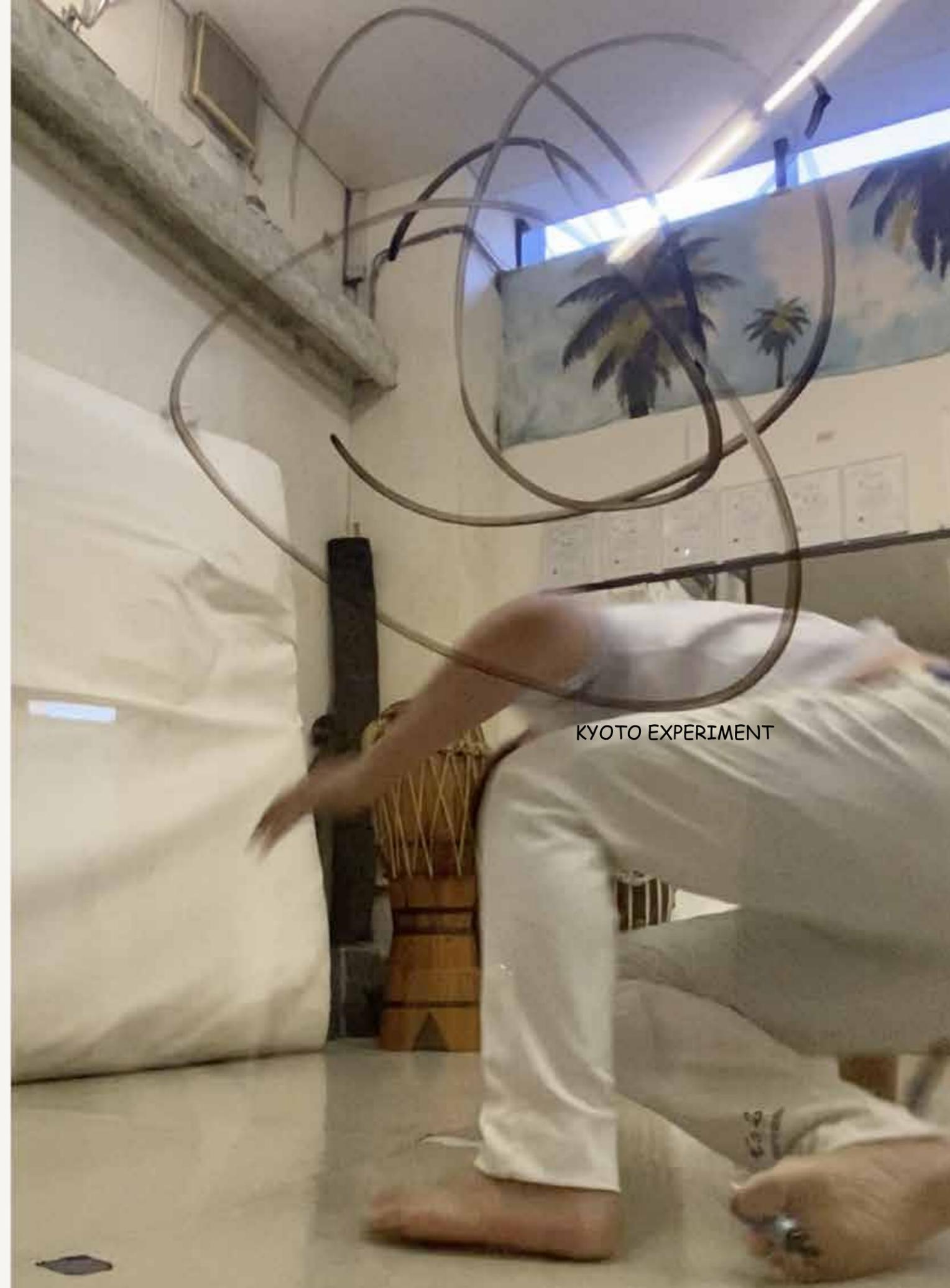
 上演日時 / Date

 上演時間 / Duration

 会場 / Venue

 上演言語 / Language

 鑑賞についての諸注意 / Notes



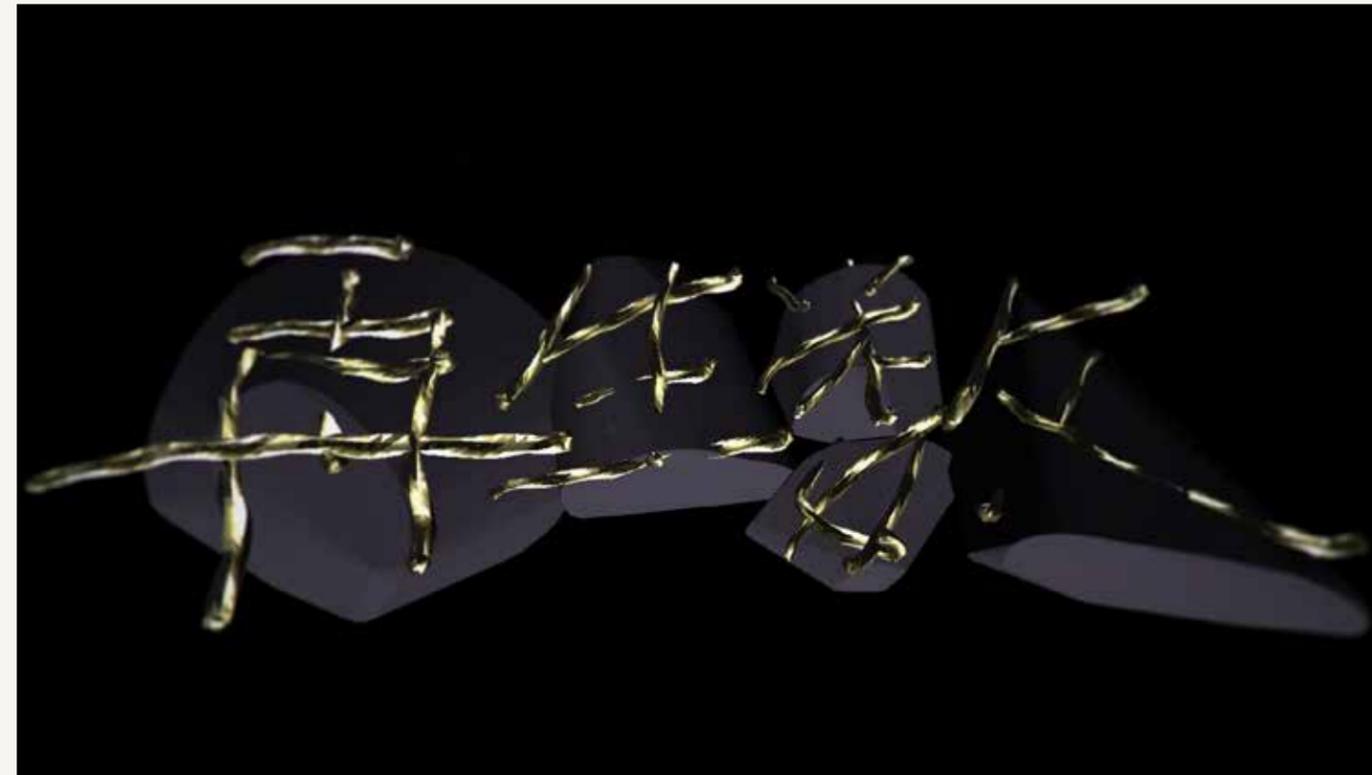
小野彩加、中澤陽 / スペースノットブランク 再生数

Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank

Views

演劇 / Theater

拠点：東京 / Based in Tokyo



© Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank

🕒 10.1 (Sat) 14:30 / 19:00
10.2 (Sun) 14:30 ★♡

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前

★ポスト・パフォーマンス・トークあり

♡託児あり(p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★ Post-show talk

♡ Childcare Service (p.91)

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

🗣️ 日本語 (英語字幕あり)
Japanese with English surtitles

#新作 #映画か演劇か
#NewWork #FilmOrPlay

あわせて楽しむ! / Check these out tool

📍 フロレンティナ・ホルツィンガー (p.22)
Florentina Holzinger (p.22)

📍 チーム・チープロ (p.24)
team chiipro (p.24)



THE SAÏSON FOUNDATION

スクリーンに映されたドラマ。
これは、映画か演劇か?

どちらも劇場で体験される芸術なのに、交わることのない「演劇」と「映画」。一般に、前者はライブで演じられ、後者は映像を再生する。そんなふたつの邂逅を目撃できるのが、『再生数』だ。

本作を手がけるのは、今注目のコレクティブ「スペースノットブランク」と、岸田國士戯曲賞受賞作家でもある気鋭の劇作家・松原俊太郎。小野彩加と中澤陽からなるスペースノットブランクは、舞台芸術の新たな思考や手法を探究しながら、固有の環境や関係により生じるコミュニケーションを創作の根源として活動してきた。松原とは2019年より継続的に協働しており、4度目となる本作では、なんと、演劇の上演と映画の上映をリアルタイムで表現していくという。8人の出演者のうち、2人が担うのはカメラの役割。残る6人が演じる松原作のドラマを、舞台上のスクリーンに映し出されたカメラの視点を通して「映画」として鑑賞する。演劇と映画を同時に鑑賞するような二重の体験が待ち受けているのだ。

言葉、サスペンス、切実さ、軽快さ……さまざまな意味と印象がコラージュされた松原の戯曲と、スペースノットブランクの演出によりスピード感をもって解体されていく空間と身体——。舞台上に巻き起こるドラマと再生成されていく演劇と映画の関係は、いかに結実するのか。その協働が行き着いた新たな境地に、頭痛がするくらいどっぷり浸かりたい。

スペースノットブランク

二人組の舞台作家の小野彩加と中澤陽が舞台芸術の創作を行なうコレクティブとして2012年に設立。舞台芸術の既存概念に捉われず、独自の新しい仕組みを研究開発しながら舞台芸術の在り方と価値を探究している。固有の環境や関係により生じるコミュニケーションを創作の根源とし、作品ごとに異なるアーティストとのコラボレーションを積極的に行なっている。せんがわ劇場演劇コンクール・グランプリ受賞(2017)。下北ウエーブ選出(2018)。ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム“KIPPU”選出(2020)。金沢21世紀美術館芸術交流共催事業 アンド21選出(2021)。

クレジット(再生数)

作: 松原俊太郎 | 出演: 荒木知佳、古賀友樹、鈴鹿通儀、鶴田理紗、奈良悠加、油井文寧 | 出演(カメラ): 新藤早代、日景明夫

演出: 小野彩加、中澤陽 | 音響: 櫻内撞海 | 照明: 中山奈美 | 映像: 小西小多郎
美術: カミイケタクヤ | 舞台監督: 河井朗 | リハーサル・ディレクター: 山口静
保存記録: 植村明也 | 制作: 花井瑠奈

協力: ブリッシマ、白昼夢、私は少し静かになっている、青年団、お布団、ルサンチカ、東京はるかに

製作: スペースノットブランク | 共同製作: KYOTO EXPERIMENT

助成: 芸術文化振興基金、公益財団法人セゾン文化財団、一般財団法人柏江市文化振興事業団文化芸術活動支援事業

主催: スペースノットブランク、KYOTO EXPERIMENT

The drama that unfolds on-screen:
Is it a film or a play?

Plays and films seldom intersect. Generally, the former is performed live, while the latter is a screening of a pre-recorded video. In this work, *Views*, the audience witnesses the collision of these two artforms.

This work is created by the up-and-coming collective Spacenotblank and Shuntaro Matsubara, an emerging playwright and winner of the Kishida Prize for Drama. Spacenotblank, which consists of Ayaka Ono and Akira Nakazawa, creates works rooted in the communication that arises from specific environments and relationships, while exploring new ideas and techniques in the performing arts. The two have continuously been working with Matsubara since 2019, and in this, their fourth collaboration, they stage the performance of a play and the screening of a film in real time. Of the eight performers, two play the role of the camera. The remaining six performers act out a drama written by Matsubara, while the audience views the performance through the perspective of a camera in a "movie" projected onto a screen on stage. The dual experience that awaits the audience evokes the feeling of watching a play and film at the same time.

Words, suspense, urgency, playfulness— Matsubara's play is a collage of various meanings and impressions, while the direction by Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank rapidly deconstructs space and body. What will be the upshot of this drama that unfolds on-stage, this reworked relationship between theater and film? This collaboration will lead you to a new state. Lose yourself in it.

Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank

Formed in 2012 as a performing arts collective comprising Ayaka Ono and Akira Nakazawa, Spacenotblank's work explores new values and approaches in the performing arts, developing fresh methods unconstrained by conventional ideas. They create works rooted in the communication that arises from specific environments and relationships and actively collaborate with different artists for each work. In 2017 they won Sengawa Theater Contest. In 2018 they were selected for the Shimokita Wave project, in 2020 for the ROHM Theatre Kyoto + Kyoto Art Center KIPPU Under 35 Creative Support Program and in 2021 the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Art Exchange Project And21.

Credits (Views)

Playwright: Shuntaro Matsubara | Created with & Performed by Chika Araki, Yuki Koga, Michiyoshi Suzuka, Risa Tsuruta, Yuka Nara, Ayane Yui | Performance with Live Camera: Sayo Shindo, Akio Hikage | Direction: Ayaka Ono & Akira Nakazawa | Sound Engineer: Shomi Sakurachi | Light Design: Nami Nakayama Live Video System: Kotaro Konishi | Scenography: Takuya Kamiike | Stage Management: Hogara Kawai | Rehearsal Director: Shizuka Yamaguchi | Archive: Sakuya Uemura | Project Manager: Luna Hana

In co-operation with PURISSIMA, Hakuchumu, I'll be a little quieter Seinendan, Offton, Ressenchka, Tokyo Harukani | Produced by Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank | Co-produced by Kyoto Experiment | Supported by Japan Arts Council, The Saison Foundation, Komae Ecorma Hall | Presented by Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank, Kyoto Experiment

サマラ・ハーシュ | わたしたちのからだ知っていること

Samara Hersch | Body of Knowledge

演劇 / Theater

拠点:メルボルン、アムステルダム / Based in Melbourne and Amsterdam



Photo by Pier Carthew

- 🕒 10.1 (Sat) 15:30 / 19:00
- 10.2 (Sun) 15:30 ♡ / 19:00
- 10.6 (Thu) 19:00
- 10.7 (Fri) 19:00
- 10.8 (Sat) 18:00
- 10.9 (Sun) 18:00
- 10.10 (Mon) 18:00

受付開始は開演の60分前、開場は開演時間と同時刻

♡ 託児あり (p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open at the performance start time.

♡ Childcare Service (p.91)



105 min

📍 京都芸術センター 講堂
Auditorium, Kyoto Art Center

🗣️ 日本語 / Japanese



20歳未満入場不可(10代の出演者とそれ以上の年齢の観客が対話する作品のため)。開演後は途中入場不可。演出の都合上、入場時にスマートフォン・携帯電話等をお預かりします。各回定員12名。

No admission for audiences aged 19 and under (due to the fact teenage performers interact with an adult audience). Audiences may not enter after the performance has started. Please note you will be required to hand in your mobile phone before the performance. 12 people per performance.

#ティーンのお悩み #大人に聞いてみた #性とか #大人になっていく
#TeenageWorries #ask-a-grown-up #SexEducation #aging

あわせて楽しむ! / Check these out too!

📍 10.4 (Tue) サマラ・ハーシュ「ワークショップ&ディスカッション」(p.41)
Workshop and Discussion with Samara Hersch (p.45)

📍 梅田哲也 (p.28)
Tetsuya Umeda (p.28)

身体の知識は誰から何処へ? ティーンと大人の対話がはじまる

関西在住のティーンエイジャーが演じる本作だが、舞台上に彼らの姿はない。円形に並べられた椅子と何も知らない12人の観客たち、そして鳴り響く着信音——。これは、受話器の向こうのティーンと対話することで舞台が進行する参加型演劇だ。

これまで異なるコミュニティの交差をテーマに作品を発表してきたサマラ・ハーシュ。この作品では、性教育や身体についての知識の形成に着目しながら、セクシュアリティ、老いや死といったトピックについての世代間対話を試みる。ティーンたちが観客に投げかけるのは、「身体について大人に聞きたいこと」という素朴な疑問。大人同士でも気まづくなるような赤裸々な問いかけに、あなたならどう反応するだろう?

ティーンとの対話によって観客たちが出会うのは、身体にまつわるさまざまな政治的・社会的視点だ。そうして舞台上では、大人/子ども、教師/生徒、パフォーマー/観客といったヒエラルキーが解体され、それぞれの立場が交差しはじめる。そこにあるのは、知識や知恵を共有するためのオルタナティブな方法かもしれない。

サマラ・ハーシュ

演出家。オーストラリア出身、現在アムステルダムを拠点に活動している。アムステルダムのダスシアターで修士号を取得。パフォーマンスとコミュニティの接点を、作品を通して模索している。最近の作品では、世代間の対話に焦点を当て、パフォーマンスとしての会話について探求している。作品に、ティーンエイジャーがホストになり、身体に関する疑問について大人と対話する本作、70-80代のパフォーマーが主導する親密な出会いの作品『Sex and Death』、遠隔地の世代間の出会いがテーマの『For the Time Being』などがある。

クレジット(わたしたちのからだ知っていること)

コンセプト、リード・アーティスト: サマラ・ハーシュ | ドラマトウルク: マリア・ロスラー
クリエイティブ・テクノロジスト: フレデリック・ロドリゲス | 美術: ベレ・サントス | 照明
デザイン: ジェン・ヘクター | プロダクション・マネージャー: ソフィア・パチョレイ | プロ
デュサー: フレイア・ウォーターソン | 通訳、ユース・サポート: 山口恵子 | ユース・サ
ポート・アシスタント: 千代その子、中村彩世 | アーティスティック・アドバイザー:
メッチ・インヴァルセン、エディット・カルドー | アーティスティック・アソシエイト:
カサンドラ・フミ | 日本から参加した素晴らしい若者たちのチーム

Be SpectACTIVE! プログラムにより実施 - CapoTrave / Kilowatt, Artemrede, Bakelit Multi アートセンター、Brut、ブダ・コルトレイク、Cafè de las Artes Teatro, Domino, Divadelná Nitra, ダブリン・シアター・フェスティバル、Göteborgs stadss kulturförvaltning / Stora teatern, Institution Student Cultural Centre, Occitanie en scène languedoc-roussillon, Plesni teater, タネツ・ブラハ、ラドゥスタンカ国立劇場

共同委嘱: SICK! フェスティバル(マンチェスター)、「Liveworks Festival of Experimental Art」Carriageworks(シドニー) | 初演版製作: ダスシアター劇場(アムステルダム) | 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造 [Intergenerational Thinking-世代間の対話]

主催: KYOTO EXPERIMENT

サマラ・ハーシュ『わたしたちのからだ知っていること』は豪日交流基金によりオーストラリア政府 外務貿易省の助成を受けています。



Who passes on knowledge about the body? Where does it go? A dialogue between teens and adults begins

Although teenagers living in the Kansai area perform in this piece, you do not see them on stage. This work of participatory theater begins with chairs arranged in a circle, twelve unknowing audience members, and the ringing of cellphones. It proceeds to unfold through the audience's conversation with the teens on the other end of the line.

Samara Hersch's practice explores the intersections among different communities. In this work, she focuses on the formation of knowledge around sex education and our bodies and attempts to create intergenerational conversations about topics spanning sexuality, aging, and death. The teens ask simple questions to the audience on the subject of "things about the body you'd want to ask an adult." How would you respond to such frank inquiries, which might even make adults blush?

Through their conversations with the teenagers, the audience members encounter various political and social perspectives regarding the body and its effect on others and the world at large. On stage, the hierarchies between categories like adult/child, teacher/student, and performer/audience get dismantled, and the positions begin to intersect. There, alternative methods for sharing our knowledge and wisdom may be revealed.

Samara Hersch

Samara Hersch is a director from Australia, currently based between Amsterdam and Melbourne. She recently completed her Masters at Das Theatre in Amsterdam. Hersch's practice explores the intersection of contemporary performance and community engagement. Her recent body of work focuses on critical trans-generational dialogue with an enquiry into conversation as performance. These works include: *Body of Knowledge*, a work that invites teenagers to host conversations with adults regarding questions they have about the body, *Sex and Death*, an intimate encounter led by performers in their seventies and eighties and *For the Time Being* a remote, inter-generational encounter.

Credits (Body of Knowledge)

Concept and Lead Artist: Samara Hersch | Dramaturge: Maria Röbler | Creative Technologist: Fred Rodrigues | Set Design: Belle Santos | Lighting: Jen Hector
Production Manager: Zsafia Paczolay | Producer: Freya Waterson | Local Translator and Youth Support: Keiko Yamaguchi | Youth Support Assistants: Sonoko Chishiro, Sayo Nakamura | Artistic Advisors: Mette Ingvartsen and Edit Kaldor | Artistic Associate: Cassandra Fumi | And a team of extraordinary young people from Japan

Realized in the framework of Be SpectACTIVE! - CapoTrave / Kilowatt, Artemrede, Bakelit Multi Art Center, Brut, BUDA Kortrijk, Cafè de las Artes Teatro, Domino, Divadelná Nitra, Dublin theatre festival, Göteborgs stadss kulturförvaltning / Stora teatern, Institution Student Cultural Centre, Occitanie en scène languedoc-roussillon, Plesni teater, Tanec praha, Teatrul national Radu Stanca

Co-commissioned by SICK! Festival in Manchester, Liveworks Festival of Experimental Art, Carriageworks in Sydney. An early version of this work was developed at DAS Theatre in Amsterdam. | Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council, Japan Foundation for Regional Art Activities [Intergenerational Thinking] | Presented by Kyoto Experiment

Samara Hersch's *Body of Knowledge* at Kyoto Experiment is supported by the Australian Government through the Australia-Japan Foundation of the Department of Foreign Affairs and Trade.

フロレンティナ・ホルツインガー | TANZ (タンツ) Florentina Holzinger | TANZ

パフォーマンス / Performance

拠点: ウィーン、アムステルダム、ベルリン / Based in Vienna, Amsterdam, and Berlin



© Urska Boljkovac

22

🕒 10.1 (Sat) 18:30 ☆☆☆
10.2 (Sun) 18:30 ☆☆☆♡

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前
☆プレトークあり(ロビーにて開演30分前より)
★ポスト・パフォーマンス・トークあり
♡託児あり(p.90)
Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.
☆Pre-talk in the lobby 30 min before the performance.
★Post-show talk
♡Childcare Service (p.91)

🕒 120 min



高校生、18歳未満入場不可。人により生理的に不快に感じる可能性のある過激な表現(血液、他)が多数含まれます。予めご了承ください。
No admission for high school students and audiences aged 17 and under. This performance contains several scenes (involving blood and other graphic content) that some viewers may find extreme or disturbing. Viewer discretion is advised.

📍 ロームシアター京都 サウスホール
South Hall, ROHM Theatre Kyoto

🗣️ 英語(日本語字幕あり)
English with Japanese surtitles

#アジア初演 #バレエの先 #話題作
#AsiaPremiere #beyond-ballet #AwardWinning

あわせて楽しむ! / Check these out too!
👉 9.25 (Sun) 『TANZ(タンツ)』をめぐるトーク(p.40)
About Tanz (p.44)
👉 10.3 (Mon) フロレンティナ・ホルツインガー ワークショップ(p.41)
Workshop with Florentina Holzinger (p.45)



美の歴史を高らかに更新する 「アクション・バレエ」

ここ数年、ヨーロッパの舞台芸術シーンでもっとも話題を呼んだ作品は?と聞かれたら、まず挙がるのが本作『TANZ(タンツ)』(2020)だろう。「TANZ」はドイツ語でダンスの意味。舞台は、『春の祭典』を世界ではじめて裸で踊った(1972年、J.ノイマイヤー振付)ベアトリス・シェーンヘルのパレエ教室。本作は、固定化されたジェンダーの象徴としての伝統的なバレエの世界を題材としながら、その“伝統”をアクロバティックな演技で軽々と飛び越えていく。10人の女性たちが演じるバレリーナは、血みどろのパレエの特訓と心身の鍛錬を重ね、ついには空中浮遊という超能力的なパワー(ワイヤーパフォーマンス)さえも習得してしまうのだ。

完璧な美しさを追求してきたダンスの歴史——そこにリミックスされるコメディ、サーカス、ボルノといった過激なイメージ。美という名のもとに眼差されてきた女性の身体をあっけなく逆手にとり、芸術表現における女性の身体史に新たな一石を投じる。ヨーロッパで数々の賞を受賞してきたフロレンティナ・ホルツインガーと、20~80代の女性ダンサーたちがつくり出す、センセーショナルで痛快な問題作。これを見逃す手は今のところない。

フロレンティナ・ホルツインガー

ダンサー・振付家。1986年オーストリア、ウィーン生まれ。アムステルダムの芸術大学で振付を学び、アムステルダムとウィーンを拠点に活動。ハイ・カルチャーとエンターテインメントの境界線と意識的に戯れながら、女性の表象のさまざまなモードを探求し、『Recovery』『Apollon』『TANZ』の3部作を発表。『TANZ』はTheatertreffen 2020へ招待されたほか、Nestroy賞の最優秀演出家賞を受賞。2021年より、ルネ・ボレシュ率いるベルリンの劇場フォルクスビューネのパーマネント・アーティスト。

クレジット(TANZ タンツ)

構成・パフォーマンス・振付:フロレンティナ・ホルツインガー|出演:レニー・コブライ、ベアトリス・コルドゥア、イブリン・フランティ、ルシファイヤー、リディア・ダーリン、アニナ・マチャーズ、ナッティ・ヌガナン、スズン・パシオン、ローラ・ストークス、ベロニカ・トンプソン、ヨセフィン・アーネル、ザナ・ノヴァイス、フロレンティナ・ホルツインガー
映像デザイン・ライブビデオ:ヨセフィン・アーネル|音響デザイン・音響技術:シュテファン・シュナイダー|照明デザイン・テクニカルディレクター:アナ・ミュッセン|舞台技術:シュテファン・ヴェルナー|吊物:ドゥルテ・ヴィルフロート|テクニカルアシスタント:クン・ファネステ|美術:ニコラ・クネジヴィッチ|美術アシスタント:カミラ・スモルダーズ|ドรามマトルク:レニー・コブライ、サラ・オスタルターグ|スタントサポート:Haeger Stunt & Wireworks |マネジメント: Something Great (ドイツ・ベルリン) & DANSCO (オランダ・アムステルダム)
ツアーマネジメント:Something Great (ドイツ・ベルリン)|日本語字幕翻訳:出口結美子|製作: Spirit|共同製作:Tanzquartier Wien, Spring Festival Utrecht, Productiehuis Theater Rotterdam, フランクフルト・ムゾントゥルム劇場, Arsenic Lausanne, ミュンヘン・カンマーシュピール, Take Me Somewhere Festival, Beursschouwburg, deSingelシアター、ゾフィーエンゼーレ、フラスカティ・プロダクシーズ、Theater im Pumpenhaus, asphalt Festival
協力:オーストリア共和国連邦省芸術・文化・市民サービス・スポーツ部門IV-アートと文化|助成:ウィーン市文化局、オーストリア連邦文化財局、Performing Arts Fund NL, Norma fonds NL|京都公演助成:文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業)|独立行政法人日本芸術文化振興会、Performing Arts Fund NL、オランダ王国大使館、オーストリア文化フォーラム東京|特別協力:ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都
主催: KYOTO EXPERIMENT

“Action Ballet” that proudly updates the history of beauty

If you were to ask what work has most stirred up the European performing arts scene in the last few years, people would likely bring up TANZ first.

The title TANZ translates to “dance” in German. The performance begins in a ballet class under the direction of Beatrice Schönherr, the first ballerina to dance *Le Sacre du Printemps* naked (choreographed by John Neumeier in 1972). The subject matter is the world of traditional ballet, an emblem of fixed notions of gender, but the work easily transcends this “tradition” through its acrobatic performance. The ten ballerinas continuously pour themselves into bloody training, pushing their minds and bodies until they finally achieve the superhuman power of flying (via wire performance).

Radical imagery invoking comedy, the circus, and porn is remixed into the history of dance, which has pursued perfection in beauty. The work deftly takes the woman’s body—gazed at in the name of beauty—and reappropriates it to create a ripple in the history of female bodies within artistic expression. Created by Florentina Holzinger, Europe’s most sought-after artist, and female dancers between their twenties and eighties, this outstanding work is as sensational as it is confrontational.

Florentina Holzinger

Born in Austria, Vienna in 1986, Florentina Holzinger is a dancer and choreographer who lives and works in Amsterdam and Vienna. She studied choreography at the School for New Dance Development (SNDO) in Amsterdam. Her works consciously play with the shifting boundaries between high culture and entertainment and explore different modes of female representation. She created the trilogy *Recovery* (2017), *Apollon* (2017) and *TANZ* (2020). In 2021 Artistic Director of Volksbühne René Pollesch announced Holzinger as a permanent member of his creative team. In 2020 TANZ was also invited to Theatertreffen 2020 and awarded the Nestroy award for Best Director.

Credits (TANZ)

Concept, Performance, and Choreography: Florentina Holzinger | Performance by and with Renée Copraij, Beatrice Cordua, Evelyn Frantti, Lucifire, Lydia Darling, Annina Machaz, Netti Nüganen, Suzn Pasyon, Laura Stokes, Veronica Thompson, Josefin Arnell, Florentina Holzinger | Video Design and Live Camera: Josefin Arnell, Xana Novais | Sound: Stefan Schneider | Lighting and Technical Director: Anne Meeussen | Stage Technician: Stephan Werner | Rigger: Dörte Wilfroth | Technical Assistant: Koen Vanneste | Set Design: Nikola Knezevic Stage Assistant: Camilla Smolders | Dramaturge: Renée Copraij, Sara Ostertag Stunt Support: Haeger Stunt & Wireworks | Production Management: Something Great (Berlin - DE) & DANSCO (Amsterdam - NL) | International distribution: Something Great (Berlin - DE) | Japanese surtitles: Yumiko Deguchi | Produced by Spirit | Co-produced by Tanzquartier Wien, Spring Festival Utrecht, Productiehuis Theater Rotterdam, Mousonturm Frankfurt, Arsenic Lausanne, Münchner Kammerspiele, Take Me Somewhere Festival, Beursschouwburg, deSingel, Sophiensaele, Frascati Productions Amsterdam, Theater im Pumpenhaus, asphalt Festival | With the support of the Republic Austria Federal Ministry for Arts, Culture, the Civil Service and Sport, Section IV - Arts and Culture Stage | Funded by Cultural Department of the City of Vienna, Arts and Culture Division of the Federal Chancellery of Austria, Performing Arts Fund NL and Norma fonds NL | Performance in Kyoto supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council, Performing Arts Fund NL, Embassy of the Kingdom of the Netherlands and Austrian Cultural Forum Tokyo | With the special cooperation of Goethe-Institut Osaka Kyoto | Presented by Kyoto Experiment

23

Shows

松本奈々子、西本健吾 / チーム・チープロ 女人四股ダンス Nanako Matsumoto & Kengo Nishimoto / team chiipro | Menstruation Sumo Dance

ダンス / Dance

拠点：東京 / Based in Tokyo

24



Kyoto Imaginary Waltz, KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN, Photo by Haruka Oka

🕒 10.8 (Sat) 15:00 ★
10.9 (Sun) 13:00 / 16:00 ★
10.10 (Mon) 15:00

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前
★ポスト・パフォーマンス・トークあり

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★ Post-show talk

📍 THEATRE E9 KYOTO

🗣️ 日本語 (英語字幕あり)
Japanese with English surtitles

#新作 #ジェンダー #生理のはなし
#NewWork #gender #WombStories

あわせて楽しむ! / Check these out too!

📖 Kansai Studies (p.50)

📖 サマラ・ハーシュ (p.20)
Samara Hersch (p.20)

🌸 THE SAISON FOUNDATION

相撲と月経をむすぶ
「NEO子宮系ムーブメント」とは
いかに?

KYOTO EXPERIMENT初の公募プロジェクトで選出され、2年にわたりリサーチと制作に取り組んできた、松本奈々子と西本健吾によるパフォーマンス・ユニット「チーム・チープロ」。

2021年にリサーチを開始したふたりが最初に掲げたテーマは「ワルツ」だった。コロナ禍で「接触」が憚られるなか、京都に存在したとされるダンス芸妓の史実を起点に戦前京都と現代と接続し、想像上の他者とワルツを踊る作品を発表。続く2022年は「女性の身体性」と「触れること／触れられないこと」についてのリサーチを発展させ、「月経の再魔術化」をテーマとした作品を発表する。習俗と科学的な言説が交差しながら意味づけられてきた「月経」。本作では科学的な知識や理解を重視しつつも、それだけでは扱いきれない月経の不条理さとともに踊るための「儀式」が執り行われる。そこで導き出されるのは、股を開き、地面を踏みしめる「四股ダンス」!?! 自ら「NEO子宮系ムーブメント」と称するパフォーマンスは、四股という型を手がかりに社会の境界を軽妙に越境していく。

2年をかけて集められた膨大なリサーチを身体に取り込んだ松本と西本。ふたりが繰り出すダンスとテキストが、その絶妙な駆け引きによりぶつかり合い呼吸する本作。レクチャー・パフォーマンスの新たな“土俵”が開かれるかも。

チーム・チープロ

松本奈々子と西本健吾によるパフォーマンス・ユニット。身体と身振りの批評性をテーマに活動を続けてきた。近年は、都市における具体的な場所や時間から一つのステップを見出し、そのステップが喚起する複数のコンテキストとパフォーマンスの身体感覚や記憶の交差をあつかうダンス作品を制作している。主な作品に『20世紀プロジェクト』(2017-2018)、『皇居ランニングマン』(2019-2020)など。

クレジット(女人四股ダンス)

振付・構成:松本奈々子、西本健吾 / チーム・チープロ | 出演:松本奈々子 | 振付
コラボレーター・出演:内田結花、前田耕平 | 映像デザイン:安倍大智 | 舞台監督:
小林勇陽 | 照明:渡辺佳奈 | 音響:林実菜 | 制作:芝田江梨、奥山愛菜 / 木元太郎
(THEATRE E9 KYOTO) | プロダクションマネージャー:北方こだち | テクニカル
アドバイザー:吉本有輝子(真昼) | 字幕翻訳:河合京花

協力:有楽町アートアーバニズムプログラムYAU、一般社団法人ベンチ、豊岡演劇
祭2022 | 製作:チーム・チープロ | 共同製作:KYOTO EXPERIMENT
助成:一般財団法人地域創造[Intergenerational Thinking-世代間の対話]
主催:KYOTO EXPERIMENT

2021年度セゾン文化財団 滞在アーティスト | 令和3年度文化庁「アーティスト・
イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」
アーツカウンシル東京 2021年度トライアル事業「未来の踊りのためのプログラム」

What is the “NEO uterus movement”
which ties together sumo and
menstruation?

Nanako Matsumoto and Kengo Nishimoto are the artists behind performance unit team chiipro. They were selected for Kyoto Experiment's first open-call project and have been researching and creating for two years.

The two artists first began their research in 2021, centering it on the theme of the waltz. When the Covid-19 pandemic made people wary of physical contact, the duo presented a work in which they danced a waltz with an imaginary “other”—connecting prewar Kyoto to the present day, with the history of the dancing *geiko*¹ in Kyoto as a departure point. This year, they are further developing their research surrounding women's bodies and the theme of touching/not touching, and presenting a work on the theme of re-mystifying menstruation. Menstruation has been given meaning at the intersection of social customs and scientific discourse. In this work, while still emphasizing scientific knowledge and understanding, the group performs a ritual dance around the absurdity of menstruation, which is ungraspable through scientific discourse and understanding alone. What emerges is the *shiko*² dance which involves opening and raising the legs before stomping on the ground. The performance, which the artists call the “NEO uterus movement,” takes inspiration from the motion of *shiko* to wittily transgress a social boundary.

In this work, Matsumoto and Nishimoto embody the vast amount of research they have gathered over the past two years. The two artists' engagements in text and dance collide and respond to each other in calculated harmony. Through this, a new *dohyo*³ of lecture-performance may open up.

¹ Another word for “geisha” in Kyoto dialect.

² Traditionally refers to the ceremonial leg raising ritual done by sumo wrestlers.

³ Sumo ring

team chiipro

team chiipro is a performance group currently made up of members Nanako Matsumoto and Kengo Nishimoto. The group's practice has centered around the theme of the body and gesture's potential as critique. In recent years the group have found a particular movement or dance step from a specific place or time within a city and created dance works that deal with the intersection of the multiple contexts that these movements or dance steps evoke, as well as the physical sensations and memories of the performers. Major works include *20th Century Project* (2017-18) and *Kokyo Running Man* (2019-20).

Credits (Menstruation Sumo Dance)

Choreography and Direction: Nanako Matsumoto, Kengo Nishimoto / team chiipro
Performer: Nanako Matsumoto | Choreographic Collaborators and Performers:
Yuka Uchida, Kohei Maeda | Video Design: Daichi Abe | Stage Manager: Yuhi Kobayashi | Lighting: Kana Watanabe | Sound: Mina Hayashi | Production
Coordinators: Eri Shibata, Aina Okuyama / Taro Kimoto (THEATRE E9 KYOTO)
Production Manager: Kodachi Kitagata | Technical Adviser: Yukiko Yoshimoto
(Mahiru) | English surtitles: Kyoka Kawai Arisawa

In cooperation with YURAKUCHO ART URBANISM, bench Co. and Toyooka Theater Festival2022 | Produced by team chiipro | Co-produced by Kyoto Experiment | Supported by Japan Foundation for Regional Art Activities [Intergenerational Thinking] | Presented by Kyoto Experiment

Invited by The Saison Foundation as a resident artist in 2021/22 (Supported by the Agency of Cultural Affairs, Government of Japan in fiscal 2021)
Arts Council Tokyo, FY2021 Trial Project - Program for Dance of the Future: Call for Participants

25

メルツバウ、バラージ・パンディ、 リシャール・ピナス with 志賀理江子 | Bipolar Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga | Bipolar

ビジュアルコンサート / Visual Concert

拠点：東京、ブダペスト、ナント、宮城 / Based in Tokyo, Budapest, Nantes, and Miyagi

26



Photos by Lieko Shiga

🕒 10.8 (Sat) 19:00
10.9 (Sun) 19:00 ♡

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前

♡託児あり(p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

♡Childcare Service (p.91)

🕒 60 min (予定 | TBC)



小学生以下入場不可。作品の特性上、大音量の演出があります。
No admission for elementary school students and under. Please note this performance contains loud sound.

📍 京都芸術劇場 春秋座
Kyoto Art Theater Shunjuza

#新作 #映像 #リアルタイム編集 #ノイズミュージック
#NewWork #video #real-time-editing #NoiseMusic

あわせて楽しむ! / Check these out too!

- 👉 9.29 (Thu) 「GEIST」に聞く実験的・ミュージックの現在形(p.40)
What Geist teaches us about experimental music today (p.44)
- 👉 10.5 (Wed) 写真家 志賀理江子トーク(p.41)
Talk with Photographer Lieko Shiga (p.45)



ひたすらに歩き続け、
止まることを知らない人がいた
私たちが抑圧するものは何か

舞台を横断する巨大スクリーンには、コンクリートの道の上をひたすらに歩く人の姿が映され、音が鳴り始める。人間社会と自然の関わり、死への想像から生を思考すること、東日本大震災後は、国や巨大資本が推進した「復興計画」で抑圧され続ける人間精神の狂いの内実を追い求め、制作を続ける写真家・志賀理江子の新作映像群。2019年に発表、展示した「ヒューマン・スプリング」のコンセプトを引き継ぎ、新たな撮影を重ねられたものだ。

本ビジュアルコンサートは、映像を手がける志賀、秋田昌美によるノイズ・プロジェクト「メルツバウ」、秋田との音楽アルバム「Cuts」にも参加するドラマーのバラージ・パンディ、そして1970年代よりフランスのエクスペリメンタル・ロックを開拓し、現在も作家、ギタリストとして活動するリシャール・ピナスによる、初のコラボレーションとなる。

3者によって即興的に生み出されていく音の連なりに、リアルタイム編集でつくられる志賀の新作映像が混じり合っていく。劇場の大きな空間に響く音楽、巨大なスクリーンに照射される映像は、私たちが普段から耳の穴に機器をつっこんだまま聴いてきた音楽、手のひらのなかのスマホで観てきた映像とは、異なる体験と呼び込んでくれるだろう。身体スケールを超えて、事象を“浴びる”こと。それがまた次の、あるいは別の歩みにつながることを願って。

メルツバウ 秋田昌美によるヴィーガン・ストレイト・エッジ・ノイズ・プロジェクト。1980年代初頭のノイズ・インダストリアル・シーンに参加。2003年頃から「動物の権利」の観点からヴィーガンを実践。捕鯨反対、イルカ漁反対、毛皮反対、家畜動物の解放などをテーマに作品を制作。

バラージ・パンディ ハンガリー拠点のドラマー。ダブ、ブレイクコア、フリーインプロヴィゼーション、ノイズ、ジャズなどあらゆる経験を持ち、ヴェネチアン・スネアズ、オットー・フォン・シーラッハなど、多彩な世界のアーティストと活動。2009年以降、メルツバウのライブに参加し、共同で3枚のライブレコードをリリース。

リシャール・ピナス 音楽家・ギタリスト・作家。ジル・ドゥルーズらに哲学を学び、1970年代より活動。フランス屈指のアヴァン・ロック・グループ「Heldon」、及びその前身となる「Schizo」を創設。フランスを代表する実験音楽家、エレクトロニック・ロックの発展における中心人物として知られる。

志賀理江子 写真家。愛知県生まれ、2008年宮城県へ移住。2004年ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒業。主な展覧会に「ヒューマン・スプリング」(東京都写真美術館、2019)、「Off the Wall」(サンフランシスコ近代美術館、2021)などがある。2021年、Tokyo Contemporary Art Award(TCAA)2021-2023を受賞。

クレジット(Bipolar)

出演：メルツバウ、バラージ・パンディ、リシャール・ピナス | 映像制作・ライブ編集：志賀理江子 | 映像撮影・編集技術サポート：佐藤貴宏 | 撮影補助：栗原裕介、長崎由幹、PUMPQUAKES | 舞台監督：大田和司(京都芸術大学 舞台芸術研究センター) | 音響：西川文章、深見北斗 | 照明：高田政義(RYU) | 制作：後藤孝典、川原美保(京都芸術大学 舞台芸術研究センター) | 主な映像出演：菊池聡太郎、岩間智紀、渋谷夏海、有村麻己

共同制作：KYOTO EXPERIMENT、京都芸術大学 舞台芸術研究センター、
独立行政法人国際交流基金
共催：独立行政法人国際交流基金
主催：KYOTO EXPERIMENT、京都芸術大学 舞台芸術研究センター

A person continued to walk,
not knowing how to stop
What is it that oppresses us?

Stretching across a stage, a giant screen shows a person endlessly walking down a concrete road. Then, suddenly, a sound. This is a series of new video works by photographer Lieko Shiga, whose work delves into the relationship between human society and nature and considers life by imagining death. After the Tohoku earthquake, she pursued the truth behind the madness of the human spirit, which continues to be oppressed due to the "reconstruction plan" advanced by big capital and the state. The works develop the concept behind her work *Human Spring*, which she presented and exhibited in 2019, with newly added footage.

This visual concert marks the first collaboration between Shiga and her video works; Merzbow, a noise project by Masami Akita; Balázs Pándi, a drummer who worked with Akita on the album *Cuts*; and Richard Pinhas, who pioneered experimental rock in France from the 1970s onward, and continues to work as an artist and guitarist to this day.

The layered, improvised sounds created by the three musicians blend with Shiga's new videos, which are edited live. Headphones and a smartphone could never replicate the experience of hearing this music resonate in the large theater and seeing these images projected on the vast screen. Immerse yourself in an event that surpasses your bodily scale. It may just lead you onto a new or different path.

Merzbow Merzbow is a Vegan Straight Edge Noise Project by Masami Akita. Part of the industrial noise scene in the early 1980s. Since around 2003, he has practiced veganism from an animal rights standpoint. He has created works on the themes of anti whale and dolphin fishing, anti fur and the liberation of livestock animals.

Balázs Pándi Balázs Pándi is a drummer based in Hungary. Experienced in anything between the genres of dub, breakcore, free improvisation, noise, grindcore and jazz, he has worked and toured with various artists from around the world including Venetian Snares and Otto von Schirach. Since 2009 he has frequently played drums live with Merzbow and they have released three live records together.

Richard Pinhas Pinhas studied philosophy under Gilles Deleuze and has been active as a musician, guitarist and writer since the 1970s. He founded the band Schizo, which later became Heldon, one of France's leading Avant Rock groups, and is recognized as one of France's major experimental musicians as well as being a pivotal figure in the development of electronic rock.

Lieko Shiga Photographer. Born in Aichi, Shiga has lived and worked in Miyagi since 2008. She graduated from London College of the Arts Chelsea College of Art and Design. Major exhibitions include *Human Spring* (Tokyo Photographic Art Museum, 2019) and *Off the Wall* (The Museum of Modern Art, San Francisco, 2021). In 2021 she received the Tokyo Contemporary Art Award (TCAA) 2021-2023.

Credits (Bipolar)

Performers: Merzbow, Balázs Pándi and Richard Pinhas | Video Creation and Live Editing: Lieko Shiga | Video Shooting and Editing Technical Support: Takahiro Sato | Camera Assistant: Yusuke Kurihara, Yoshitomo Nagasaki, PUMPQUAKES Stage Manager: Kazushi Ota (KPAC) | Sound: Bunsho Nishikawa, Hokuto Fukami Lighting: Masayoshi Takada (RYU) | Production Manager: Takanori Goto, Miho Kawahara (KPAC) | Performers (Video): Sotaro Kikuchi, Tomonori Iwama, Natsumi Shibuya, Mako Arimura

Co-produced by Kyoto Experiment, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of the Arts, The Japan Foundation | Co-organized by The Japan Foundation | Organized by Kyoto Experiment, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of the Arts

27

梅田哲也 | リバーウォーク Tetsuya Umeda | Riverwalk

パフォーマンス / Performance

拠点: 大阪 / Based in Osaka



Photo by Yuko Amano

28

🕒 10.13 (Thu)-10.14 (Fri)
17:00 / 17:20 / 17:40 / 18:00
19:00 / 19:20 / 19:40 / 20:00
20:20

10.15 (Sat)-10.16 (Sun)
13:00 / 13:20 / 13:40 / 14:00
15:00 / 15:20 / 15:40 / 16:00
16:20

受付開始は開演の30分前、開場は開演時間と同時刻。
Reception opens 30 min prior to the performance, doors open at the performance start time.

📍 京都中央信用金庫 旧厚生センター
Former welfare center, Kyoto
Chuo Shinkin Bank

⚠️ 中学生以下は保護者の同伴が必要。本作品はツアー型パフォーマンスです。会場内にはエレベーター、エスカレーターはございません。各回定員9名。
Junior high school students and younger must be accompanied by a parent or guardian. This is a tour-style performance. Please note there are no lifts or escalators at this venue. 9 people per performance.

#新作 #ツアー形式 #会場は近代建築
#NewWork #tour-performance #site-specific #pre-war-architecture

あわせて楽しむ! / Check these out too!

- 📖 ティノ・セーガル (p.38)
Tino Sehgal (p.38)
- 📖 10.8 (Sat) SKF「ニューてくてく」時空を越える山歩き (p.41)
SKF: New teku teku—hiking across time and space (p.45)

日常にある些細なものごとも、
既存の認識を疑わせる

水、ペットボトル、空き缶、米、段ボール、電球、家電……、梅田哲也は、どこにでもあって誰にでも手に入れられる素材を多用する。そして、その場所の機能や性質、土地の文脈に寄り添い、時には利用しながら空間と体験する時間をつくり込む。だからだろうか、作品が占める領域とそうでないものの境界は曖昧で、極端な話、帰り道で誰かに声をかけられたとして、「これも作品だろうか……？」と疑ってしまう。

今回新たにつくられるツアー型作品も、会場の建築を活かす梅田の空間のとらえ方・介入の結果が積み重なり、展覧会とパフォーマンスの間にあるような景色となっているだろう。1930年に建てられ、かつては銀行として機能していた特徴的な3階建ての建築のなかを、観客は時間差で案内され進んでいく。建物の構造を活かしたインスタレーションで構成された各フロアでは、ガイド役あるいは作品内部の人物と出会い、小さな出来事の数々に遭遇していくことになる。観客がその場に居合わせるかどうか、何に注目するか、その行動や意識の先を絶妙に導く梅田作品は、作品の体験を自らの手で「変えられる」ことも教えてくれる。そしてそれは、私たちの日常にも介入していく。会場を出てから出会う京都のまちは、どんな風景になっているのだろう。

梅田哲也

建物の構造や周囲の環境から着想を得たインスタレーションを制作し、美術館のほか、オルタナティブな空間や屋外で作品を展開する。パフォーマンスでは、普段行き慣れない場所へ観客を誘うツアー作品、劇場の機能にフォーカスした舞台作品などを国内外で発表。また先鋭的な音響のアーティストとしても国際的に知られている。近年のパフォーマンス作品に『Composite: Variations / Circle』(2017)と『INTERNSHIP』(2016)、近年の個展に「うたの起源」(福岡市美術館、2019-2020)、「梅田哲也 イン 別府『O滞』」(別府、2020-2021)などがある。2022年度セゾン文化財団セゾン・フェローII。

クレジット(リバーウォーク)

構成・演出: 梅田哲也 | 設営アシスタント: 深野元太郎 | 出演: 坂井遼希、佐々木大空、辰巳量平、吉村裕菜 | テクニカル・コーディネーター: 夏目雅也
制作: 真鍋準介
製作: KYOTO EXPERIMENT | 特別協力: 京都中央信用金庫
助成: 公益財団法人セゾン文化財団
主催: KYOTO EXPERIMENT

THE SAISON FOUNDATION

The subtle things in everyday life
still move us, inspire us

Tetsuya Umeda uses everyday materials that anyone can find: water, plastic bottles, empty cans, rice, cardboard, light bulbs, home electronics, and more. He creates a physical space and a temporal experience by homing in on, and at times integrating, a location's nature, its functionality, and the context of the land. Perhaps this is why the boundaries that define his works are blurred. In extreme terms, if someone strikes up a conversation with you on your way home after viewing, you may wonder whether it's also part of the artwork.

Umeda's latest touring piece is built from the fruits of his spatial observations and interventions, which enable him to make the most of the venue's architecture. The result is something between an exhibition and a performance. Audience members are guided at staggered intervals through a distinctive three-floor building built in 1930, which once served as a bank. On each floor—composed of installations that utilize the building's structure—audience members encounter tour guides and people incorporated into the work, stumbling across numerous minor occurrences. Will they witness a particular moment? What will draw their attention? Umeda's work deftly leads us beyond our actions and perceptions, showing how it's possible for us to "alter" our experience of the piece. This realization then echoes in our daily life. When we emerge onto the streets of Kyoto, what kind of landscape will we see?

Tetsuya Umeda

Umeda produces installations that are inspired by and incorporate existing elements found in the environment and circumstances surrounding the exhibition space including its architectural structure. His performance works have also been presented in Japan and abroad. These include tours that invite the audience to unfamiliar places and stage works that focus on various functions found in theaters. He is also internationally renowned as a leading artist in the field of sound art. Recent performance works include *Composite: Variations/Circle* (2017) and *INTERNSHIP* (2016) and solo exhibitions include *On the Origin of Voices* (Fukuoka Art Museum, 2019-2020) and *Tetsuya Umeda in Beppu "Zero-Tai"* (Oita, 2020-2021). Umeda is a 2022 Saison Fellow II.

Credits (Riverwalk)

Concept and Direction: Tetsuya Umeda | Set-up Assistant: Gentaro Fukano
Performers: Haruka Sakai, Sora Sasaki, Ryohei Tatsumi, Erina Yoshimura
Technical Coordinator: Masaya Natsume | Production Manager: Shunsuke Manabe | Produced by Kyoto Experiment | With the special cooperation of Kyoto Chuo Shinkin Bank | Supported by The Saison Foundation | Presented by Kyoto Experiment

29



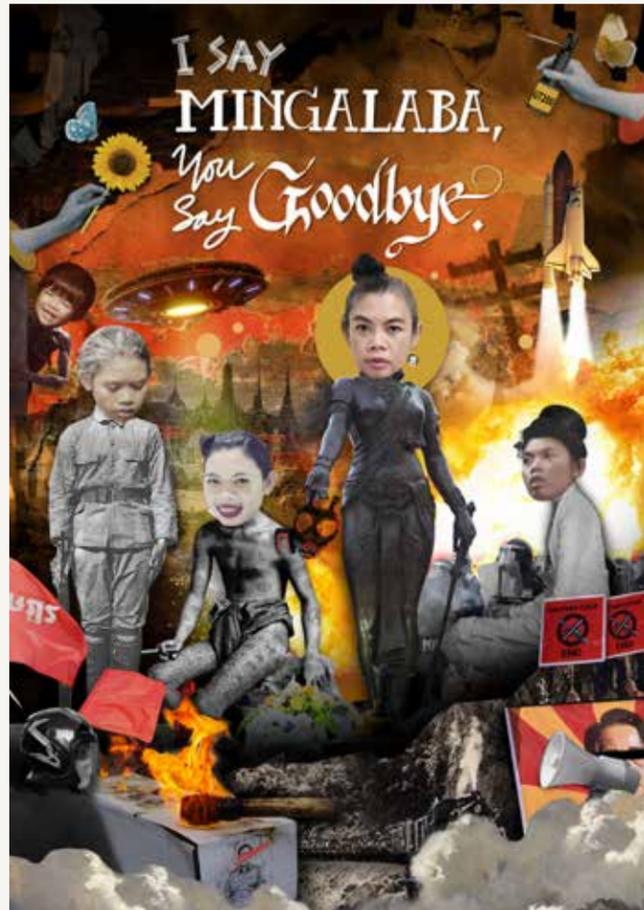
60 min (予定 | TBC)

ジャーナルン・パンタチャート ハロー・ミンガラバー・グッドバイ

Jarunun Phantachat I Say Mingalaba, You Say Goodbye

演劇 / Theater

拠点：バンコク
Based in Bangkok



© Kajit Pramsukdee

🕒 10.15 (Sat) 19:00
10.16 (Sun) 13:00 ★♥ / 19:00

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前

★ポスト・パフォーマンス・トークあり

♡託児あり(p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★ Post-show talk

♡ Childcare Service (p.91)

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

🗣️ タイ語、ビルマ語、日本語、英語
(日本語・英語字幕あり)

Thai, Burmese, Japanese and
English with Japanese and English
surtitles

#新作 #タイ #ミャンマー #政況と個人

#NewWork #Thailand #Myanmar #politics #individual

あわせて楽しむ! / Check these out too!

📖 ミーシャ・ラインカウフ(p.36)

Mischa Leinkauf (p.36)

📖 SKF アートとポリティクス<1><2><3> (p.42-43)

SKF: Art and Politics (1), (2), (3) (pp.46-47)

私は歴史をつくり出し、
歴史は私に影響する

「歴史」として共有されるストーリーと個人的な出来事の間には、何が横たわっているのだろうか? そんな疑問に焦点を当てるのが、タイ出身のジャーナルン・パンタチャートが隣国・ミャンマーのアーティストや俳優たちとの協働により、個人と政治・国家の関係を描き出す新作だ。

2,400kmにおよぶタイ・ミャンマー国境線のうち、正確に定められた国境はたった59kmに過ぎない。この長らく緊張関係にある隣国にパンタチャートが興味を抱いたきっかけは、ミャンマー人アーティストとの個人的な出会いだった。ところが、コラボレーション作品の構想開始からほどなくして、2021年のミャンマークーデターが起きる。2国間を行き来できない状況で、教科書やニュース、物語などの資料を手がかりにリサーチを進めるが、調べるほどに明らかになるのは、自分がいかに隣国を知らないかということ。そこで、パンタチャートはより個人的な視点に目を向ける。4人の俳優とのオンラインまたは対面での協働を経て、各々が行った2国のリサーチに基づく戯曲を書き上げた。

こうした政治的背景をもつ本作だが、舞台そのものは意外にもコミカルに描かれている。俳優全員がジャーナルンに扮し、タイ語・ビルマ語・日本語・英語が錯綜する予想外の展開に、気づけばのめり込んでしまうに違いない。そして幕が降りたとき、観客たちの頭に浮かぶのは「信じられる言葉とは?」といったシンプルで難解な問いだ。

ジャーナルン・パンタチャート

俳優、劇作家、演出家、プロデューサー。バンコクを拠点とするフィジカル・シアター・グループB-Floor Theatreの共同ディレクター。B-Floorの数々の作品に出演・プロデュースし、アジア各国やデンマーク、米国と国際的にツアーを行っている。主な作品は『The Other Land』『Demographic Survey』、『The Bangkok Post』の10年間のトップ10作品に選ばれた『Lear and His 3 Daughters』、『2015年に国際演劇評論家協会(IATC-Thailand)のタイ部門最優秀演出賞を受賞した『Test of Endurance』など。2014年、パンタチャートはタイ現代芸術文化省から演劇の優れた功績に与えられる名誉あるシンラバトーン賞を受賞した。

クレジット(ハロー・ミンガラバー・グッドバイ)

演出・脚本:ジャーナルン・パンタチャート | 出演:パオプーム・チワーラック、ピア・インスワンナチャイ、トンチャイ・ビマーバンシー、スー
演出助手・ドラマトゥルク:タナポン・ウィルンハグン | プロダクションデザイン:スラ
チャイ・ベツセーンロート | マルチメディアデザイン:セータシリ・チャーンジャラット
ボン | 音響:カモンパット・ビムサーン | 照明:パーリター・サクンチャイワニット | 衣裳:
ニチャー・プーラナサムリット | 舞台監督:ナツスリー・ラバーイディーマン | 字幕
操作・ライブ翻訳:チャニダー・バンヤナーラミッディー | プロデューサー:ピアン
ダーオ・チャリヤパン

製作: KYOTO EXPERIMENT

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

主催: KYOTO EXPERIMENT



I create history
and history affects me

What lies between personal stories and those that are shared as "history"? Such questions are the focus of a new work by Jarunun Phantachat from Thailand, in which the relationship between individuals and politics/the state is depicted through a collaboration with artists and actors from neighboring Myanmar.

Of the 2,400 km long Thailand-Myanmar border, just 59 km are officially demarcated. A personal encounter with an artist from Myanmar sparked Phantachat's interest in the long, tense relationship between the neighboring countries. However, not long after she conceived of the collaborative project, the Myanmar coup d'état of 2021 occurred. With no way to travel between the two countries, Phantachat researched using textbooks, the news, and stories, but as she progressed, it became clear how little she knew about her neighboring country. Turning toward a more personal approach, Phantachat worked virtually as well as in person with four actors to write a play based on their own research on the two countries.

Despite its political context, the play itself is surprisingly comical. Every actor performs as Jarunun, and the unexpected mix of Thai, Burmese, Japanese, and English is sure to draw you in. When the curtain comes down, we are left with a simple yet difficult question: "What words can we believe in?"

Jarunun Phantachat

Phantachat is an actor, playwright, director, producer and co-artistic director of B-Floor Theatre, a physical theater group based in Bangkok. She has performed and produced in numerous B-Floor productions and toured internationally with the company around Asia as well as to Denmark, and the US. Her major works include *The Other Land*, *Demographic Survey*, *Lear and His 3 Daughters*, which was selected as one of the top ten productions of the decade by *The Bangkok Post*, and *Test of Endurance*, which won Best Direction in the Thai Section from the International Association of Theatre Critics (IATC - Thailand) in 2015. In 2014 Phantachat received the prestigious Silpathorn Award for outstanding merit in theatre from Thailand's Ministry of Contemporary Art and Culture.

Credits (I Say Mingalaba, You Say Goodbye)

Director and Playwright: Jarunun Phantachat | Performers: Paopoom Chiwarak, Beer Yingsuwannachai, Thongchai Pimapunsri, Suu | Assistant Director and Dramaturge: Thanapol Virulhakul | Set Design: Surachai Petsangrot | Multimedia Designer: Setthasiri Chanjaradpong | Sound: Kamonpat Pimsarn | Lighting: Palita Sakulchaivanich | Costume: Nicha Puranasamridhi | Stage Manager: Nasrey Labaideeman | Surtitle Operator and Live Translation: Chanida Panyanaramitdee | Producer: Peangdao Jariyapun

Produced by Kyoto Experiment | Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council Presented by Kyoto Experiment



未就学児入場不可。小学生以下は保護者の同伴が必要。

No admission for preschoolers. Elementary school students and under must be accompanied by a parent or guardian.

フォースド・エンタテインメント もしも時間を移動できたら / リアル・マジック Forced Entertainment To Move In Time / Real Magic

演劇 / Theater

拠点: シェフィールド / Based in Sheffield



Real Magic



To Move in Time

Photos by Hugo Glendinning

32

もしも時間を移動できたら
To Move In Time

10.20 (Thu) 19:00 ★
10.22 (Sat) 14:00 ♥

55 min

リアル・マジック
Real Magic

10.22 (Sat) 19:00
10.23 (Sun) 14:00 ★♥

100 min

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前

★ポスト・パフォーマンス・トークあり

♥託児あり(p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★ Post-show talk

♥ Childcare Service (p.91)

京都芸術劇場 春秋座
Kyoto Art Theater Shunjuza

英語 (日本語字幕あり)
English with Japanese surtitles

#コメディ #不条理 #シニカル
#comedy #absurdity #cynicism

あわせて楽しむ! / Check these out too!

☞アーザーデ・シャーミーリー (p.34)

Azade Shahmiri (p.34)

☞ミーシャ・ラインカウフ (p.36)

Mischa Leinkauf (p.36)



安全な場所から観ていても、
あなたはその渦中にある

もしも、過去や未来にタイムトラベルできるとしたら、どんなことをするか。「友だちが失くしたのを見つけれられるかも?」「戦争も止められる?」「金持ちになるには?」といった各種アイデアをモノローグ形式で語る『もしも時間を移動できたら』。何が重要で、何に関心があり、何を換えられるか。空想・妄想・夢想の数々を広げた先に、そもそもの設定さえもはみ出していく。

一方の『リアル・マジック』は、パフォーマーの1人が頭の中に思い浮かべている言葉を、目隠しされた回答者が当てようとし、クイズマスターがあおっていくクイズショースタイル。膨らむ正解への期待、不条理な進行によるドタバタが場の可笑しみを育てていく。

1984年の結成以来、イギリス現代演劇の地平を切り拓いてきたフォースド・エンタテインメント。今回上演の2作品はシンプルな設定ながら、場に起こるパワーバランスや背後にある構造自体へと、観客の目を向けさせる。資本主義経済、都市における流通、組織の構造……、すでにあるシステムや構造の否定だけではなく、目の前にある状況に対して「私たちはどう反応できる?」「あなたならどうする?」と問いかけられる。

フォースド・エンタテインメント

1984年に設立されたイギリス・シェフィールドを拠点とする劇団。アーティストと作家のティム・エッチェルスを中心に、デザイナーとパフォーマーのリチャード・ロウドン、パフォーマーのロビン・アーサー、クレア・マーシャル、キャシー・ナデン、テリー・オコナーらが所属する。多くのゲストアーティストとコラボレートしながら、ジャンルや物語、演劇の常識を覆して生み出される彼らの作品は、ダンス、音楽、キャバレーやスグンダップコメディからも影響を受けている。2016年に国際イブセン賞を受賞。ヨーロッパや北米、日本、オーストラリアなど世界各地で、画期的で挑発的なパフォーマンスを発表し続けている。

クレジット(もしも時間を移動できたら)

作・演出: ティム・エッチェルス | 出演・コラボレーター: タイロン・ヒューギンズ
演出助手: ヘスター・チリングワース | 照明デザイン: ジム・ハリソン | 制作: ジム・ハリソン
製作: ティム・エッチェルス、フォースド・エンタテインメント
コラボレーション: タイロン・ヒューギンズ | 共同委嘱: ザ・ヤード・シアター
助成: リンカーン・センター

クレジット(リアル・マジック)

演出: ティム・エッチェルス | 考案・出演: ジェリー・キリック、リチャード・ロウドン、クレア・マーシャル | アイデア提供: ロビン・アーサー、キャシー・ナデン | 照明デザイン: ジム・ハリソン | 美術: リチャード・ロウドン | 制作: ジム・ハリソン | 音響技術: グレグ・アケンハースト、ダグ・カリール | プロジェクト補佐: アンナ・クラウス | ミュージック・エレクトロニクス&サウンド編集: ジョン・エイヴリーによるティム・エッチェルス 'Grave' ループ再生 (テレマン「ファンタジー第1番 変ロ長調」アイシヤ・オラズバエヴァ演奏より) | 製作: フォースド・エンタテインメント
共同製作: PACT Zollverein Essen, HAU Hebbel am Ufer劇場、フランクフルト・ムントゥルム劇場、Tanzquartier Wien, Attenborough Centre for the Creative Arts, サセックス大学、スボルディング・グレイ コンソーシアム-オン・ザ・ボード、PS122 NYC、ウォーカー・アート・センター、アンディ・ウォーホル美術館

日本語字幕翻訳: 出口結美子

京都公演助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、グレイトブリテン・ササカワ財団

主催: KYOTO EXPERIMENT

Even as you watch from a safe distance, you are caught in the midst of it all

If you could travel in time to the past or future, what would you do? "Would you find what your friends have lost?" "End war?" "Get rich?" *To Move In Time* explores ideas like these through performer Tyrone Huggins' monologue. What is important, what needs to be cared for, and what can be changed? As fantasies, delusions, and dreams unfold, the performance itself expands beyond its framework.

In *Real Magic*, a blindfolded participant tries to read a performer's mind, all while a quizmaster stirs up the audience. Hilarity ensues with the absurd progression of the game show and growing anticipation of the correct answer.

Forced Entertainment has been breaking new ground in contemporary theater in the UK since forming in 1984. The two works presented here are simple in their set-up, but they invite the audience to look at the emerging power dynamics and hidden structures within the space of the performance. Capitalist economies, institutional structures, distribution in cities: the works not only challenge these existing systems and structures but also ask, "How can we respond to what is in front of us?" "What would you do?"

Forced Entertainment

Forced Entertainment is a Sheffield-based theater company founded in 1984. Led by the artist and writer Tim Etchells, the company includes designer and performer Richard Lowdon alongside performers Robin Arthur, Claire Marshall, Cathy Naden and Terry O'Connor. While also collaborating with many guest artists, the company's work explores and often explodes the conventions of genre, narrative and theater itself drawing influence not just from drama but from dance, performance art, music culture, cabaret and stand-up. Touring and presenting their work internationally, the group have sustained a unique collaborative practice for more than thirty years. They were awarded the 2016 International Ibsen Award.

Credits (To Move In Time)

Writer and Director: Tim Etchells | Performer and Collaborator: Tyrone Huggins
Assistant Director: Hester Chillingworth | Lighting: Jim Harrison | Production Manager: Jim Harrison | Produced by Tim Etchells and Forced Entertainment | In collaboration with Tyrone Huggins | Co-commissioned by The Yard Theatre | Supported by Lincoln Performing Arts Centre

Credits (Real Magic)

Director: Tim Etchells | Devised and Performed by Jerry Killick, Richard Lowdon and Claire Marshall | Created with input from Robin Arthur and Cathy Naden | Lighting: Jim Harrison | Set Design: Richard Lowdon | Production Manager: Jim Harrison | Sound Technicians: Greg Akenhurst, Doug Currie | Project Assistant: Anna Krauss | Music Electronics & Sound Editing: John Avery | Loops: Tim Etchells | 'Grave', from Telemann Fantasia Number 1 in B-Flat Major: Aisha Orabzayeva | Produced by Forced Entertainment | Co-produced by PACT Zollverein Essen, HAU Hebbel Am Ufer, Künstlerhaus Moustonturm Frankfurt, Tanzquartier Wien, Attenborough Centre for the Creative Arts, University of Sussex and the Spalding Gray Consortium - On the Boards, PS122 NYC, Walker Art Center and The Andy Warhol Museum

Japanese surtitles: Yumiko Deguchi

Performance in Kyoto supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council and The Great Britain Sasakawa Foundation

Presented by Kyoto Experiment

33

アーザーデ・シャーミーリー | Voicelessness — 声なき声

Azade Shahmiri | Voicelessness

演劇 / Theater

拠点: テヘラン / Based in Tehran



©Abbas Kowsari

34

🕒 10.21 (Fri) 19:00 ★
10.22 (Sat) 17:00
10.23 (Sun) 17:00 ♥

開始受付は開演の60分前、開場は開演の30分前

★ポスト・パフォーマンス・トークあり

♡託児あり (p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★Post-show talk

♡Childcare Service (p.91)

🕒 55 min



15歳以上推奨。小学生以下入場不可。
Recommended for ages 15 and above. No admission for primary school students.

📍 ロームシアター京都 ノースホール
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

🗣️ ペルシア語 (日本語・英語字幕あり)
Farsi with Japanese and English surtitles

#2070年 #ディストピア #家族の記憶
#2070 #dystopia #family #memories

あわせて楽しむ! / Check these out too!

📖 ジャーナルナン・パンダチャート (p.30)

Jarunun Phantachat (p.30)

📖 SKF アートとポリティクス <1><2><3> (p.42-43)

SKF: Art and Politics (1), (2), (3) (pp.46-47)



2070年から照射される現代は、「今」とどう重なり合うか

「未来の世代は、私たちの時代をどのように判断するのだろうか?」

政治やテクノロジー、芸術に限らず、すべての分野において、常に投げかけられるべき問いのひとつだ。本作の随所にみられる現代社会へのまなざしも、その問いを根っこに持っている。

作品の舞台は2070年。表現の自由が抑圧されディストピアと化した世界。若い女性が50年以上前に失踪した祖父の真相を突き止めようと奮闘し、物語はドライブしていく。言論統制され、過去に起きた不都合な事実を事実として公言できない世界に、主人公が得られる真実とはなにか。

脚本・演出・出演をつとめるのは、イラン最大の都市テヘランを拠点に活動し、劇作家、パフォーマー、元ジャーナリストなど多様な顔を持つアーザーデ・シャーミーリー。自身の経験から生まれた本作は、過去の不当な状況がどのように女性を動かしていくか、また、書類や映像、音声などを通して彼女自身の物語がどのように再構築されていくかを観客に追体験させる。ある出来事について証拠がない場合、それはその出来事が起こらなかったことになるのか? もし、証拠が確認できれば、それはその出来事が起こったことになるのか? 現代を生きる「私たち」の物語としても見る事ができる。

アーザーデ・シャーミーリー

シアターアーティスト、パフォーマンスメーカー。2009年にテヘラン大学演劇学科を卒業し、芸術学の博士号も取得。シャーミーリーの作品は、演劇、パフォーマンス、インスタレーションの形態を横断する。テキストと並んで、映画、ビデオ、音と視覚の素材のコラボレーションが彼女の創作の中心となっている。シャーミーリーの作品は、テヘラン、光州、ケララ、ウィーン、チューリッヒ、バーゼル、エディンバラ、ブリュッセル、ベルリン、ジュネーブ、マンハイムなど、ヨーロッパとアジアの様々な劇場やフェスティバルで上演されている。

クレジット (Voicelessness — 声なき声)

コンセプト・演出: アーザーデ・シャーミーリー | 脚本: ソヘイル・アミールシャリーフィー、アーザーデ・シャーミーリー | 映像: ソヘイル・アミールシャリーフィー | 出演: シャーディー・キヤラムルーディー、アーザーデ・シャーミーリー | 照明デザイン、技術監督: サバー・キャスマーイー | 作曲: アディーブ・ゴルバーニー | 技術オペレーション: レイラー・アフマディー、アーバーデ | 字幕翻訳: 藤元優子

共同製作: クンステンフェスティバルデザール、チューリヒ・シアター・スペクトァル
初演: クンステンフェスティバルデザール (ブリュッセル, 2017年5月)
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (国際芸術交流支援事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
主催: KYOTO EXPERIMENT

How does the present age, illuminated from the year 2070, overlap with "today"?

"How will future generations understand our era?"

This question is one that should be considered within the fields of politics, technology, the arts, and beyond. It is also at the root of the perspective toward contemporary society found throughout *Voicelessness*.

The year is 2070. The setting is a dystopian world where freedom of expression is suppressed. The story centers on a young woman's struggle to discover the truth about her grandfather who disappeared more than 50 years ago. In a world where speech is controlled and inconvenient facts about past events cannot be publicly stated, what truth can the protagonist find?

Voicelessness is written, directed, and performed by Azade Shahmiri, a former journalist, playwright, and performer based in Iran's largest city, Tehran. Born out of her own experiences, the piece depicts how an unjust situation in the past drives a woman to recreate her own narrative through documents, collections of footage and sound recordings. When there is no evidence of an event does that mean it never happened? If the available evidence confirms the occurrence of an event, does that mean that the event occurred? This performance can be seen as a story about how we live today.

Azade Shahmiri

Shahmiri is a theater artist and performance maker. She graduated in Theater Studies from the University of Tehran in 2009 and holds a Ph.D. in Art Studies. Shahmiri's artistic practice oscillates between theater, performance, and forms of installation. Alongside the text, the collaboration between film, video, and sonic and visual materials are central to her creations. Her artistic works have been presented in various theaters and festivals across Europe and Asia in Tehran, Gwangju, Kerala, Vienna, Zurich, Basel, Edinburgh, Brussels, Berlin, Geneva, and Mannheim.

Credits (*Voicelessness*)

Concept and Direction: Azade Shahmiri | Text: Soheil Amirsharifi & Azade Shahmiri | Video: Soheil Amirsharifi | Performers: Shadi Karamroudi & Azade Shahmiri | Lighting and Technical Direction: Saba Kasmaei | Music Composer: Adib Ghorbani | Technical Operation: Leila Ahmadi Abadeh | Japanese surtitles: Yuko Fujimoto

Co-produced by Kunstenfestivaldesarts and Zürcher Theatre Spektakel
Premiere: Kunstenfestivaldesarts (Brussels, May 2017) | Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council | Presented by Kyoto Experiment

35

ミーシャ・ラインカウフ

Encounter the Spatial —空間への漂流

Mischa Leinkauf | Encounter the Spatial

展示 / Exhibition

拠点：ベルリン / Based in Berlin



© Mischa Leinkauf - alexander levy - VG Bild / Kunst

36

見えない境界を探る
徒歩、潜伏、遊び

海底に積もる砂を巻き上げながら、前方を見据え、ゆっくりと歩くミーシャ・ラインカウフの後ろ姿。作家がとらえようとしているのは「国境」という不可視の線だ。ここは、イスラエルとヨルダン、エジプト、あるいはジブラルタル海峡のスペインの飛び地セウタとモロッコのあいだ。本展で紹介する作品《Fiction of a Non-Entry(入国禁止のフィクション)》は、越境困難な陸路ではなく人の手の及ばない海底で、その境界を実際に跨ごうと歩き続ける作家自身のドキュメンタリーでもある。

また、ラインカウフは東日本大震災直後の東京を起点に、モスクワ、カラコルム、アテネ、ウィーン……と移動を繰り返し、各都市の安全性を担う巨大インフラ＝地下水路や下水道、シェルターなどに潜ってきた。その暗闇から外の世界を見つめた作品《Endogenous Error Terms(内生的エラー)》も同じく展示される。

現代アートの文脈では、ブルックリン橋に掲げられていた星条旗を手作りの白い星条旗に置き替え、その様子をマティアス・ヴェルムカとともに映像作品とした《Symbolic Threats》が有名だろう。本展では、都市や国家における物理的空間のはざま、大きなコントロールシステムの歪みで遊ぶ作家の、新たな探求をのぞき見ることができる。

ミーシャ・ラインカウフ

ベルリン生まれ、在住のラインカウフは、都市環境の隠された可能性や国境、規則、建築、障壁を通じた空間のさまざまな制限を作品で扱っている。準自然的な秩序に介入することで、再コーディングのための空間を開くような状況を引き起こしている。特に、公共空間とアクセス制限のある非公共空間の境界線に焦点を当て、パフォーマンスやビデオ・インスタレーション、映像、写真を含むクロスメディア作品を制作。ベルリン国際映画祭、東京都現代美術館、マニフェスタ11、ストックホルム近代美術館などの映画祭、美術館、アートスペースで国際的に展示されている。

クレジット(Fiction of a Non-entry(入国禁止のフィクション))

アーティスト、ディレクター、プロデューサー：ミーシャ・ラインカウフ
水中カメラ：Paul Rohlf | 音響：エド・ダベンポート
所蔵：ミーシャ・ラインカウフ、alexander levy Berlin-VG Bild/Kunst

クレジット(Endogenous Error Terms(内生的エラー))

アーティスト、ディレクター、カメラ、プロデューサー：ミーシャ・ラインカウフ
所蔵：ミーシャ・ラインカウフ、alexander levy Berlin-VG Bild/Kunst

展示設営：十河陽平 | 映像設営：小西小多郎 | 音響設営：瀧口翔
グラフィックデザイン：ティルマン S. ウェンデルシュタイン(75W)
コーディネーター：中谷圭佑(京都芸術センター)
主催：KYOTO EXPERIMENT

Exploring invisible borders
Walk, hide, play

We see the figure of Mischa Leinkauf from behind—as he walks slowly with his gaze forward, the sand on the ocean floor disperses. Here, the artist is trying to capture the invisible “border.” This is a space between Israel and Jordan or Egypt, or that between Morocco and the Spanish enclave of Ceuta by the Strait of Gibraltar. This work, *Fiction of a Non-Entry*, is also a documentary about the artist himself trying to cross the border, not by the overland routes which would be arduous to traverse, but at the bottom of the ocean beyond the reach of humans.

Another work which will be on exhibit is *Endogenous Error Terms*. Starting in Tokyo immediately after the Tohoku earthquake, Leinkauf has visited Moscow, Karakorum, Athens, and Vienna, among other places—delving into the massive infrastructure, such as underground waterways, sewers and shelters which uphold the security of each city. This work observes the outside world from the darkness of these structures.

In the context of contemporary art, perhaps Leinkauf's most well-known work is the film, *Symbolic Threats*, in which he and Matthias Wermke swapped out the stars and stripes on the Brooklyn Bridge for hand stitched stars and stripes in white. This exhibition offers a glimpse of Leinkauf's new explorations, where he plays with the distortions of large control systems and the tangible spaces between cities and nations.

Mischa Leinkauf

Berlin born and based artist Mischa Leinkauf deals with the hidden possibilities of urban environments and various kinds of limitations of spaces through borders, rules, architecture and barriers. By intervening in quasi-natural systems of order, he provokes situations that open up spaces for recoding. In particular, Leinkauf focuses on the borders between public and restricted-access or non-public spaces. His cross-media artistic practice includes performative interventions, video installations, films and photographs. His works are shown internationally at film festivals, museums, and art spaces including Berlinale, Museum of Contemporary Art Tokyo, Manifesta 11, and Helsinki Art Museum.

Credits (Fiction of a Non-entry)

Artist, Director and Producer: Mischa Leinkauf | Underwater Camera: Paul Rohlf | Sound: Ed Davenport | Courtesy of the artist & alexander levy Berlin - VG Bild/Kunst

Credits (Endogenous Error Terms)

Artist, Director, Camera and Producer: Mischa Leinkauf | Courtesy of the artist & alexander levy Berlin - VG Bild/Kunst

Exhibition set up: Yohei Sogo | Video setup: Kotaro Konishi | Sound setup: Sho Takiguchi | Graphic Design: Tilmann Steffen Wendelstein (75W) | Exhibition Coordinator: Keisuke Nakaya (Kyoto Art Center) | Presented by Kyoto Experiment

🕒 10.1 (Sat)-23 (Sun) 10:00-20:00

*10.1 (Sat)のみ22:00までオープン
Open until 22:00 on 10.1 (Sat).

📍 京都芸術センター ギャラリー北・南
North and South Gallery, Kyoto Art Center

#入場無料 #映像展示 #国境 #都市
#FreeAdmission #video-exhibition #borders #metropolis

あわせて楽しむ! / Check these out too!

- 📍 10.8 (Sat) SKF「ニューてくてく」時空を越える山歩き (p.41)
SKF: New teku teku—hiking across time and space (p.45)
- 📍 Kansai Studies (p.50)

37

ティノ・セーガル | これはあなた Tino Sehgal | This You

ライブアート / Live Art

拠点: ベルリン / Based in Berlin



Japanese Garden, Photo by Koroda Takeru

🕒 10.1 (Sat)-10.23 (Sun) 10:00-18:00

月曜休館 (10月10日は祝日のため開館)

Closed on Mondays, except 10.10

#入場無料 #屋外 #庭 #あなたのために歌います
#FreeAdmission #outdoor #garden #TheySingForYou

あわせて楽しむ! / Check these out too!

☞ ミーティングポイント (p.14)

Meeting Point (p.14)

☞ メルツバウ、バラージ・バンディ、リシャール・ピナス with 志賀理江子 (p.26)

Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga (p.26)

DANCE REFLECTIONS
BY VAN CLEEF & ARPELS

<https://www.dancereflections-vancleefarpels.com/en>

一度として同じかたちにならない 行為と場のクリエイション

ヴァン クリーフ&アーペルによるプログラム「Dance Reflections」と、KYOTO EXPERIMENTのコラボレーションプロジェクトが始動。初年度となる今回は、世界的に注目されるアーティスト、ティノ・セーガルによる《これはあなた》(2006年初演)を日本初披露する。本作に加え、ポストモダンダンスの源流とその継承について紐解くビデオダンス企画とシンポジウムも並行して開催予定。

セーガルは、絵画や彫刻のような“もの”をつくるのではなく、ある“指示”をインタープリター=翻訳者と呼ばれる参加者に出し、それが訪れる人たちの前で実行され体験が立ち上がる、ということ自身を創作としている。そのため、セーガルの作品は写真や映像で記録されることがなく、その場でしか見ることができない。

《これはあなた》は、京都市京セラ美術館の日本庭園が舞台。ここでは、翻訳者が歌い手となって、開かれた庭園を訪れる人たちと1対1で向き合い、とびきり気さくに、親密なかたちで人々が目にするものを翻訳し伝えてくれる。それは、そのときその場所でしか得られない、はかなくも記憶に残る体験となるだろう。

ティノ・セーガル

1976年ロンドン生まれ。ベルリンで政治経済を、エッセンのフォルクヴァンク芸術大学でダンスを学ぶ。現在はベルリンを拠点に活動。“constructed situations”と呼ばれる、人間の身体や声、社会的相互作用のみを使って構成されたインスタレーション作品で知られる。社会的な出会いの一瞬のジェスチャーや繊細さに焦点を当て、物質的な対象ではなく、参加と開かれた交換を価値の主題とする。これまでにグッゲンハイム美術館(NY、2010)、テート・モダン(ロンドン、2012)、パレド・トーキョー(パリ、2016)、ブレナム宮殿(オックスフォード、2021)などで個展を開催。

クレジット(これはあなた)

アーティスト: ティノ・セーガル | プロデューサー: コーラ・ジアンノッラ、早川葉南子
企画協力: 国枝かつら(京都市京セラ美術館 アソシエイト・キュレーター)
謝辞: セルジュ・ローラン(ヴァン クリーフ&アーペル ダンス&文化プログラム ディレクター)
主催: KYOTO EXPERIMENT、Dance Reflections by ヴァン クリーフ&アーペル

関連企画

ティノ・セーガル『これはあなた』に加え、ポストモダンダンスの源流とその継承について紐解くビデオダンス上映とトークを、期間中に京都市京セラ美術館で開催します。

① フォーエバー・ポストモダンダンス

日程: 10.2(日)

11:30-12:30 映像上映

12:40-14:10 トーク

② ポストモダンダンスとビジュアルアーツ

日程: 10.21(金)

18:00-19:00 映像上映

19:10-20:40 トーク

会場: 京都市京セラ美術館 講演室、参加無料(要事前予約。ウェブサイトから予約)
映像上映とトークの詳細についてはウェブサイトをご覧ください。

キュレーション: 中島那奈子(ダンス研究者、ダンスドラマトウルク)

主催: KYOTO EXPERIMENT、Dance Reflections by ヴァン クリーフ&アーペル

A singular creation born from a site-specific act

Kyoto Experiment and Dance Reflections by Van Cleef & Arpels have launched a collaborative project. For the project's first year, globally acclaimed artist Tino Sehgal's *This You* (premiered in 2006) will be presented for the first time in Japan. Held in parallel to this live work, a video-dance screening and symposium will unpack the origins and legacies of postmodern dance.

Rather than taking the form of objects, like paintings or sculptures, Sehgal's work involves giving instructions to participants who enact these for visitors to create an experience. Sehgal's works are not documented through photographs or video, and so can only be experienced in person.

This You takes place in the Japanese garden of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art. A singer interacts one-on-one with visitors, creating an ephemeral and memorable experience while translating what others see in a candid and intimate way.

Tino Sehgal

Born in 1976 in London and based in Berlin, Sehgal creates installations known as “constructed situations.” He studied political economy in Berlin and pursued dance at the Folkwang University of the Arts in Essen. Sehgal is known for artworks composed exclusively using the human body, voice, and social interaction. His artistic practice focuses on the fleeting gestures and subtleties of social encounters, with participation and open exchange as the subjects of value, rather than material objects. He has had solo exhibitions at the Guggenheim Museum (New York, 2010), Tate Modern (London, 2012), Palais de Tokyo (Paris, 2016) and Blenheim Park & Gardens (Oxford, 2021) among others.

Credits (This You)

Artist: Tino Sehgal
Producers: Cora Gianolla, Hanako Hayakawa
Curatorial Cooperation: Katsura Kunieda (Associate Curator, Kyoto City KYOCERA Museum of Art)
Special acknowledgement to Serge Laurent (Van Cleef & Arpels' Director of Dance & Culture Programs)
Co-presented by Kyoto Experiment and Dance Reflections by Van Cleef & Arpels

Related Events

Held in parallel to Tino Sehgal's *This You*, a number of dance video screenings and talks will unpack the origins and legacies of postmodern dance.

① Forever Postmodern Dance

Date: 10.2 (Sun)

11:30-12:30 Screening

12:40-14:10 Talk

② Postmodern Dance and Visual Arts

Date: 10.21 (Fri)

18:00-19:00 Screening

19:10-20:40 Talk

Venue: Lecture Room, Kyoto City KYOCERA Museum of Art
Reserve through the festival website. (Admission free, limited capacity)

Please see the festival website for detailed information about the screenings and talks.

Curated by Nanako Nakajima (Dance Researcher and Dramaturge)

Co-presented by Kyoto Experiment and Dance Reflections by Van Cleef & Arpels

Super Knowledge for the Future [SKF]

出演アーティストによる貴重なトークから、上演作品がテーマとする現代社会やカルチャー、政治トピックについてのレクチャー、山歩きツアーまで。舞台芸術と観客をつなぎ、未来への新しい視点や思考を獲得していくプログラム。Showsと合わせて参加し、作品理解を深めるのはもちろん、「今気になること」を知るための単発参加もお気軽に。

#レクチャー #ワークショップ #アーティストと話そう #無料講座あり

トーク

イベント①

『TANZ(タンツ)』をめぐるトーク

2021 SPRINGで映像上映した『Apollon』において、そのぶっ飛んだ女性の身体表象で京都の観客の度肝を抜いたフロレンティナ・ホルツィンガー。その後制作され代表作となった『TANZ』が、本フェスティバルで日本初演を迎えるにあたり(p.22)、作品テーマである女性の身体への眼差し、固定化された価値観への逆襲のあり方などを基軸にトークイベントを開催する。ゲストは、日本におけるドラッグクイーンの草分けであるシモーヌ深雪と、現代アートから舞台芸術まで縦横無尽な視点を持つ編集者・小崎哲哉。『TANZ』はその過激な表現に注目が集まりがちだが、この機会に多様な視点から作品を読み解いていきたい。

日時 9.25⑩ 18:00-19:30
会場 UrBANGUILD(アバングルド)
ゲスト シモーヌ深雪(シャンソン歌/ Drag-Queen)、小崎哲哉(ICA京都 REALKYOTO FORUM編集長)
聞き手 KYOTO EXPERIMENT共同ディレクター
料金 ¥1,000(1ドリンク付き)
予約 ウェブサイトより申込(先着順)

KYOTO EXPERIMENT YouTubeチャンネルにて、後日アーカイブ配信あり



シモーヌ深雪



小崎哲哉



Photo by Yoshikazu Inoue

トーク

イベント②

「GEIST」に聞く実験的・ミュージックの現在形

関西を拠点に「goat」「YPY」の活動のほか、近年では太鼓芸能集団「鼓童」への作曲提供など、高い強度と実験性を備えた展開を続ける日野浩志郎。彼が演出を手掛ける複合的な音空間を混在させる全身聴取ライブ「GEIST」、その制作メンバーに、現代における実験音楽の多様な在り方や、その今日的意義、方向性について実際に劇場空間で音源を聴きながら話を聞く。パフォーマンスアートとしての音楽、その野心的な実験性について、思考を掘り下げる機会となる。

日時 9.29⑩ 18:00-20:00
会場 京都芸術劇場 春秋座
ゲスト 石川琢也(アートディレクター)、白石晃一(美術家・研究者)、城一裕(研究者・アーティスト/オンライン登壇)、日野浩志郎(音楽家・作曲家)
聞き手 塚原悠也(KYOTO EXPERIMENT共同ディレクター)、川原美保(京都芸術大学 舞台芸術研究センタープロデューサー)
予約 ウェブサイトより申込(参加無料・予約優先)

KPAC レクチャー・ワークショップシリーズ
 主催:京都芸術大学 舞台芸術研究センター、KYOTO EXPERIMENT
 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会

ワークショップ

フロレンティナ・ホルツィンガー ワークショップ



© Apollonia Theresa Bitzan

『TANZ』で来日するフロレンティナ・ホルツィンガー(p.22)が公演翌日にワークショップを開催。2021 SPRINGでも、オンラインを通じて作品に必要な強い身体性やトレーニング法を紹介してくれたが、今回ついにリアルで登場。格闘技やスタントなど、作品に取り入れている身体的なアプローチのみならず精神的な挑戦まで、作品創作の一端にも触れることができる機会となる。ダンス経験は必要ないが、ホルツィンガーいわく「限界まで挑戦」してみたいという人、ぜひ体験を。

日時 10.3⑩ 19:00-20:30
会場 ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ 鴨川 ホール
ファシリテーター フロレンティナ・ホルツィンガー
対象 年齢18歳以上・高校生不可(ダンス歴、経験は問いません)
言語 英語(日本語逐次通訳あり)
料金 ¥1,000
予約 ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)

特別協力:ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都

ワークショップ

サマラ・ハーシュ ワークショップ&ディスカッション



Photo by Pier Carthew

今回、『わたしたちのからだ知っていること』を日本で初めて上演するサマラ・ハーシュ(p.20)。その創作活動において、さまざまなコミュニティにおける異世代間のエクステンジにフォーカスしてきたハーシュが、関西地域のアーティストとその創作の実践を体験できるワークショップを開催する。ワークショップに加えてディスカッションの時間も設け、ハーシュの活動を存分に掘り下げることができる時間となる。「あるコミュニティにおいて、演劇を通して世代間の対話を起こすとはどういうことなのか?」と一緒に考え、自身の今後の創作活動に活かしていきたいという人こそ、参加いただきたい。

日時 10.4⑩ 17:00-19:00
会場 京都芸術センター 講堂
ファシリテーター サマラ・ハーシュ
対象 アーティストとして活動している方
言語 英語(日本語逐次通訳あり)
料金 ¥1,000
予約 ウェブサイトより申込(定員20名・先着順)

トーク

写真家 志賀理江子 トーク

10月8日(土)、9日(日)の公演(p.26)に先立ち、今回のために2年以上をかけて東北地方での映像制作を進めてきた写真家の志賀理江子が、その創作プロセスを語る。志賀にとって舞台公演における本格的な映像制作は今回が初。東日本大震災後の11年の復興の歩みの中で試行錯誤してきた制作やコンセプト、ミュージシャンとのコラボレートについて聞いていく。聞き手は、京都芸術大学教授で批評家・作家の竹内万里子。志賀の映像世界をトークで体験できる貴重な機会をお見逃しなく。

日時 10.5⑩ 17:00-18:30
会場 京都芸術劇場 春秋座
ゲスト 志賀理江子(写真家)
聞き手 竹内万里子(批評家・作家)
予約 ウェブサイトより申込(参加無料・予約優先)



志賀理江子

KPAC レクチャー・ワークショップシリーズ
 主催:京都芸術大学 舞台芸術研究センター、KYOTO EXPERIMENT
 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会

山歩きツアー

実践「ニューてくてく」時空を越える 山歩き—安祥寺上寺跡を訪ねて—

京都は世界中から人々が集まる古都だが、観光案内には載っていない面白い場所もまだまだたくさんある。主要な観光地は公共交通機関によって結ばれているが、知られざる場所にはてくてく歩いて行かなければ辿り着けない。京都盆地周辺の山の中を抜ける道を辿ってゆくと、きわめて魅力的な風景や史跡を見出すことができる。本プログラムでは南禅寺の東から山に入り、平安時代に創建され長らく廃寺となっていた安祥寺上寺跡を見て山科盆地の北へ出るコースを歴史考古学者の梶川敏夫氏のご案内で歩いてみる。「ニューてくてく」をぜひ一緒に実践してみよう。

日時 10.8⑩ 10:00-13:00(予定)
集合場所 ミーティングポイント[p.14]
所要時間 約3時間(解散場所:春秋山荘[山科・予定])
案内人 梶川敏夫(歴史考古学者)、吉岡洋(美学者/京都芸術大学教授)
予約 ウェブサイトより申込(参加無料・定員15名・先着順)

※天候により内容が変更になる場合があります。

共催:京都伝統文化の森推進協議会



レクチャー／勉強会

LGBTQ 勉強会 KYOTO EXPERIMENT 編

KYOTO EXPERIMENTで紹介する作品には、性的マイノリティの人物やそれにまつわるトピックを扱うものもあり、また、フェスティバルで上演する作品のみならず、普段目にするドラマや映画・演劇などでも同様だろう。一方で、作品を創作する側・鑑賞する側のいずれにおいても、性的マイノリティに対する知識や理解度が依然低いことは否定できない。これからの社会を生きていくために、必要な知識を身につけることが求められているのではないだろうか。この勉強会では、俳優として活躍しながら、2019年より主に俳優、劇作家、演出家、制作者に向けたLGBTQ勉強会を開催している和田華子氏をスピーカーに招き、LGBTQの基礎的な知識や日本の現状、演劇や映像の現場における就労環境などについて解説していただく。

日時 10.10(月) 11:00-14:00
会場 京都芸術センター
ミーティングルーム2
スピーカー 和田華子(俳優)
予約 ウェブサイトより申込
(参加無料・予約優先)



© Eiri Motoyoshi

上映会／トーク

アートとポリティクス<1> 沖縄、アートとアクティビズムの あいだで

2022年は沖縄が日本に「復帰」して50年の節目の年である。歴史的で政治的なアートが無言のまま沖縄に求められているような現状にあって、映画作家・福地リコは制作とアクティビズムへの関わりの方で特異な実践を続けてきた。その作品上映とトークを通じて、政治とアートの関係、アートに可能な別種の政治性への問いを開く。上映作品は、近未来の沖縄を舞台に、米国人や富裕層が暮らす安全な区域「ベース」と、その他の荒廃した区域に分断されている中、ベースから外に出て走りまわる三人の若者を描く『BOUNDARIES』(2020)と、「まなざされる沖縄」ではなく「まなざす沖縄、移動する沖縄」を切り取る『Childhood's end』(2022)。

日時 10.17(月) 18:00-20:30
会場 ロームシアター京都 ノースホール
ゲスト 福地リコ(映画監督／ライター)
聞き手 林立騎(那覇文化芸術劇場なはーと)、
KYOTO EXPERIMENT共同ディレクター
予約 ウェブサイトより申込(参加無料・予約優先)

企画：那覇文化芸術劇場なはーと、KYOTO EXPERIMENT



Childhood's end © Rico Fukuchi

トーク

アートとポリティクス<2> イメージの争奪戦—2020年代のタイ—

Showsでもタイの政治・社会をテーマに扱うが(☞p.30)、近代を振り返ると、タイという国の国民統合においては多くの「イメージ」が用いられてきた。国王を〈慈父〉とみなし国民を〈子〉とみなす、温情的=強権的な親子関係。国家の三原則を示す三色旗。テレビ、街中、映画館に氾濫する王族たちの御真影や軍人首相の肖像。2020年から続く、若者たちを中心とした民主化運動の周辺では、これらのイメージに付与されていた意味を脱構築し、再利用し、タイ社会に新たな批評の空間を生み出そうとする動きが見られる。タイ文学研究者で、パフォーマンスアーツの分野までさまざまなタイのアーティストとの親交も深い福富渉氏をゲストに迎え、文学、アート、舞台芸術などの分野の作品から、この新しい流れを検討する。

日時 10.22(土) 11:00-13:00
会場 ロームシアター京都
パークプラザ3階 会議室
ゲスト 福富渉(タイ文学研究者、タイ語翻訳・通訳者)
聞き手 森山直人(演劇批評家)
予約 ウェブサイトより申込
(参加無料・予約優先)

企画協力：森山直人



トーク

アートとポリティクス<3> ロシアのアート・アクティビズムと 戦争

ロシアの芸術を考えるときに、政治という要素を切り離すことはなかなかできない。20世紀のロシア・アヴァンギャルドは、帝国の政治体制に不満を抱き、ソ連という新しいユートピアを実現しようとした人々による運動だった。2022年2月24日、ロシアはウクライナに侵攻した。それまでも政権の腐敗や国民の無関心をアート・アクティビズムの手法で指摘し、社会に関与しようとするアーティストはたくさんいたが、今回の戦争が始まり、一般市民も反戦のポスターを持って街に立ったり、またZの人文字を作ったり、国家に対する意思表示をパフォーマンスする機会が大きく増えた。戦争は人々の何を変えるのか。ロシア文学者の上田洋子氏をゲストに迎え、プッシー・ライオットから現在の戦時下のストリート・アートまで、ロシアの反体制アートを考える。

日時 10.23(日) 11:00-13:00
会場 ロームシアター京都
パークプラザ3階 会議室
ゲスト 上田洋子(ロシア文学者、株式会社ゲンロン代表)
聞き手 森山直人(演劇批評家)
予約 ウェブサイトより申込
(参加無料・予約優先)

企画協力：森山直人



ラジオ

コミュニティラジオ @ミーティングポイント

フェスティバル会期中、KYOTO EXPERIMENTスタッフの渡邊裕史のDJによるコミュニティラジオを配信。各作品の制作秘話から、日々の会場で起こる出来事、最新イベント情報まで、あらゆる角度からフェスティバルの「舞台裏」を紹介する。ミーティングポイントが配信スタジオとなり、多彩なゲストも登場予定。実験的作品とみなさんの距離をぎゅっと縮める、音声配信プログラムに乞うご期待！詳細はウェブサイト、視聴はInstagram@kyotoexperimentへ。

日程 開催期間中の毎週木曜日 12:30-
DJ 渡邊裕史(KYOTO EXPERIMENT)



公募

批評プロジェクト 2022

演劇批評家の森山直人氏を講師に迎え、実験的舞台芸術の批評・評論を学ぶプロジェクト。参加要件は、対象演目の『TANZ(タンツ)』を鑑賞し、レビューを書いて応募すること。ここから選出された応募者(若干名)は森山氏による個別指導を受け、内容をブラッシュアップすることができる。完成原稿はKYOTO EXPERIMENTのウェブサイト、及び次回のフェスティバルマガジンに掲載予定だ。批評とはなにか?とラディカルに考えるだけではなく、ライティングを通して作品を読み込む面白さ、そのプロセスを多くの人と共有することの豊かさを体感してもらいたい。応募要項はウェブサイトを確認を。(参加無料)

☞ 昨年の選出作品はp.77に掲載されています。

講師 森山直人(演劇批評家)
応募締切 10.25(火)



Super Knowledge for the Future [SKF]

This program includes talks by this year's artists, lectures on contemporary society, culture, and politics, and a walking tour of Kyoto. The program connects you with the performing arts and offers new perspectives and thoughts for the future. Participate in conjunction with Shows to deepen your understanding of the works, or simply dive in and attend a single session.

Please note all events are in Japanese unless otherwise stated.

#lecture #workshop #talk-with-artists #free-lectures

Talk Pre-festival Talk 1: About Tanz

Florentina Holzinger's *Apollon*, which was screened at Kyoto Experiment 2021 Spring, astounded audiences with its outlandish representations of the female body. Holzinger's major work *TANZ*, which follows *Apollon*, finally has its Japan premiere at this year's festival (p.22), and to mark the event we are holding a talk that focuses on the work's themes, from the gaze on the female body to how to disrupt fixed values. We welcome guests Simone Fukayuki, a pioneer within the Japanese drag queen scene, and editor Tetsuya Ozaki, who has a wide perspective ranging from contemporary art to the performing arts. *TANZ* tends to garner attention for its radical expressions, but we hope this talk presents an opportunity to analyze the work from diverse viewpoints.

Date 9.25 (Sun) 18:00-19:30
Venue UrBANGUILD
Guest Simone Fukayuki(Chanson Singer/Drag-Queen), Tetsuya Ozaki (Editor)
Host Kyoto Experiment Co-directors
Fee ¥1,000 (one drink included)
Reserve through the festival website. (first come, first served)

This talk will be available to view on the Kyoto Experiment YouTube channel at a later date.



Simone Fukayuki

Talk Pre-festival Talk 2: What Geist teaches us about experimental music today

Kansai-based Koshiro Hino continues to develop his powerful and experimental practice through his work with *Goat* and *YPY*, in addition to composing for Kodo Taiko Performing Arts Ensemble over the last few years. He also directs *Geist*, a live concert that fully immerses listeners in a multiplicitous sonic space. As we listen to *Geist*'s music in the theater, we interview production members about the significance and diversity of experimental music in today's world, as well as the directions it is heading in. Kyoto Experiment has presented various projects involving experimental music, following its trends as the instruments, equipment, music formats, genres, and listening methods have become more complex over time. This is an opportunity to delve deeper into ideas about music as a performing art and the ambitious experimentation taking place in this world.

Date 9.29 (Thu) 18:00-20:00
Venue Kyoto Art Theater Shunjuza
Guest Takuya Ishikawa (Art Director), Koichi Shiraishi (Artist, Researcher), Kazuhiro Jo (Researcher, Artist / Participating online), Koshiro Hino (Musician, Composer)
Host Yuya Tsukahara (Kyoto Experiment Co-director), Miho Kawahara (Kyoto Performing Arts Center Producer)

Reserve through the festival website. (Free admission, limited capacity)

KPAC Lecture & Workshop Series
Organized by Kyoto Performing Arts Center, Kyoto University of the Arts & Kyoto Experiment
Supported by The Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council

Workshop Workshop with Florentina Holzinger

Photo by Akane Shirai

Florentina Holzinger, who is presenting her work *TANZ* (p.22), hosts a workshop after her performance. Holzinger introduced her training methods and the robust physicality necessary for her work at Kyoto Experiment 2021 Spring, albeit only in an online workshop. This year, she finally makes an in-person appearance. This is an opportunity to get a taste of her creative process—not only the physical approaches incorporated into her work, including martial arts and stunt work, but also the mental challenges. If you'd like to, as Holzinger puts it, "push yourself to the limit," this workshop is for you, even if you don't have any formal dance experience!

Date 10.3 (Mon) 19:00-20:30
Venue Goethe-Institut Villa Kamogawa Hall
Facilitator Florentina Holzinger
Participants Aged 18 years and over. No high school students. Dance experience not required.
Language English (with consecutive Japanese interpretation)
Capacity 20 (first come, first served)
Fee ¥1,000
Reserve through the festival website.

With the special cooperation of Goethe-Institut Osaka Kyoto

Workshop Workshop and Discussion with Samara Hersch

Samara Hersch presents the Japan premiere of *Body of Knowledge* at this year's Kyoto Experiment (p.20). Hersch, whose work focuses on intergenerational exchanges among various communities, holds a workshop in which Kansai artists can experience her creative practice. A discussion session accompanies the workshop, offering an opportunity to delve deeper into Hersch's work. This event is aimed in particular at those who are keen to discuss with others about how to use theater to create dialogue in a community, particularly across generations, and then incorporate the takeaways into their creative practice.

Date 10.4 (Tue) 17:00-19:00
Venue Auditorium, Kyoto Art Center
Facilitator Samara Hersch
Participants Practicing artists
Language English (with consecutive Japanese interpretation)
Capacity 20 (first come, first served)
Fee ¥1,000
Reserve through the festival website.



Talk Talk with Photographer Lieko Shiga

Photo by Lieko Shiga

Photographer Lieko Shiga spent more than two years in the Tohoku region working on the videos for the project *Bipolar* that is presented at this year's festival (p.26). She shares her creative process before the performances on October 8th (Sat) and 9th (Sun) at Kyoto Art Theater Shunjuza. This is Shiga's first time creating full-scale videos for a stage performance. In anticipation of her collaboration with musicians, we ask her about various production concepts she developed through trial-and-error during the 11-year reconstruction period that followed the Tohoku earthquake. Critic and writer Mariko Takeuchi, a professor at Kyoto University of the Arts, will serve as moderator. Experience Shiga's video world in her own words: the perfect lead-in to the performance.

Date 10.5 (Wed) 17:00-18:30
Venue Kyoto Art Theater Shunjuza
Guest Lieko Shiga (Photographer)
Host Mariko Takeuchi (Critic, Writer)
Reserve through the festival website. (Free admission, limited capacity)

KPAC Lecture & Workshop Series
Organized by Kyoto Performing Arts Center, Kyoto University of the Arts & Kyoto Experiment
Supported by The Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council

Walking Tour New teku teku: hiking across time and space— a visit to the side of Ansho-ji Kamidera

Kyoto is an ancient city visited by people from around the world, but many fascinating places are left out of the regular tour guides. While the main tourist attractions are connected by public transportation, lesser-known locations can only be reached by walking a fair distance. Strolling along a path that cuts through the mountains around the Kyoto Basin, you'll find stunning landscapes and historic sites. With archeologist Toshio Kajikawa as our guide, we enter the mountains from the east of Nanzen-ji Temple, view the site of Ansho-ji Kamidera, long abandoned after being built in the Heian era, then emerge to the north of the Yamashina Basin. Join us as we "new teku teku"!

Date 10.8 (Sat) 10:00-13:00 (TBC)
Guide Toshio Kajikawa (Historical Archeologist), Hiroshi Yoshioka (Aesthetician / Professor, Institute of Philosophy & Human Values Kyoto University of The Arts)



Photo by Robert Catto

Meeting Place Festival Meeting Point (p.14)
 Duration Approximately 3 hours
 Ending Point Near Shunju Sansou, Yamashina (TBC)
 Capacity 15 (first come, first served)
 Reserve through the festival website.
 (Free admission)

This event is subject to change due to weather conditions.

Co-presented with Council for Kyoto Traditional Forest Culture

Date 10.17 (Mon) 18:00-20:30
 Venue North Hall, ROHM Theatre Kyoto
 Guest Rico Fukuchi (Film Director /Writer)
 Host Tatsuki Hayashi (NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHArt)
 Kyoto Experiment Co-directors
 Reserve through the festival website.
 (Free admission, limited capacity)

Planned by NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHArt & Kyoto Experiment

Lecture / Study Group

LGBTQ Study Group (Kyoto Experiment Version)

Kyoto Experiment features works that include sexual minority characters or deal with related topics. This is also true of TV shows, films, and plays we encounter today. However, both the creators and viewers of these works may struggle to keep up with the significant updates to our knowledge and understanding of sexual minorities in the past few years. It could be said that we must acquire this crucial knowledge in order to live in our evolving society. In this study group, Hanako Wada, an actor and organizer of LGBTQ study groups for actors, playwrights, directors, and producers since 2019, speaks about fundamental LGBTQ issues in Japan, as well as subjects like labor issues in the theater and film industry.

Date 10.10 (Mon) 11:00-14:00
 Venue Meeting Room 2, Kyoto Art Center
 Speaker Hanako Wada (Actor)
 Reserve through the festival website.
 (Free admission, limited capacity)



Rico Fukuchi

Screening / Talk

Art and Politics (1) Okinawa—between art and activism

2022 marks the 50-year anniversary of Okinawa's reversion from the US to Japan. Working in an Okinawa where there's demand, albeit tacit, for historically and politically engaged art, Rico Fukuchi has developed a unique practice that ranges across both filmmaking and activism. Through a screening and talk, we open up conversation on the relationship between politics and art, and the possibility of a different kind of politics in art. The film screening includes *BOUNDARIES* (2020), set in the near future in a divided Okinawa; the story follows three young people who leave the safe area known as "the base," where Americans and the wealthy live, to explore the devastated zone outside. Also screening is *Childhood's End* (2022), in which Okinawa is depicted as a place with its own gaze, a place that moves, rather than as the object of another's gaze.

Talk

Art and Politics (2) Conflict of Images—2020s Thailand

Shows also deals with the theme of Thai politics and society (p.30). In recent times, images have often been used to unify the people of Thailand. There's the image of a paternalistic and authoritarian parent-child relationship where the king is the "benevolent father" and the people his "children." Or the tricolor flag representing the three principles of the nation. Portraits of royalty and military leaders flood the streets, TV screens, and movie theaters. Beginning in 2020, the pro-democracy movement, led by young people, has made efforts to deconstruct the meanings attached to these images and reappropriate them to create a new space for critique in Thai society. Sho Fukutomi, a Thai literature researcher who has close relationships with various Thai artists including in the performing arts, examines this new trend through works of literature, art, and theater.

Date 10.22 (Sat) 11:00-13:00
 Venue 3F Meeting Room, Park Plaza, ROHM Theatre Kyoto
 Guest Sho Fukutomi (Thai Literary Researcher, Thai-Japanese Translator)
 Host Naoto Moriyama (Theater Critic)
 Reserve through the festival website.
 (Free admission, limited capacity)

Planned with the co-operation of Naoto Moriyama

Talk

Art and Politics (3) Russian Art: Activism and War

It is difficult to think of Russian art without considering politics. The 20th-century Russian avant-garde was a movement born out of people's dissatisfaction with the imperial political system and their desire to realize a new utopia, the Soviet Union. On February 24th, 2022, Russia invaded Ukraine. There had already been many artists who, through artistic activism, had tried to engage with society by pointing out the regime's corruption and the indifference of the people, but now that the war has started, there are many more opportunities for ordinary citizens to stand in the streets with anti-war posters, group together to form the Z symbol in public, and use performance to express their opinions about the state. What does war change in people? With Russian literature scholar Yoko Ueda, we consider Russian anti-establishment art, from Pussy Riot to current wartime street art.

Date 10.23 (Sun) 11:00-13:00
 Venue 3F Meeting Room, Park Plaza, ROHM Theatre Kyoto
 Guest Yoko Ueda (Russian Literature Specialist / Representative Director, Genron Co., Ltd.)
 Host Naoto Moriyama (Theater Critic)
 Reserve through the festival website.
 (Free admission, limited capacity)

Planned with the co-operation of Naoto Moriyama

Radio

Community Radio @ The Meeting Point

Community Radio is broadcast during the festival, with staff member Hiroshi Watanabe serving as DJ. He provides a behind-the-scenes look at the festival from all angles, from stories behind the production of each work to daily happenings at the venue and the latest event information. The Meeting Point serves as a broadcasting studio with a variety of guests scheduled to appear. Stay tuned for this audio program that brings you closer to the festival's experimental works! Check the festival website for more information and go to the festival Instagram (@kyotoexperiment) to tune in.

Date Every Thursday from 12:30 during the festival period
 DJ Hiroshi Watanabe (Kyoto Experiment)

Open Call

Performing Arts Criticism Project 2022

In this project participants learn about experimental performing arts criticism with theater critic Naoto Moriyama. Applicants are asked to see the performing arts piece *TANZ*, and to write and submit a review. Those selected get to fine-tune their articles while receiving one-on-one guidance from Moriyama. The final pieces are published on the official Kyoto Experiment website and in the next festival magazine. We hope that participants not only radically interrogate what criticism is, but also experience the joy of understanding works through writing, and of sharing this process with others. Check the festival website for the application requirements (participation is free).

Last year's selected article is printed on p.77.

Instructor Naoto Moriyama (Theater Critic)
 Deadline 10.25 (Tue)
 Please see the Japanese festival website for information about how to apply.



© Nada Žgank





Kansai Studiesは、フェスティバルが根ざす京都や関西の「地域文化」を対象としたリサーチプログラム。アーティストと行うフィールドワークを通して、身近な地域が内包する文化や風土に光を当て、その価値やポテンシャルを自分たちの手で再発見していくものだ。

第1期(2020-2022)の参加アーティストは、大阪を拠点にする建築家ユニット dot architectsと、京都を拠点にする演出家・和田ながら。鋭敏な感覚や感性を頼りに、空間そのものを全身で咀嚼していくような2組のアプローチは、実に自由でユニーク! 日常では見過ごされてしまいがちな事柄や気づきも、細やかに、みずみずしくすくい上げていく。リサーチの過程で起こったあらゆる出来事や発見、思考は記録され、特設ウェブサイトで公開・アーカイブされる。そのすべてが、これからの芸術表現を豊かにする「原石」となる。フェスティバル期間中には、第1期リサーチを締めくくる演劇作品を発表。詳細はp.50へ!

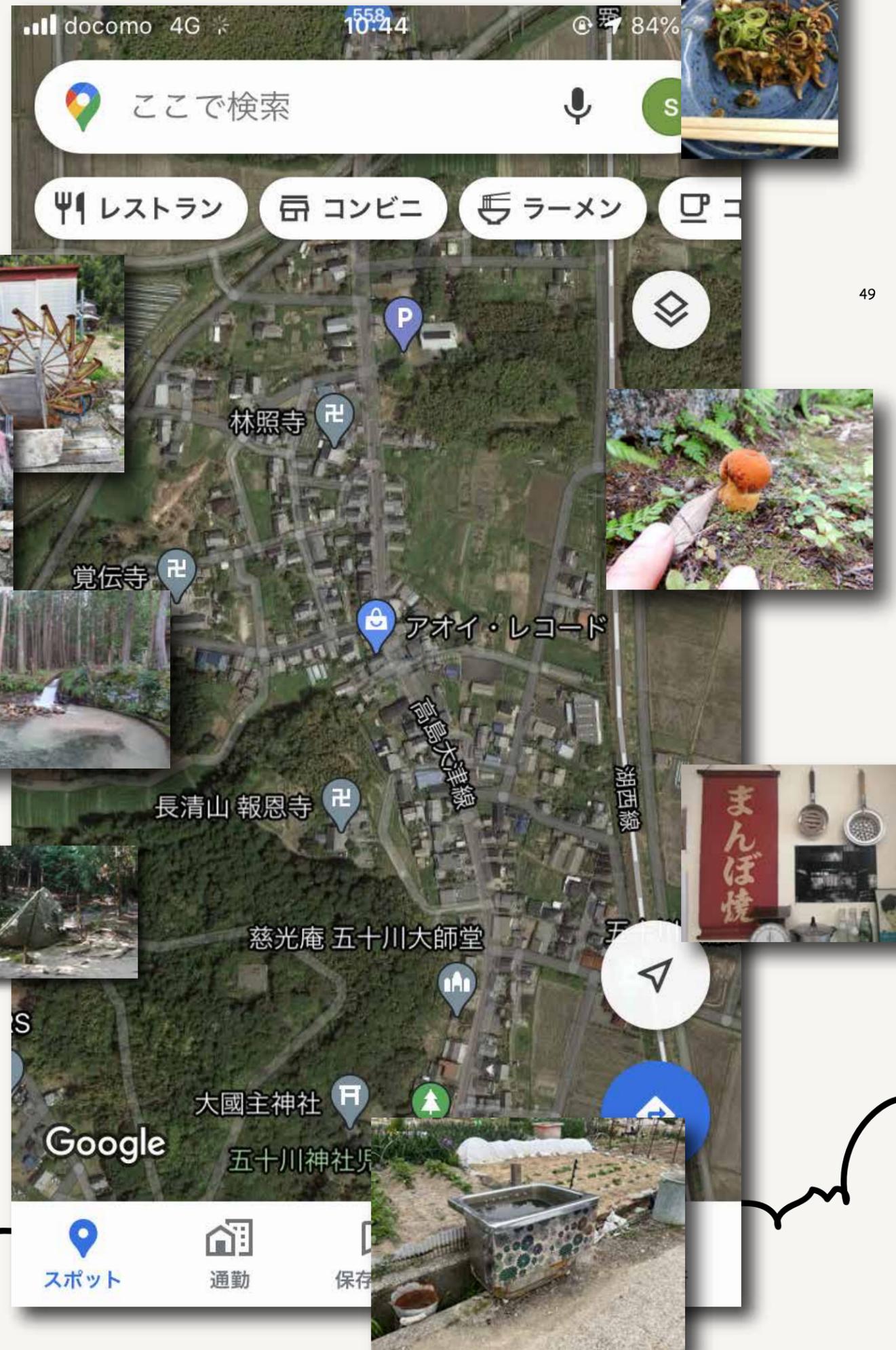
Kansai Studies is a research program focusing on the regional cultures of our festival's home Kyoto and the larger Kansai area. Through fieldwork alongside artists, we shine light on the culture and climate of these familiar regions, rediscovering their value and potential firsthand.

The artists from our first session (2020-2022) are Osaka-based architecture group dot architects and Kyoto-based director Nagara Wada. Truly free and unique, both their approaches rely on their acute senses and sensibilities to digest physical space itself with the entire body. They delicately capture and highlight afresh the moments and ideas we so often overlook in our daily lives. All the events, discoveries, and realizations that have occurred in the research process are published and archived on a special website. We hope the results of their work serve as "gemstones in the rough" to enrich art yet to come. During the festival a theater production will be presented to conclude the first phase of research. Go to p. 50 for details!

KANSAI STUDIES



kansai-studies.com



dot architects & 和田ながら うみからよどみ、おうみへバック往来

dot architects & Nagara Wada Countercurrent Journeys

演劇 / Theater

拠点：大阪、京都 / Based in Osaka and Kyoto

50

🕒 10.14 (Fri) 19:00
10.15 (Sat) 13:00 / 16:00 ★
10.16 (Sun) 16:00 ★♡

受付開始は開演の60分前、開場は開演の30分前

★ポスト・パフォーマンス・トークあり

♡託児あり(p.90)

Reception opens 60 min prior to the performance, doors open 30 min prior to the performance.

★ Post-show talk

♡ Childcare Service (p.91)

🕒 90 min (予定 | TBC)

📍 京都芸術センター 講堂
Auditorium, Kyoto Art Center

🗣️ 日本語 (英語資料配布あり)
Performed in Japanese
(English text summary available)

#新作 #リサーチから作品制作 #水 #琵琶湖
#NewWork #research-based #water #LakeBiwa

あわせて楽しむ! / Check these out too!

📖 チーム・チープロ (p.24)

team chiipro (p.24)

📖 梅田哲也 (p.28)

Tetsuya Umeda (p.28)

水をめぐる思考の断片が、 うごめきだすとき

生活のあらゆる営みをつなぐ水を手がかりに、関西の風土や文化のねっこを探求し続けてきたdot architects&和田ながら。初年度(2020年)は「水と琵琶湖」、2年目(2021年)は水と関係が深い食事に着目し、関西になじみのある「お好み焼き」をリサーチ。今期は「循環」へと大きく視点を広げ、山から川へ、そして生きる糧を育む水田へ。さらには湖や魚たち、海へとめぐってゆく水を見つめながら、3年間のフィールドワークを締めくくっていく。集大成として発表するのは、複数の短編からなるオムニバスの演劇作品。膨大な調査記録や事実(A面的なもの)と、そこから想像力を広げて放たれる自由なクリエイション(B面的なもの)。両者がせめぎ合い、あるいは並走しながら生まれていく物語は、まだ見ぬ舞台表現へと進化する可能性を秘めている。

dot architects(ドットアーキテクト)

建築家ユニット。大阪・北加賀屋にて、アート、オルタナティブ・メディア、アーカイブ、建築、地域研究、サークル、NPOなど、分野にとらわれない人々や組織が集まる「もうひとつの社会を実践するための協働スタジオ」コーポ北加賀屋を拠点に活動。設計、施工のプロセスにおいて専門家・非専門家に関わらず、さまざまな人との協働を実践している。第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2016)にて審査員特別表彰を受賞(日本館出展作家)。現在のメンバーは家成俊勝、赤代武志、土井亘、宮地敬子、池田藍、勝部涼亮の6名。

和田ながら

京都造形芸術大学 大学院芸術研究科修士課程修了。2011年に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。日常的な視力では見逃し続けてしまう膨大な細部を言葉と身体で接写する、あるいは捉えそこないつまづくさまを連ねるように作品を制作。美術家や写真家、音楽家など異なる領域のアーティストとも共同作業を行う。受賞歴に、こまばアゴラ演出家コンクール観客賞(2018)ほか。2021-22年度セゾン文化財団セゾン・フェロー。

クレジット(うみからよどみ、おうみへバック往来)

共同演出: 和田ながら、dot architects | 出演: 今村達紀、諸江翔大朗 (ARCHIVES PAY)、稲森明日香 (夕暮れ社 弱男ユニット)、dot architects | 舞台美術・照明デザイン: dot architects | 舞台監督: 十河陽平 | 照明: 萱室はづき (RYU) | 音響: 瀧口翔 | 演出助手: neco (劇団三毛猫座) | 制作: 小島寛大 (Baseline Arts Management)、平居香子 (京都芸術センター)

リサーチメンバー: dot architects、和田ながら、今村達紀、川崎陽子、塚原悠也、ジュリエット・礼子・ナツ | リサーチコーディネーター: 岩見遙果 | ウェブサイト制作・ロゴデザイン: 松見拓也 | リサーチ協力: トム・ヴィンセント、川村のり子、勝部家の皆様 | 関西の伝統的な船に関する知見提供: 小川智彦

製作: KYOTO EXPERIMENT | 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造 [Intergenerational Thinking-世代間の対話]、公益財団法人セゾン文化財団 | 主催: KYOTO EXPERIMENT

文化庁 THE SAISON FOUNDATION

When fragmentary thoughts on water begin to stir

Water, which connects all activities of daily life, has been key in dot architects & Nagara Wada's search for the roots of the Kansai region's climate and culture. In 2020, the first year of their collaboration, they looked at water and Lake Biwa. In 2021, they focused on food, which is nourished by water, researching okonomiyaki, a well-known dish in Kansai. This year, they expand their research to the circulation of water, from the mountains to the rivers, and to the rice paddies that nurture our food as well as around lakes and fish and back to the sea. This brings to an end three years of fieldwork, which culminates in an omnibus theater piece consisting of multiple short skits. There are two sides to the project: a vast amount of research records and facts (the "A-sides" of the project), and free-flowing creations spurred by imaginative explorations ("B-sides"). The stories that emerge as the two flow together and collide may just evolve into never-before-seen expressions on stage.

dot architects

dot architects is an architecture firm based in the Kitakagaya district of Osaka at Coop Kitakagaya, a self-styled "collaborative studio for practicing another society," which brings together people and organizations from across different fields and disciplines, including art, alternative media, archiving, architecture, area studies, clubs, and nonprofits. At the 15th International Architecture Exhibition of the Venice Biennale in 2016, it was one of the exhibitors in the Japan Pavilion, which was awarded a special mention. The collective currently has five members: Toshikatsu Ienari, Takeshi Shakushiro, Wataru Doi, Keiko Miyachi, Ai Ikeda and Ryosuke Katsube.

Nagara Wada

Nagara Wada graduated with a master's in art studies from Kyoto University of Art and Design. Establishing shitatame in 2011, she started working as a theater director based in Kyoto. In her practice, she creates theater that uses language and the body to zoom in on the vast amount of details that we miss in our daily lives, as if stringing together a series of failed attempts to grasp something. She collaborates with artists from such other fields as visual art, photography and music. In 2018, she won the Audience Award at the Komaba Agora Directors Concours. She is a 2021 Saison Fellow I.

Credits (Countercurrent Journeys)

Co-Direction: Nagara Wada, dot architects | Performers: Tatsunori Imamura, Shotaro Maroe (ARCHIVES PAY), Asuka Inamori (Yuuguresya Yowaotoko Unit), dot architects | Set Design and Lighting Design: dot architects | Stage Manager: Yohei Sogo | Lighting: Hazuki Kayamuro (RYU) | Sound: Sho Takiguchi | Assistant Director: neco (Gekidan Mikenezo) | Production Coordinator: Hiroto Kojima (Baseline Arts Management), Kanoko Hirai (Kyoto Art Center)

Research Members: dot architects, Nagara Wada, Tatsunori Imamura, Yoko Kawasaki, Yuya Tsukahara, Juliet Reiko Knapp | Research Coordinator: Haruka Iwami | Website Direction / Logo Design: Takuya Matsumi | With the research cooperation of Tom Vincent, Noriko Kawamura and the Katsube family. | Sharing knowledge about traditional Kansai boats: Tomohiko Ogawa

Produced by Kyoto Experiment | Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan through the Japan Arts Council and National Arts Council, Japan Foundation for Regional Art Activities [Intergenerational Thinking] and The Saison Foundation
Presented by Kyoto Experiment

51

クロストーク

話す人: dot architects 家成俊勝 × 和田ながら

A conversation between Toshikatsu Ienari (dot architects) & Nagara Wada

湖底遺跡から、大阪ベイエリアまで。
アーティストの視点で、
3年間のフィールドワークを振り返る

和田 2020年から、水や琵琶湖、お好み焼き……とリサーチを続けてきましたが、家成さんにとって一番印象的だった場所ってどこですか？ 私は琵琶湖リサーチの時に訪れた湖北の【西野水道】¹にけっこう衝撃を受けました。

家成 西野水道は確かに壮絶でしたね。水の恩恵を受けながら、同時に水害に悩まされる。治水の歴史は深いですね、執念を感じました。どこも印象的でひとつを取り上げるのは難しいところですが、奥琵琶湖の【葛籠尾崎湖底遺跡資料館】²はよかったですね。ガイドをお願いすると、近所のおじさんがママチャリで駆けつけて説明してくれる。生活者ならではの情報もあって、楽しかったです。それから、この地で発掘された縄文土器を見ていると、縄文人に思いをはせてしまいます。はじめて琵琶湖に出会った瞬間の、「ラッキー！これで生きのびられる！」という彼らの声が聞こえてくるようです。宝くじに当たった感じでしょね。和田さん、ほかはどうですか？

和田 琵琶湖唯一の有人の島である【沖島】³も印象深かったですね。車の音がしないサウンドスケープや、

From ruins at the bottom of a lake to the Osaka Bay area:
Looking back on three years of fieldwork from an artist's perspective

Wada Since 2020, we have continued to do research, first about water and then about okonomiyaki. What place left the biggest impression on you? For me, I was really taken back by the Nishino Conduit¹ in the Kohoku region, which I visited during my research trip around Lake Biwa.

Ienari The Nishino Conduit was really something. Water truly is something that offers us so many benefits, yet can also cause damage. The history of flood control is deep. I could sense the tenacity of this. There were so many impressive places that it's hard to pick one, but the Tsuzura Ozaki Lake Ruins Museum² in the Okubiwako, or the northern part of Lake Biwa was really good. A local old guy came on his bike to explain the exhibits. It was fun because the information was aimed at the level of the average person. My mind can't help going back to people in the Jomon era. I hear their voice from the moment they first encountered Lake Biwa, proclaiming how lucky they are that they can now survive. It must have been like winning the lottery. Other than the Nishino Conduit, what other places left an impression on you?

Wada Oki Island³ was also really striking. I occasion-

【千円畑】⁴の、ある種の楽園のような在り方を、折にふれて思い出しています。あと、これまで琵琶湖を集中的に見てきたからかもしれませんが、先日訪れた淀川の河口をとっても新鮮に感じました。湖面とは異なる種類の広さや、海から川上に向かって流れているかのように見える水の波立ち、周辺で産業が発展している様子。そして、埋め立てによって陸地が海に向かって延長され、そこにはごみ処理場があって、ごみが灰になり、その灰がまた埋立地を造成している……。水を調べながら、人間が風景に対してどのようにはたらきかけてきたのが少しずつわかってきました。

家成 大阪湾は埋立地がどんどん沖に出ていっていますよね。どこか、マスタープランなき埋め立てみたいな感じがしています。これから万博が開催され、その後どうなっていくんでしょうね。経済成長のための風景ですね。一度、【鶴浜】⁵から【北加賀屋】⁶まで歩きましたが、海際には見事に巨大な物流倉庫が並んでいました。北加賀屋に事務所がありますが、海を感じることはほとんどないですね。

和田 物流はリサーチのなかでもキーワードのひとつでしたね。お好み焼きをつくる時につかう小麦粉も、巨大なコンテナ船に載せられて海の向こうからやってきている。琵琶湖や疏水をたどりながらかつての舟運について思いをはせることと、現代の自分たちが物流のどこに位置しているのかとらえること——Kansai Studiesでは両面のアプローチをしてきた気がします。先日、dot architectsのメンバー勝部さんの守山のご実家で田植えをお手伝いしたときに、苗を植える行為と食べる人の顔がダイレクトにつながっているような直接性にハッとしたのですが、それは、生産や物流、そしてそこに通う水に対して自分がいかに末端かつ間接的な在り方しているのか、ということの証左でもあったように思います。

家成 そうなんです。現在のあらゆるシステムは政治や経済も含めて間接的にできている。だから自分と関係し

ally find myself remembering that almost paradise-like place with its “thousand yen” fields⁴ and soundscape devoid of cars. Perhaps this is just because I saw a lot of similar places at Lake Biwa but the mouth of the Yodo River felt so vivid when I visited it the other day: its expanse that was totally unlike the lake, the ripples on the water flowing from the sea upriver, the surrounding industrial area. Due to land reclamation, the land has extended into the sea, and there's a waste disposal facility on this reclaimed land where the garbage becomes ash, and then that ash turns into more reclaimed land. Over the course of researching about water, I gradually came to see the ways in which people have shaped the landscape.

Ienari Osaka Bay's reclaimed land keeps extending further and further out to sea, doesn't it? It sort of feels like a land reclamation project without a master plan. We have the expo coming up soon. What's going to happen after that? It's a landscape that exists for the purpose of economic growth. I walked from Tsuruhama⁵ to Kitakagaya⁶, and there were these amazing, massive distribution warehouses lined up along the waterfront. My office is in Kitakagaya, but I've almost never felt a sense of the sea where I was there.

Wada Logistics was one of the keywords in our research. The flour used when we make okonomiyaki, for instance, is loaded onto huge container ships and arrives here from across the ocean. First, tracing Lake Biwa and the canals, and reflecting on water transportation in the past. Then understanding where people today are positioned within logistics. At Kansai Studies, we seemed to take both these approaches. The other day, I was helping out with some planting at dot architects member Ryosuke Katsube's family home, in Moriyama, and I was startled by just how directly the act of planting a seedling links to the face of someone eating, which seemed like a testament to how marginally and indirectly we exist in regard to production, distribution, and the water that flows through that.

Ienari Yes. Our systems today all work indirectly, including politics and economics. So even if you

注釈 Notes



1. 西野水道: 賤ヶ岳(しづがたけ)の南に位置する西山から、琵琶湖へ向かって山腹をくり貫いてつくられた排水トンネル。江戸後期、たびたび洪水に見舞われていた西野村(現・長浜市高月町)を水から守るため、村人が私財を投じて実施。洪水によって溜まった水を排水する効果的な手段は当時なく、トンネルによって琵琶湖への排水経路を確保することは村人の長年の悲願であった。能登、伊勢から石工を招き、6年の歳月と1,275両(現在の価値にして5億円)をかけ、手作業で固い岩盤が掘り貫かれた。高さ約2m、幅約1.2m、長さ約220m。



2. 葛籠尾崎湖底遺跡資料館: 琵琶湖の湖底にある「葛籠尾崎湖底遺跡」の資料館(長浜市)。葛籠尾崎は、琵琶湖の北端部にある。北湖に突き出した岬状の土地。山がちで険しい地形が深い湖底まで続いている。大正13(1924)年末、縄文土器や弥生土器、土師器などの遺物が次々と引き上げられ、湖底遺跡の存在が明らかになった。

1. Nishino Conduit The Nishino Conduit is a drainage tunnel that runs through Mount Nishi, which stretches south to Shizugatake, and ends at Lake Biwa. During the Edo period (1603-1867), the village of Nishino (today part of Takatsukicho in Nagahama) suffered from frequent flooding, so the villagers built a tunnel through the mountain to protect their homes from the water. At the time, there was no effective means of draining water that accumulated from flooding, and building a tunnel and securing a channel for water to drain into the lake was a dream the villagers long cherished. Stonemasons were brought over from Noto and Ise, and the workers spent six years digging the tunnel with just hammers and at a cost of 1,275 ryo (the equivalent of 500 million yen today). The conduit measures around 220 meters in length, 1.2 meters in width, and 2 meters in height.

2. Tsuzura Ozaki Lake Ruins Museum The Tsuzura Ozaki Lake Ruins Museum is a museum in Nagahama introducing artefacts found in Lake Biwa. Tsuzura Ozaki is the name of a cape that protrudes into the northern end of the lake. The mountainous and steep cape extends to the deep bottom of the lake. At the end of 1924, pieces of Jomon- and Yayoi-era earthenware and Haji pottery were pulled out of the water, indicating the existence of ruins at the bottom of Lake Biwa.



3. 沖島: 琵琶湖の東に位置し、沖合約1.5kmに浮かぶ小島。周囲約6.8km、面積約1.53km²の島に約300人が暮らす。島内には車はなく、移動には徒歩か自転車を用的。



4. 千円畑: 沖島の北西部に位置する、小さく区画を分けられたパッチワーク状の畑群。この土地は、かつて学校の敷地として開拓されたが、建設計画が頓挫した。そこで島内の各家庭が千円ずつ出資し、島民が共同で所有する畑にしたことから名づけられた。各家庭が約3m四方の1区画を所有し、自給自足のための野菜や、お供え用の仏花を栽培する。

5. 鶴浜: 木津川をまたぎ、住之江区の北に隣接する大正区の埋め立て地。

6. 北加賀屋: 大阪市南西部に位置する住之江区の地域。dot architectsの事務所がある。

3. Oki Island A small island in the east of Lake Biwa, located approximately 1.5 kilometers offshore. It measures around 6.8 kilometers in circumference and has a total land size of about 1.53 square kilometers. It is home to some three hundred residents. There are no cars on the island and people get around either on foot or by bicycle.

4. Thousand Yen Fields The Thousand Yen Fields are a patchwork of fields in the northwest of Oki Island that are divided into small parcels. The land was originally developed to serve as the location of a school, but the construction plans stalled. The name comes from how each household on the island invested the titular amount of money to turn the land into fields that are owned communally by the islanders. Specifically, every household owns a parcel of roughly three square meters, on which it grows vegetables for its own consumption and flowers for making offerings to the dead at the household's Buddhist altar.

5. Tsuruhama An area of reclaimed land in Osaka's Taisho Ward, bordering the north of Suminoe Ward and straddling the Kizu River.

6. Kitakagaya An area in Suminoe Ward in the southwest of Osaka and where dot architects has its office.

ているひとつ手前までは分かって、そのもつと向こうは見えないんですね。その見えなさが、現在の歪みを生んでいます。実感できないことを考えるのは難しいですよ。だから少しでも直接性を取り戻すことからはじめないと。滋賀をいろいろリサーチして思ったのは、まさにそこで、水についてだと、沖島の方はかつて琵琶湖の水を飲んで生活していたし、高島市の【針江集落】⁷では今も湧水を大切に使っている。蛇口から出てくる水やペットボトルの水しか知らない状況はマズいなど。水以外のことも同様です。もちろん間接性がもたらした自由もあります。バランスが大切なのでしょね。非都市部の生活は、その連関にまだ想像が届きます。直接性はこれからの都市生活を考え直すヒントになりそうです。

和田 間接性と直接性のことを考えながら、演劇って間接性の芸術なのかな、と思いはじめたんですね。ものまねや代理表象とも呼んだりするように「演技」という行為も直接体験ではなくて間接的な再現といえますし、空間や舞台美術も、想像力を経由したさまざまな「見立て」によって成立します。となると、直接性にアクセスしていきたい我々 Kansai Studies が、間接性によって成立する演劇を用いて作品をつくる、というのはずいぶんアクロバティックなプロジェクトになるなあと……。『うみからよどみ、おうみへバック往来』、どんな作品になりそうでしょうか？

家成 直接と間接どちらも大切だと思います。実感と想像力。なのでその両方が並列しながら関係を及ぼしあえるような、そんなものになるといいかなあと思っています。

和田 そうですね。たしか一年目に家成さんがおっしゃっていたような気がするのですが、dot architects のアプローチは「鳥の目(俯瞰的)」、わたしのアプローチは「虫の目(微視的)」だと。その視点の違いも、共同リサーチのおもしろさでした。直接と間接、実感と想像力、鳥の目と虫の目。ええ感じて往来しながら作りたいですね！

understand the part before it gets to you, you can't see what's going on further away. And that invisibility is causing the disturbances we have today. It's difficult to think about what you can't feel. That's why we have to start with restoring a sense of directness, even if just a little bit. I realized over the course of the research I did in Shiga that people on Oki Island live their lives by drinking the water in Lake Biwa, and that the people in the village of Harie⁷ in Takashima continue to use spring water extensively. It's awful knowing the taste of water only from a faucet or a bottle. And it's the same for other things too. Of course, when things are indirect, it gives us more freedom. It's important to get the right balance. In a nonurban lifestyle, the imagination still reaches that association. Directness may provide us with hints for how to rethink urban life in the future.

Wada Wondering about what is direct and what is indirect got me thinking that theater is an indirect art form. Like how it's also called impersonation or representation, the act of "performing" is not a direct experience, but an indirect re-enactment, and the space and stage design also arise through various "allusions" that pass through the imagination. As such, Kansai Studies tries to access the direct but is creating work through the medium of theater that comes about through the indirect, making this an incredibly acrobatic project. What kind of work is *Countercurrent Journeys* going to be?

Ienari I think both the direct and indirect are important. It's like you have the actual sensation of something and you have the imagination. I want to make something in which both the direct and indirect are juxtaposed while also exerting an influence on one another.

Wada Yes. I think you said as much in the first year: dot architects takes a bird's-eye (macro) approach, while mine is an insect's-eye (micro) approach. The difference in those perspectives was also what made this joint research so interesting. The direct and indirect. Actual feeling and imagination. A bird's eye and an insect's eye. I want to make something while fluidly shuttling back and forth between these things.

7. Harie Harie is a village in the Shin'asahicho area of Takashima City, in the Kosei region of Shiga. The snow and rain that falls on the Hira Mountains becomes groundwater that then emerges as clean spring water at various locations in the area. As suggested by how they call the water from these springs "life water," local residents use it widely in their lives. The waterways that pass through the village and the system of using the water are known as Kabata (literally, riverside).

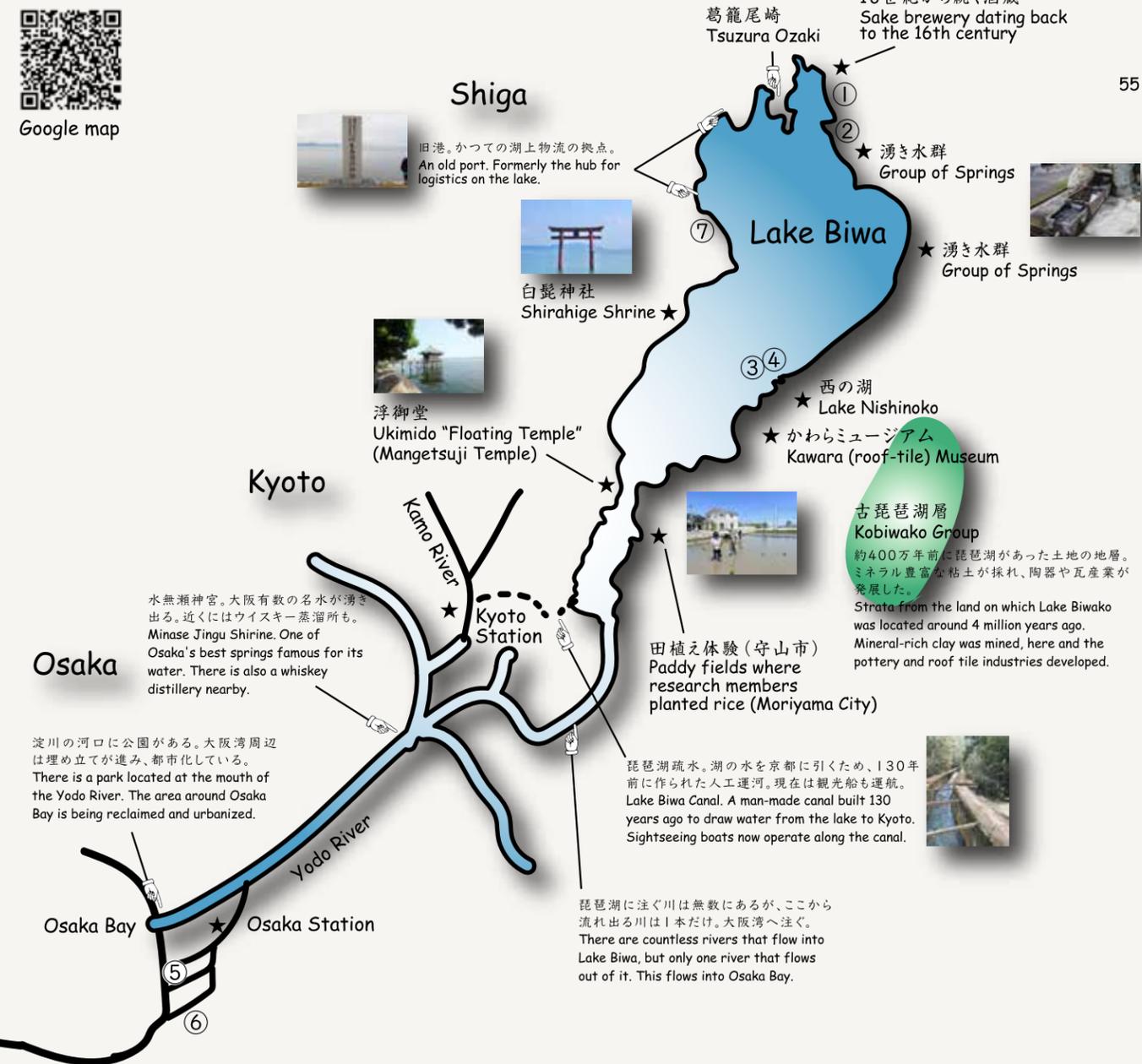
7. 針江集落:滋賀県の湖西にあたる、高島市新旭日の集落。この地域では、比良山系に降った雪や雨が伏流水となり、きれいな湧き水となって各所から湧き出ている。この湧き水を住民は「生水(しょうず)」と呼び、生活全般に用いている。集落をめぐる水路、この水を利用したシステムを「川端(かばた)」と呼ぶ。



Research MAP

3年間のフィールドワークから、「関西の水」を知る上でキーになる場所をピックアップ。①～⑦はp.52-54で紹介したスポット。詳細はGoogle mapで確認を。

We've picked some key locations in Kansai from the three years of field work that relate to water. ① to ⑦ are the spots introduced on pp.52-54. Scan the QR code to see a google maps link for more details.



湧き水 / spring water

琵琶湖がある滋賀県は、周囲を1000m級の山々に囲まれている。そのため、水資源が豊かで、天然の湧き水がたくさん。飲料水や炊事、神事などで用いられる。

Shiga Prefecture, where Lake Biwa is located, is surrounded by 1,000-meter mountains. The prefecture is rich in water resources, with many natural springs. The water is used for drinking, cooking, and Shinto rituals.

食 / food culture

良質な水と土壌に恵まれた滋賀県は、おいしい米と日本酒の産地。また、湖魚を使った独自の発酵食文化もある。海のないこの地では古来、湖魚が貴重な栄養源だった。

Shiga Prefecture has good soil and water quality, meaning it can produce delicious rice and sake. It also has a unique fermented food culture that uses fish from the lake. In the past, fish from the lake were a valuable source of nutrition in this region where there is no sea.

信仰 / nature worship

日本人は古来、水に神仏が宿ると信じ、水の恵みに感謝や畏敬の念を抱いてきた。滋賀県でも、琵琶湖や川の周りに多くの寺社が建立されている。

In the past, Japanese people believed that gods and Buddha reside in water, and have been grateful for, as well as in awe of, what water provides. In Shiga Prefecture, many temples and shrines have been built around Lake Biwa and its rivers.

Key Words

関連プログラム Related Programs



舞台芸術プロデュース講座 ～演劇・ダンス編～

地域の舞台芸術のプロデュース／企画制作領域の専門人材の育成プログラム。強力な講師陣を迎え、舞台芸術プロデュース、舞台制作、マネジメントに関する講座とワークショップを開催します。おもにユース層に向けて、地域で活動する演劇サークルや若手劇団を中心としたネットワーク構築、コロナ禍からの活動再開を促し、パワーを喚起することで、舞台芸術シーンの活性化及び地域の文化芸術振興を目指します。

期間 10月～12月 全8回(+プレ企画、番外編)
会場 ロームシアター京都 ほか
対象 舞台プロデュース、マネジメントに興味を持っている人。舞台制作業務に携わっている人。自身の団体で運営・企画に携わっている人。18歳以上。経験不問。
参加費 通し ¥3,000(初回納入)、単発受講 1回 ¥500

主催：ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、KYOTO EXPERIMENT、NPO 法人京都舞台芸術協会、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
 協力：舞台芸術制作者オープンネットワークON-PAM
 文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)、「JAPAN LIVE YELL project」、ステージ インキュベーション キョウト



Photo by Richmond Lam

アーティスト・イン・レジデンス: ダイナ・ミシェル

独自のダンス言語によって、さまざまな社会規範や既成概念を打破する作品を創作し、世界各国で発表しているカナダの振付家・ライブアーティストであり、KYOTO EXPERIMENT 2021 SPRING でも紹介したダイナ・ミシェルによる、新作のための滞在制作。2023年のフェスティバルで発表を予定している「信頼」をテーマにした新作のためのリサーチを、兵庫県・城崎と京都で展開する。滞在制作期間中には、城崎国際アートセンターとKYOTO EXPERIMENT 2022で、レジデンス成果発表のトークを開催する。

レジデンス期間 10.4(火)～10.16(日)
滞在地 城崎国際アートセンター (兵庫県豊岡市)

📍 成果発表トーク(in 城崎)
日時 10.12(水) 19:00
会場 城崎国際アートセンター
登壇 ダイナ・ミシェル
料金 無料

📍 成果発表トーク(in 京都)
日時 10.15(土) 11:00-12:30
会場 京都芸術センター ミーティングルーム2
登壇 ダイナ・ミシェル
料金 無料

主催：KYOTO EXPERIMENT、城崎国際アートセンター(豊岡市)
 助成：令和4年度 文化庁 アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業

Artist in Residence: Dana Michel

Canadian choreographer and live artist Dana Michel comes to Japan for a research residency for her new work. Previously introduced at Kyoto Experiment 2021 Spring, Michel creates and presents work internationally that breaks down various social norms and preconceived notions with a unique choreographic language. Michel will conduct research in Kinosaki, Hyogo Prefecture and Kyoto for her new work on the theme of trust, which is scheduled to be presented at the festival in 2023. During the residency period, talks will be held at Kinosaki International Arts Center and Kyoto Experiment 2022 to announce the results of the residency.

Residency Dates 10.4 (Tue)-10.16 (Sun)
Residency Location Kinosaki International Arts Center (Toyooka City, Hyogo Prefecture)

📍 Talk (in Kinosaki)
Date 10.12 (Wed) 19:00
Venue Kinosaki International Arts Center
Speaker Dana Michel
Free admission

📍 Talk (in Kyoto)
Date 10.15 (Sat) 11:00-12:30
Venue Meeting Room 2, Kyoto Art Center
Speaker Dana Michel
Free admission

Organized by Kyoto Experiment and Kinosaki International Arts Center (Toyooka City)
 Supported by the Agency of Cultural Affairs, Government of Japan in fiscal 2022

提携プログラム Partner Programs

1

京都学生演劇祭 2022

58

2010年度より京都市内で開催している学生演劇の祭典。2021年度からは野外に自らの場をつくり、「最もおもしろい演劇祭」を目指している。KYOTO EXPERIMENT共同ディレクターの塚原悠也が審査員として参加する。

日程 9.9(金)–9.19(月)祝
会場 養正児童公園『希望の広場』野外特設舞台
料金 1ブロック券／一般 ¥2,500、学生 ¥1,500 (当日は+¥500)、全ブロック通し券／一般 ¥5,000、学生 ¥3,000

従来の概念に捉われず実験的な創作を試行錯誤しチャレンジした作品及び団体に対して、〈KYOTO EXPERIMENT賞〉を設ける。

主催：京都学生演劇祭実行委員会

Kyoto Student Theater Festival 2022

Student theater festival that has been held in Kyoto since 2010. From 2021 the festival has created its own outdoor venue with the aim of becoming "the most fascinating theater festival". Kyoto Experiment co-director Yuya Tsukahara will participate as a member of the jury.

Date 9.9 (Fri)–9.19 (Mon)
Venue Special Outdoor Stage, "Kibo no Hiroba", Yōsei Jidō Park
Fee Ticket for 1 block / General ¥2,500, Student ¥1,500 (+¥500 for day tickets), Ticket for all blocks / General ¥5,000, Student ¥3,000

The "Kyoto Experiment Award" will be given to a work or group that has taken on the challenge of experimenting through trial and error and creating work unbound by conventional concepts.

Organized by Kyoto Student Theater Festival Executive Committee



2

ノイマルクト劇場 & 市原佐都子 / Q 『Madama Butterfly』

新世代の劇作家・演出家である市原佐都子(劇団Q主宰)が、オペラ『蝶々夫人』を原案に、その構造を反転し、日本/女性からの視点で西洋/男性を描き、人種やジェンダーなどの先入観を痛烈に問い直す。

日程 9.15(金)–9.17(土)
会場 ロームシアター京都 ノースホール
料金 一般 ¥3,500
ユース(25歳以下) ¥2,000
18歳以下 ¥1,000

主催：ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業)、
「JAPAN LIVE YELL project」、ステージ インキュベーション キョウト

Theater Neumarkt & Satoko Ichihara / Q Madama Butterfly

Up-and-coming playwright and director Satoko Ichihara (also director of Theater Company Q) takes the original opera "Madame Butterfly" and turns it on its head to depict the West/male from a Japanese/female perspective, poignantly challenging our preconceived notions of race and gender.

Date 9.15 (Thu)–9.17 (Sat)
Venue North Hall, ROHM Theatre Kyoto
Fee Adult: ¥3,500, 25 and Under: ¥2,000, 18 and Under: ¥1,000

Presented by ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation), Kyoto Experiment, Kyoto City, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
"JAPAN LIVE YELL project", Stage Incubation Kyoto



Photo by Druck Philip-Frowein

KYOTO EXPERIMENTのパートナーによる、舞台公演やイベントをご紹介します。こちらからカレンダーにチェックを!

Performances and events from Kyoto Experiment's partners. Put these in your calendar too!

3

豊岡演劇祭 2022

美しい自然・歴史を背景に、兵庫県豊岡市周辺で開催される演劇祭は、公式演目以外にもお楽しみがたくさん。Showsに参加しているチーム・チープロ(☞p.24)のワークインプログレスも開催します。

開催期間 9.15(金)–9.25(日)

☞KYOTO EXPERIMENT 2022×豊岡演劇祭 2022
松本奈々子、西本健吾 / チーム・チープロ
『女人四股ダンス』ワークインプログレス
日時 9.16(金) 11:30
会場 竹野子ども体験村(兵庫県豊岡市)

主催：豊岡演劇祭実行委員会
※豊岡演劇祭2022の全ラインナップは、公式ウェブサイト(<https://toyooka-theaterfestival.jp>)でご確認ください

Toyooka Theater Festival 2022

A theater festival held in and around Toyooka City in Hyogo Prefecture against a backdrop of beautiful nature and history. Plenty to enjoy besides the official performances. A work-in-progress of team chiipro's *Menstruation Sumo Dance*, who are participating in Shows (☞ p.24) will be presented at the festival.

Date 9.15 (Thu)–9.25 (Sun)

☞ Kyoto Experiment 2022×Toyooka Theater Festival 2022
Nanako Matsumoto & Kengo Nishimoto / team chiipro
Menstruation Sumo Dance Work In Progress
Date 9.16 (Fri) 11:30
Venue Takeno Children's Experience Village (Toyooka City Hyogo)

Organized by Toyooka Theater Festival Executive Committee
For the complete Toyooka Theater Festival 2022 lineup, please visit the official website at <https://toyooka-theaterfestival.jp>



Nanako Matsumoto & Kengo Nishimoto / team chiipro



4

高槻城公園芸術文化劇場開館記念イベント 高槻芸術時間「インターロード」

59

Showsに参加する梅田哲也(☞p.28)とアートコレクティブorangcosongによる新作を体感しよう。旧劇場空間を舞台に展開する、8日間の特別な展覧会。

日程 9.17(土)–9.25(日) *9.20(日)は休館
会場 高槻現代劇場 市民会館 (2022年7月末日閉館)及び 高槻市内
参加作家 梅田哲也、orangcosong(オランコソン)
料金 無料

主催：高槻市、公益財団法人高槻市文化スポーツ振興事業団
共催：京都芸術大学

Takatsuki Arts Theatre Opening Pre-event Takatsuki Art Hour "interlude"

Experience new works by Tetsuya Umeda, who is participating in Shows (☞ p.28) and the art collective orangcosong. A special 8-day exhibition that unfolds in an old theater space.

Date 9.17 (Sat)–9.25 (Sun)
Closed on 9.20
Venue Takatsuki Gendai Gekijo Theater Civic Hall (closes at the end of July 2022) and Takatsuki City
Participating Artists Tetsuya Umeda, orangcosong
Free admission

Organized by Takatsuki City, Takatsuki City Cultural Promotion Agency
Co-organized by Kyoto University of the Arts



Tetsuya Umeda. Photo by Yuko Amano

5

ニュー・ブランシュ KYOTO 2022

ニュー・ブランシュKYOTOは、京都市の姉妹都市であるパリ市発祥のアートイベント。第12回を迎える今年は「遊び場」をテーマに、京都市内各所で日仏アーティストによる多彩な作品が披露される。

日程 10.1㊤(1日以降も継続開催する会場多数)
会場 京都駅ビル、アンスティチュ・フランセ関西ー
京都 他、京都市内各所
料金 無料

主催：京都市、アンスティチュ・フランセ関西

Nuit Blanche Kyoto 2022

Nuit Blanche Kyoto is a contemporary art festival inspired by Nuit Blanche in Paris, a sister city of Kyoto. This 12th edition will be held under the theme of "Playground," and a variety of works by Japanese and French artists will be presented at various locations across Kyoto.

Date 10.1 (Sat) (many venues also continue to hold events after the 1st)
Venue Kyoto Station Building, Institut français du Japon - Kansai and various locations around Kyoto City
Free admission

Organized by Kyoto City, Institut français du Japon-Kansai



6

OOAK#1

『アカルナイの人々とかあるかないの人々とか』

THEATRE E9 KYOTOによる自主プロデュース公演。激動の時代に向かう東九条で、俳優と音楽家がギリシア喜劇に挑戦。異分野が相通じる言語体系を模索する。

日程 10.15㊤-16㊤
会場 THEATRE E9 KYOTO
料金 一般前売 ¥3,000、一般当日 ¥3,500
(ユース割引あり、高校生以下無料)

主催：THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)/ OOAK

OOAK#1

The Acharnians and the People That Have and Have Not

Independently produced by THEATRE E9 KYOTO. Actors and musicians take on the challenge of a Greek comedy in Higashikujo, which may be heading into a turbulent era. A search for a language system that is compatible across different fields.

Date 10.15 (Sat)-16 (Sun)
Venue THEATRE E9 KYOTO
Fee Adult ¥3,000
Day tickets ¥3,500 (Youth discounts available, free for high school students and younger)

Organized by THEATRE E9 KYOTO (Arts Seed Kyoto), OOAK



Publicity Design: Junya Hirohata

7

A GATHERING IN A BETTER WORLD

「A GATHERING IN A BETTER WORLD」は、障害を持つアーティストたちによるネットワーク構築を目的として、芸術的な分野を超えて、出会いと創造のための空間を形成するプロジェクト。ダンスコレクティブ Mi-Mi-Biによるワークショップのほか、国内外の障害を持つアーティストたちによるオンライン/オフラインギャザリングを行う。

日程 10.15㊤-16㊤ほか
会場 ゲーテ・インスティトゥート・
ヴィラ鴨川 ホール
参加アーティスト Mi-Mi-Bi from DANCE BOX、その他
料金 無料

主催：ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都

A GATHERING IN A BETTER WORLD

A GATHERING IN A BETTER WORLD is a project that aims to create a network for/by disabled artists to meet and create across artistic disciplines. In addition to workshops by dance collective Mi-Mi-Bi, there will be online/offline gatherings for Japanese and international artists with disabilities.

Date 10.15 (Sat)-16 (Sun) and other dates
Venue Goethe-Institut Villa Kamogawa Hall
Free admission

Organized by Goethe-Institut Osaka Kyoto



Photo by Junpei Iwamoto

FRINGE
Fringe: More Experiments

FRINGE「More Experiments」は、フェスティバルと同時期に京都で開催される舞台公演やイベントを紹介するプログラム。KYOTO EXPERIMENTのウェブサイトでは、ジャンル不問の公募で集まった、演劇やダンス、音楽、舞踏、朗読、マイム、展示、落語など、全29作品を紹介しています。これらの公演情報は「#more_ex」のハッシュタグでSNSにも投稿されていくので、ぜひ検索してみてください。10月の京都は、街のあちこちで舞台作品に出会えそうな予感！

62

Fringe: More Experiments introduces performances and events happening in Kyoto during the festival period. On the festival website you can find a total of 29 works gathered from an open call for submissions of any genre, including theater, dance, music, butoh, readings, mime, exhibitions, rakugo and contemporary circus! You can also search for the hashtag "#more_ex" on social media for more information. This is a great way to experience all kinds of performances all over Kyoto in October!

<https://kyoto-ex.jp/fringe>



ブックフェア Book Fair

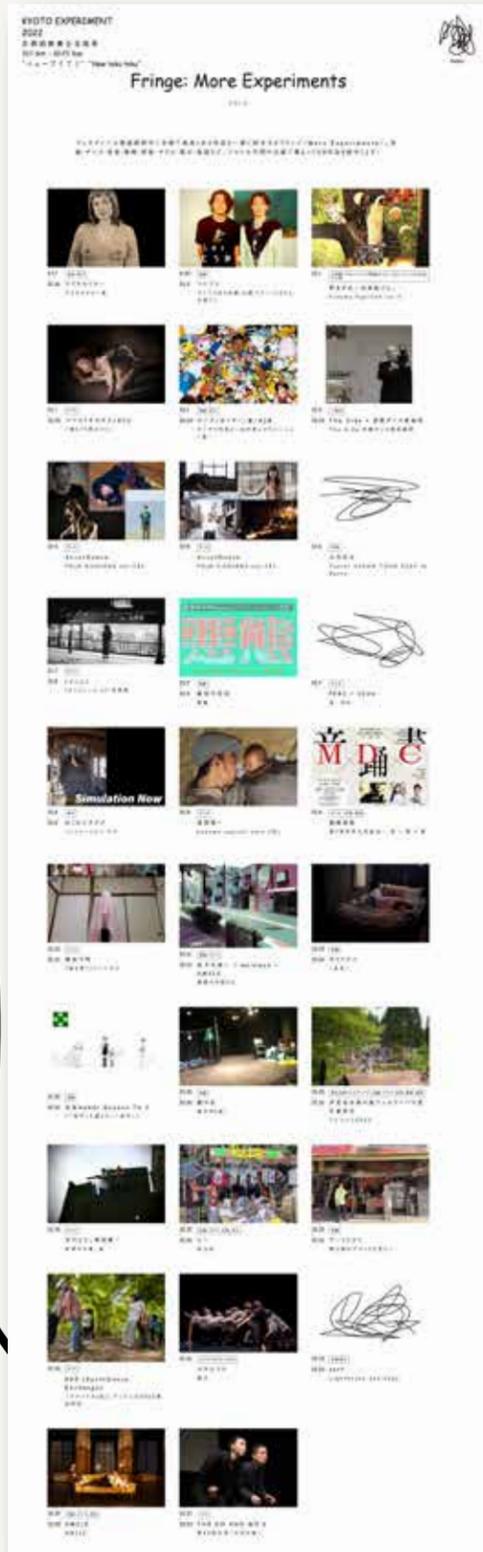
参加アーティストの関連書籍や、今年のフェスティバルのキーワード「ニューてくてく」をテーマに集めたKYOTO EXPERIMENTブックフェアを、「京都岡崎 蔦屋書店」で開催します。ここでしか購入できない、KYOTO EXPERIMENT オリジナルグッズも販売します。よりフェスティバルを楽しむために、観劇前後にぜひお立ち寄りください。

日程：10.1(土)ー10.23(日)
8:00-20:00 (現在時短営業中)
会場：京都岡崎 蔦屋書店

During the festival the Kyoto Experiment Book Fair is held at Kyoto Okazaki Tsutaya Books. In addition to books by and about the artists, there is also a series of recommended books in relation to the festival's key concept "new teku teku" as well as original festival merchandise. Visit the fair to learn more!

Dates: 10.1 (Sat)-10.23 (Sun)
8:00-20:00 (currently operating with shorter opening times)
Venue: Kyoto Okazaki Tsutaya Books

Fringe / Book Fair



コラム
Articles

63

読む、「ニューてくてく」 Reading "New teku teku"

KYOTO EXPERIMENT 2022のキーワードは「ニューてくてく」。

新しい日常が定着し、自宅にしながら何でも事足りるようになったいま、わたしたちの行動様式や身体感覚が大きく変わりつつある。そんななか、実際に「歩く」「移動する」という行為にあらためて着目することで、一体何が見えてくるだろうか？ここでは3人の研究者・批評家の論考を通して、「歩くこと」と芸術表現の関わり、そこから広がる表現の可能性を掘り下げていく。作品鑑賞と合わせて、ディープな思考の旅——これもひとつの“てくてく”——を、ぜひお楽しみください。

Kyoto Experiment 2022's key concept is "new teku teku".

Now that a new kind of daily life has taken root where we are able to do everything from the comfort of our own homes, our behavioral patterns and physical senses are no doubt undergoing major changes. Within this context, what can we discover by focusing on the actual act of walking or moving? Through the following articles by various researchers and critics we delve into the relationship between "walking" and artistic expression and the possibilities that expand from this. We hope you enjoy this journey of thoughts—another "teku teku"—in addition to viewing the performance works.

歩くという表現

細馬宏通

Walking as Expression

Hirosomichi Hosoma



歩くことは表現だ。

と、書くと、ランウェイのモデルの話かと思われるかもしれないけれど、そうではない。わたしたちの日常の歩行が、すでに表現になっている。

と、書くと、つまり歩き方の講座や教室に通って正しい歩き方を身につける話かと思われるかもしれないけれど、それでもない。

わたしたちが道を歩くとき、わたしたちの歩行は表現になっているのである。誰かがこちらに向かって歩いているのを見つけたとたん、わたしたちは、その人がどの方向に向かってどれくらいの速さで移動しつつあるか、その人は自分とぶつかりたくないかを、気にするとともに気にする。もしお互いがぶつかりそうだと思ったら、歩く速度や歩く方向を少し変化させてすれ違えるように微調整する。お互いが全く同じ側に避けてしまうこともたまにはあるけれど、そんなときでも、そのままぶつかりはせずに、歩くスピードを緩めたり、立ち止まったりして改めてお互いの歩みを再調整する。このように、わたしたちは、お互いの歩む先やその速さを、身体で表現しており、その表現をもとに、刻々と相手の次の動きを予測しあっている。

Walking is a form of expression.

This might make you think of a fashion model on a runway, but that's not what I mean. The walking we do in everyday life is already a form of expression.

This might make you think of taking classes or a course on walking to learn the proper way to walk, but that's not what I mean either.

When we walk on the road, our walking is a form of expression. As soon as we spot someone walking toward us, we inevitably wonder about the direction in which they are going, the speed at which they are moving, and whether or not they will bump into us. And then if it looks like we'll bump into each other, we slightly change our walking speed and direction, adjusting things so that we'll pass by without colliding. Though we may sometimes move in the same direction in our bid to go around each other, we're able to avoid a collision by decreasing our walking speed, stopping, and once again adjusting the way in which we walk. We are expressing our respective destination and walking speed through our bodies, and anticipating the next movements of others moment by moment according to that expression.

This might invite the counterargument that you are not walking according to a grandiose awareness of "expression" or the like, but regardless of awareness,

こう書くと、いや、自分は「表現」などというたいそうな自覚のもとに歩いてはいない、という反論が来るかもしれないけれど、自覚があろうがなかろうが、意識しようがしまいが、その人の移動する方向や速さは、その人の身体から表現となって漏らされている。

わたしたちは、相手の歩行から漏れる表現をもとに相手の動きを予測し、自分の歩行を調整するのだが、おもしろいことに、この「調整」の結果もまた表現となって、相手に漏らされる。向こうから来る相手が少しだけ進路を変えると、あ、こちらを気にしているなどわかる。こちらもまた、相手にそれとわかるように、自分の歩行の変化を少し強調したりする。このように、お互いが動きを調整すると、その調整もまた身体表現となって、次のお互いの予測に影響を与える。

こんな面倒なことを無限に繰り返すと、くたびれてしまうはずだが、おもしろいことにしばらくやっていると、「もうここからは大丈夫、ぶつからない」という時点がやってきて、さほどの調整はいらなくなり、そこからはさしたる変更もなく、無事にすれ違うことができる。ある時点で、わたしたちは相手が予測通り動いてくれるだろうとたかをくくる。予測を信じるとともに、相手の動きを信じる。

ときには、こうした調整は、1人の相手だけではなく、何人もの相手と、次々行われる。私たちが人混みの中で、お互いに何とかぶつからずに歩いていけるのは、そのおかげだ。異なる方向に異なる速さで人々が一気にすれ違うときにも、誰かと誰かがぶつかるということはまずない。わたしはときどき、渋谷のスクランブル交差点のライブカメラの映像を環境ビデオのように流しているのだが、多くの人々が、正面から来る人を選けるだけでなく、自分から見て斜め方向に歩いている人々の隙間を巧妙に抜けていくのを見ると、ほとんど感心してしまう。かつて、日本体育大学の「集団行動」パフォーマンスのYouTube動画が話題になったことがあったけれど、交差点を誰もぶつかることなく巧みに歩く歩行者たちの能力だって、相当どうかしている。

わたしたちは、さまざまな方向にいちどきに歩くだけでなく、限られた出入口をぶつからないように利用し合うこともできる。ゼミ生の海野瀬志乃さんが鉄道駅の改札口でおもしろい観察をした。都市部の利用数の多い改札では、自動改札が、内外どちらの側からも通ることができるようになってきていることがある。利用客が片方の側でカードをタッチすると、もう片方の側は一時的に利用できなくなる仕組みなのだが、実際に改札口の両側で客が立ち往生することはまれにしか起こらない。どうも利用客のほとんどは、改札に近づきながら、自分が目指している改札に向かって反対側から人が来ないか観察しているらしい。海野瀬さんの分析によると、利用客は、改札の反対側の客の誰かが自分の目指す改札に

whether you are conscious of it or not, the direction and speed with which a person is moving emanates from their body as a form of expression.

We anticipate the movements of the other person according to the expression that emanates from their walking and so adjust the way in which we walk, but the results of this "adjustment" also intriguingly emanate toward the other person as a form of expression. If the person coming the other way changes their route a little, we know they are thinking about us. And then we too slightly exaggerate the change we make to the way in which we are walking to ensure the other person understands this. Both parties thus adjusting their movements, those adjustments become further forms of physical expression and influence our next anticipations about each other.

When this palaver repeats ad infinitum, it quickly gets tiresome, but after doing it for a while, there intriguingly comes a point when we realize things are OK, that we won't collide, that we no longer need to adjust so much, and, from then on, we're able to go past each other without incident or particular change. At a certain point, we minimize things by assuming that the other person will move just as we anticipate. We trust the prediction as well as the movements of the other person.

At times, this adjustment is done not only for one person, but over and over again for multiple others. This is how we are able to walk around without bumping into people when we're in a crowd. Even when many people go past each other at different speeds and in different directions, no one bumps into one another. I sometimes pull up the live camera feed of Shibuya's Scramble Crossing like a kind of background footage and I really admire how many people not only avoid the person coming right at them but also pass deftly through the gaps between the people walking diagonally. A video on YouTube of a "group action" performance at Nippon Sport Science University once went viral, but there's also something really crazy about the ability of pedestrians to walk skillfully without bumping into anyone at the crossing.

Not only walking at once in various directions, we are able to use limited numbers of entrances and exits without colliding. One of my students, Shino Kainose, once observed something interesting at the ticket gates of a train station. In urban areas where there are many station users, the automatic gates are designed to allow people to pass through from either side. When a user touches the reader on the gate with their card, the reader on the other side of the gate becomes temporarily unavailable, but it is actually very rare for users to get stuck like that by entering both sides of the ticket gate at once. As they approach the gates, almost all users look to see if someone is coming from the other side at the specific gate they are aiming for. According to Kainose's analysis, users realize that someone is approaching from the other side of the gate and detect that the person is likely to arrive at the gate before them, after which they swiftly alter their

近づきつつあるのに気づき、しかもその人の方が自分よりも早く改札にたどりつきそうなことを察知すると、すばやく進路を変更し、別の利用可能な改札に移動したり、少し歩速を緩めて、向こう側の客が改札を通り抜けるのをやり過ごしたあと、目指す改札を改めて利用したりする。こうした場合、客の歩行の方向や速さは明らかに不連続に変化している。つまり「表現」されている。だから第三者が観察していても、調整が起こったのだとはっきりわかるのだ。

このように、わたしたちが街中で行っている歩行の表現は重要なのだが、最近、こうした表現に変化をもたらす現象が見られるようになってきた。それは携帯電話やスマホの登場である。

スマホに見入っている人は、こちらがどのように歩行の表現を調整しつつあるかを見ていない。こちらがどう動こうと、こちらにまっすぐ向かって直進してくる。では全くこちらを見ないかという点必ずしもそうではない。多くの人は、進行方向をチラッと見て、またスマホに見入っている。どうやらそのチラツの際に、こちらの姿は目に入っているらしい。そこで、こちらは、そのスマホ人(びと)の行動を予測する。この人はこの先何秒か、スマホを見ながら同じ速さ、同じ方向に歩き続けるだろう。とすれば、わたしはその進行方向を侵さないように歩く方向を変更すればよい。つまり、スマホ人は、相手の歩行に対して調整を行ったりはしないのだが、一方で、スマホを見続けるという行為によって、自身がこの先どのように歩くかを表現しているのである。

しかし、スマホを見続けている人の行く先を予測するのは、必ずしも簡単ではない。じつを言うと、わたしもたまにこのようなスマホ人になるのだが、駅の出口に立ち、さて今からどこへどう行ったらいいのかわからないと言うときに、スマホでマップを表示して、少し歩いては、そちらじゃなかったと歩みを緩めたり、進路を変更したりする。そんな風に、自分が不規則なことをしがちな人間なので、スマホを持っている人を見かけると、必要以上に迂回してしまう。

今日も何人もの人とすれ違った。見知らぬ人の表現を予測し、予測を信頼し、予測の信頼を通して見知らぬ誰かを信頼する。そういうことを繰り返して、街を抜けるとほっとする。これが人疲れというやつかもしれない。

細馬宏通(ほそまひろみち)

早稲田大学文学学術院教授。専門は行動学。著書に『うたのしくみ 増補完全版』(ぴあ)、『いだてん』『今日の「あまちゃん」から』(河出書房新社)、『二つの「この世界の片隅に」』『絵はがきの時代 増補新版』『浅草十二階 増補新版』(青土社)、『介護するからだ』(医学書院)、『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか』(新潮社)など。

route and move to another available gate, or decelerate slightly and use the gate after the user on the other side has passed through. In these cases, the direction and speed at which station users walk is plainly changing intermittently. To wit, it is being "expressed." And for that reason, even a third party can observe this and clearly understand that adjustments have taken place.

In this way, our ambulatory expression that happens around the city is important, yet a phenomenon has recently emerged that affects this expression: the arrival of the mobile phone and smartphone.

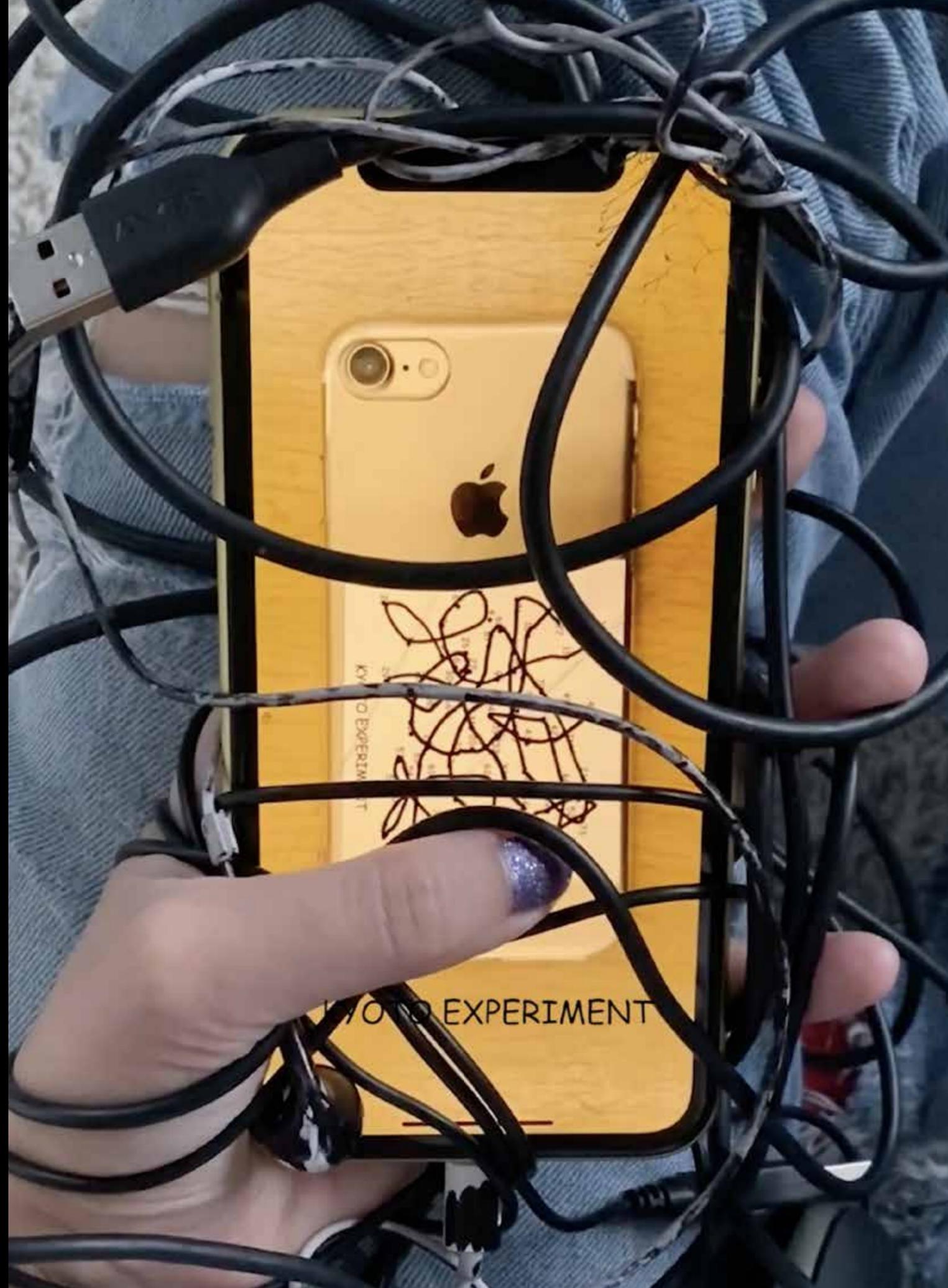
People preoccupied by their smartphone are not looking to see how you are adjusting your ambulatory expression. No matter what you do, they keep coming straight at you. But that's not to say that they aren't looking at you at all. Many people look up briefly to see where they are going and then look back to their phone. During that short window when they look up, they seem to spot you. And so you then anticipate the actions of this smartphone person: they're going to keep walking at the same speed, in the same direction, while looking at their phone for the next few seconds. In which case, you should alter the direction in which you are walking so that you don't get in their way. To wit, the smartphone person makes no adjustments in response to how the other person is walking, yet expresses how they will walk through the act of looking at their phone.

But it's no easy matter to anticipate where someone looking at their phone will go. The fact of the matter is that I too am sometimes one of these smartphone people, and I stop at the station exit, wonder which direction I should go, pull up a map on my phone, walk a bit, slow down when I realize I'm going the wrong way, and then change my route. As someone with a tendency to behave unsystematically, spotting a person with a smartphone prompts me to steer around them above and beyond what's strictly necessarily.

I have gone past several people today. I anticipate a stranger's expressions, trust that prediction, and so trust that stranger through trusting my prediction. I do this over and over again, and am relieved to make my way through the city. That's perhaps what they call tired of being around people.

Hiroimichi Hosoma

Hiroimichi Hosoma is an ethnologist who teaches at the Waseda University Faculty of Letters, Arts and Sciences. His publications include *Uta no shikumi* [How Songs Work], *Idaten-banashi* [Idaten Stories], *Kyo no Ama-chan kara* [From Today's Amachan], *Futatsu no Kono sekai no katasumi ni* [Two In This Corner of the Worlds], *Ehagaki no jidai* [The Age of Picture Postcards], *Asakusa junikai* [Asakusa Twelve Floors], *Kaigo suru karada* [The Caring Body], and *Mikki wa naze kuchibue o fuku no ka* [Why Does Mickey Whistle?].



踏み出す足の下には何が

山崎健太

What Lies Under Those Walking Feet? Kenta Yamazaki

68



ままごと『あゆみ(短編)』(2022年 リューとびあ 新潟市民芸術文化会館|撮影 村井勇)
mamagoto, *Ayumi* (short version), 2022, RYUTOPIA Niigata City Performing Arts Center. Photo by Isamu Murai.

あなたは一日のうちどれくらいの時間を歩くことに費やしているだろうか。現代においてなお、それどころか、不要不急の外出が忌避されたコロナ禍の最中においてはより一層、一日の大半を歩くことに費やす人々がいる。amazonをはじめとするネット通販事業の物流センターで働く非正規雇用労働者だ。かく言う私も(コロナ禍以前のことはあるが)隣駅に聳え立つ巨大な物流センターで働いていたことがある。無数に並ぶ棚のあいだを商品を探してさまよい歩くこと一日8時間。あの頃の私は一日におよそ20kmは歩いていたのではないだろうか。人生であんなにも歩き続けた日々は今のところ後にも先にもない。商品を入れるためのカートを押しながら倉庫のなかをぐるぐると回り続ける倉庫バイトの姿は一見したところスーパーで買い物をする人のそれにも似ているが、決定的に異なるのはその歩みが他人の欲望によって駆動されているという点だ。ハンディと呼

How long do you spend walking per day? Today, or rather during the coronavirus pandemic, when leaving the home unnecessarily was avoided, there are even more people who spend most of their day walking. They are the irregularly employed workers at the distribution centers for online retail businesses like Amazon. I too have worked (albeit before the pandemic) at a massive distribution center that towers over its neighboring station. For eight hours a day, I wandered around searching for products among the countless shelves. I must have walked some twenty kilometers a day at that time. I have never walked so much in my life before or since. Pushing a cart for holding the products as they go around and around the warehouse, these part-time workers seem at a glance like people shopping at a supermarket, but the crucial difference is that their walking is controlled by the desires of others. Walking as per an unknown person's desires that display on a hand-held device, I must have looked like a zombie, though

ばれる端末に表示される見知らぬ誰かの欲望に沿って歩く姿は我ながらゾンビめいているとも思うものの、慣れてしまえば一日中ほかのことを考えていられるその仕事を私はそれなりに気に入ってもいた。「俳優に内面はいる」という劇作家・演出家の平田オリザの言葉が皮肉な響きを伴って思い出される。

劇作家・別役実のエッセイ「正しいお散歩の仕方」に『お散歩』は、何かのためのものではなく、それ自体のものなのである」と記す。だが「我々は『どこかへ行くため』にか、『体を鍛えるため』にしか、歩けない」。ゆえに正しく散歩することは難しいのだと。一方、作家・歴史家・アクティビストのレベッカ・ソルニットは歩くことに関わる広範な文化を扱った著書『ウォークス 歩くことの本質』のなかで「歩くことは、いつだって歩くこと以外のことだ」と述べている。「歩くことは祈りにも、性的な結びつきにも、土地と交わることに、瞑想にもなりうる。そしてデモや蜂起においては言葉を発することとなり、都市をゆく市民の足取りは多くの歴史を記してきた」と。

なるほど、たとえば「全編歩き続ける芝居」であるところのままごと『あゆみ』(作・演出:柴幸男)において、歩くことはその名も「あゆみ」という女性の人生の歩みとして立ち現れる。複数の俳優が舞台上を歩きながら役を引き継いでいくことによって、一人の女性の人生の歩みが繰り返される人間の営みへと接続される構造が巧みな作品だが、この作品においても歩くことはあくまでメタファー、あるいは作品を構成する要素に過ぎない。

演劇において歩くことそれ自体を考えると日本の古典芸能における摺足(すりあし)やそこから発展した身体訓練などが思い浮かぶが、それらもまたあくまで芸の土台、別役の言うところの「体を鍛えるため」の歩行とみなすべきだろう。そもそも芸術である演劇からその「素材」である歩くことそれ自体を取り出そうとすること自体が無理筋な気もする。

「歩くことは、いつだって歩くこと以外のことだ」といういかにも演劇的な物言いは裏腹に、『ウォークス』に演劇に関する記述はない(一方でパフォーマンス・アートを含む現代美術にはまるまる一章が割かれている)。その理由は定かではないが、考えてみれば舞台は歩くための場所として適当とは言いがたい。言うまでもなく、「どこかへ行くため」に歩き出した俳優は、すぐさま観客の視界からは外れてしまうからだ。そうならないためには①繰り返し歩くか(『あゆみ』)、②往復するか(サミュエル・ベケット『あしおと』)、③ぐるぐる歩くか(同じくベケット『クワッド』)、④ゆっくり歩くか(太田省吾『水の駅』など諸作品)と歩き方に何らかの工夫が必要となる。

思い切って劇場の外へと歩き出してみればそれはツアーパフォーマンスと呼ばれるものになり、観客もまた

I actually rather liked the job once I got used to it, since it allowed me to think about other things all day. I would recall the playwright and director Oriza Hirata's pronouncement that "actors don't need the internal," which now had an ironic ring to it.

In his essay "Correct Ways to Take a Walk," the playwright Minoru Betsuyaku notes that "a walk is not done for a purpose; it is done for its own sake." "We can only walk," he suggests, "to 'go somewhere' or 'get in shape.'" It is, as such, difficult to take a walk "properly." In *Wanderlust: A History of Walking*, which explores the wide-ranging cultural implications of walking, the writer, historian, and activist Rebecca Solnit remarks that "walking is usually about something else." She goes on: "walking, which can be prayer, sex, communion with the land, or musing, becomes speech in these demonstrations and uprisings, and a lot of history has been written with the feet of citizens walking through their cities."

Indeed, if we take *Ayumi*, a play (staged by mamagoto and written and directed by Yukio Shiba) in which the characters are walking from start to finish, the act of walking appears as the life of the titular character, whose name in Japanese also means "walk." With actors walking across the stage, passing on the role of a character to another performer as they leave, the deftly structured play links the course of one woman's life to the repetitive nature of human behavior, but walking serves only as a metaphor here, or as a single component of the play.

When we imagine the act of walking in theater, we tend to think of the shuffling-style of walking used in classical Japanese performing arts or the physical training that developed from that, yet we should regard that ultimately as the foundation of the art form, as walking done, like Betsuyaku said, to "get in shape." It seems illogical to attempt to take the act of walking out of the art form that is theater, given that it is one of the "materials" from which theater is made.

"Walking is usually about something else." The highly theatrical nature of this statement notwithstanding, Solnit's book contains no references to theater (though contemporary art, including performance art, gets its own chapter). The reason for this is uncertain, but perhaps it is because a stage is not a suitable place for walking. An actor who starts walking just to "go somewhere" will, needless to say, promptly disappear from view. In order to stop this from happening, we have to employ some kind of trick in the way in which the actors walk, from constantly walking (*Ayumi*) to pacing back and forth (Samuel Beckett's *Footfalls*), walking around and around (Beckett's *Quad*), or walking slowly (Shogo Ota's *The Water Station* and other plays).

If we take the plunge and walk outside the theater, it then becomes promenade theater (known in Japan as "tour theater") and in which the audience is also the person walking. Promenade theater audiences gaze at the city through different eyes from usual, applying a theatrical filter and experiencing

69

歩く主体となるだろう。ツアーパフォーマンスの観客は演劇的なフィルターを通して普段とは異なる視点から街を眺め、世界の見知らぬ側面を体感する。近年の舞台芸術祭ではもはやポピュラーなものになったこのツアーパフォーマンスという形式は、旅人が演劇的な仕掛けを通して「真実」を知るという点において能楽の夢幻能にも似ている。夢幻能ではシテと呼ばれる主人公が、名所を訪れた旅人にその地についての物語や身の上話を語り、後に超自然的な正体(たとえば霊)を露わにするものだ。あるいはもっと素朴に、かつての歌舞伎見物が一日がかりの行楽であったことを思い出してもよい。そこでは歩くことと演劇とがわかちがたくむすびついていた。

そもそも喜劇の起源は仮装行列にあり、コメディという言葉は酔った人々による儀式的な行列を意味するコーモスという古代ギリシア語に由来するのだという。日本語のデモが実演＝やってみせることを意味するdemonstrationを縮めた言葉であることを引くまでもなく、歩く主体となった観客はもはや一方的に見る立場ではいられない。ファッションショーにおけるランウェイは歩くことと見られることが限りなくイコールで結ばれる場だ。そして見られることはときに危険とも結びつく。路上が常に安全な場所でないことは言うまでもない。

2012年に上演されたPort Bによるツアーパフォーマンス『光のないII』(作:エルフリード・イエリネク、構成・演出:高山明)では、福島を写し出したポストカードを手渡された観客が東京電力本社がある新橋の街を歩き回る。観客は新橋の街に福島の風景を(なかば無理矢理に)重ねるよう促され、しかしそうしようとするほどにそこにある距離を強烈に体験するのだった。ポストカードに写し出された光景には、歩き回ることはおろか立ち入ることすらできない場所も含まれていたはずだ。

ジェンダー、人種、身体的特徴、社会状況等々。様々な条件が歩くことの可否とその意味を規定し、しかもそれらは変化していく。たとえばこの原稿を書いている2022年6月現在、マスクなしで東京の街を歩くことは私にとってはかなりハードルの高い行為だ。倉庫バイトに従事することも躊躇われる。しかし私がネットショッピングをするたび、今もあの倉庫では私の欲望が誰かを歩かせている。さて、あなたが踏み出すその一歩を規定しているものは一体何だろうか。

山崎健太(やまざきけんた)

1983年生まれ。批評家、ドラマツルク。演劇批評誌『紙背』編集長。WEBマガジンartscapeでショートレビューを連載。2019年からは演出家・俳優の橋本清とともにy/nとして舞台作品を発表。主な作品に『カミングアウトレスン』(2020)、『あなたのように騙されない』(2021)など。

unfamiliar aspects of the world. A popular format at recent performing arts festivals, promenade theater is similar to *mugen noh* (phantasmal *noh*) in the sense that a traveler learns the "truth" over the course of the play. In *mugen noh*, the protagonist (known as the *shite*) typically relates a personal story or local tale to a traveler who is visiting a famous place, and then a supernatural entity (such as a ghost) appears. More simply, we might recall how going to see kabuki used to be an all-day excursion. Walking and theater were inseparably joined.

Comedy originated in fancy-dress parades, and the word "comedy" itself probably derives from *komos*, a kind of drunken procession in ancient Greece. As we know from how the word "demo" is an abbreviation of "demonstration" (meaning the act or process of proving or showing something), the walker-audience cannot stay in a position that watches unilaterally. The catwalk in a fashion show is a place where walking and being watched are utterly synonymous. And being watched is sometimes fraught with danger. It goes without saying that the street is not always a safe place.

In *Kein Licht II*, the 2012 adaptation of Elfriede Jelinek's play by Akira Takayama (Port B), the audience walked around Shinbashi, the district where Tokyo Electric Power Company has its headquarters, holding postcards of scenes from Fukushima. Encouraged to layer the landscape of Fukushima (at times in a rather forced way) over this area of Tokyo, members of the audience experienced the distance between these two places with greater intensity the more they tried to do so. The scenes on the postcards included places that not only could we not walk around, we could not even enter them.

Gender. Race. Physical attributes. Social conditions. Various factors determine whether we can walk somewhere or not, and define the meaning of walking, and these factors also change. In June 2022, as I write this essay, it remains quite difficult for me to walk around Tokyo without wearing a mask. I am also hesitant to work shifts at the warehouse under these conditions. But whenever I buy an item online, my desire still forces someone in that warehouse to walk. What are the things that determine the steps that you take?

Kenta Yamazaki

Born in 1983, Kenta Yamazaki is a critic and dramaturge. He is editor in chief of the theater criticism journal *Shihai* and writes reviews for the online magazine *artscape*. Since 2019, he has worked with the director and actor Kiyoshi Hashimoto under the joint name *y/n*. Their major performances include *Coming Out Lessons* (2020) and *On Not Being Fooled Like You* (2021).

Port B 『光のないII』(2012年 フェスティバル/トーキョー12|撮影 蓮沼昌宏)
Port B, *Kein Licht II*, 2012, Festival/Tokyo 2012. Photo by Masahiro Hasunuma.



上演芸術と歩行:「自然さ」のパラドックス

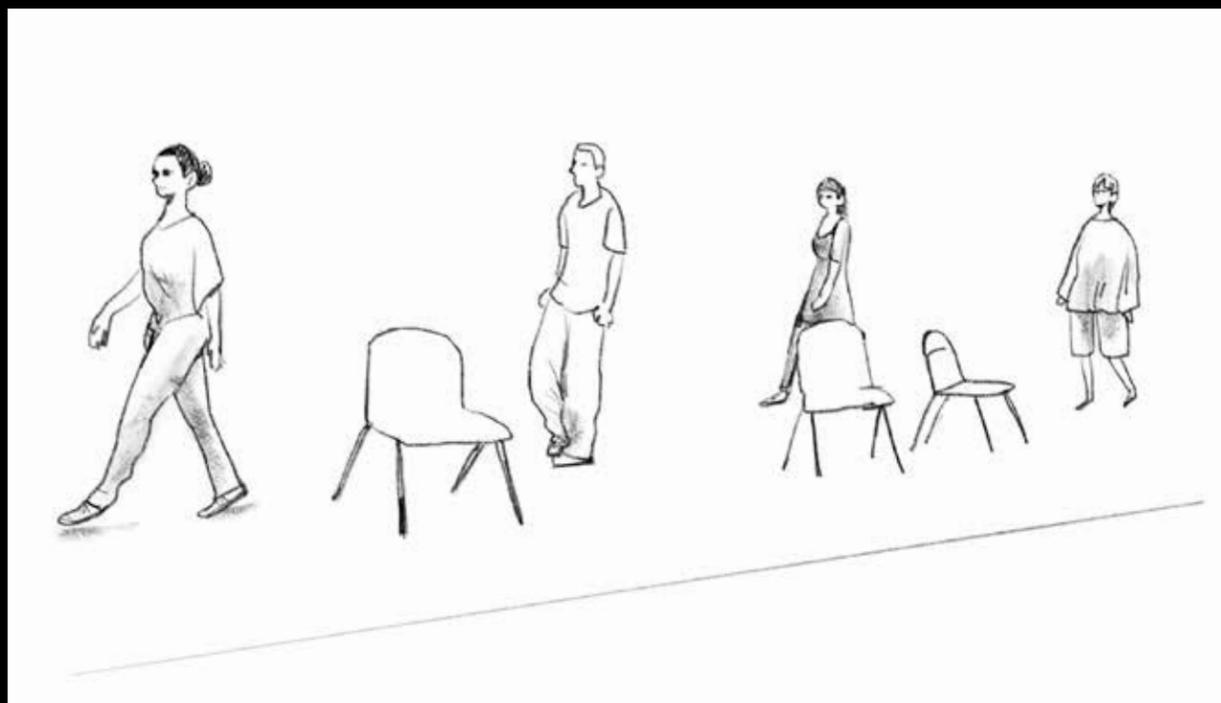
外山紀久子

The Performing Arts and Walking:

The Paradox of the "Natural"

Kikuko Toyama

72



スティーヴ・バクストン《サティスファイン・ラヴァー》(1967)の上演イメージ。2011年12月3日
ポンピドゥー・センター(パリ)での再演映像(*1)を元に、KYOTO EXPERIMENTで制作。
An illustration of Steve Paxton's *Satisfyin' Lover* (1967), created by Kyoto Experiment and
based on the video* of the revival at the Centre Pompidou, Paris, December 3rd, 2011.

上演芸術の歩行に求められるものは何だろうか。アジアの芸能で演者が示す強い「現前=presence」の力に魅了されて、イタリア出身の演劇人であるエウジェニオ・バルバは「自然なバランス」に対して「デラックス・バランス」と彼の呼ぶ身体運用法に注目するが、その筆頭に摺足(すりあし)が取り上げられる(Barba 1986)。「歩行舞踊」とも言われる能の場合の、腰を入れ重心を落とした独特のカマエと不可分な摺足によるハコビの効果はつとに知られている。それはもちろんふつうの、自然な歩行ではないわけだが、そもそも人間の二足直立歩行は決して「自然」ではなく、特定の生育環境の中で後天的に学習され獲得されるという(言語のように?)。ふつうに歩けるようになる過程で種々の要因が関与して私たちの身体は多少とも作り変えられるのだ。

What do we require of walking in the performing arts? Attracted by the impressive power of presence that Asian performers display, the Italian theater artist Eugenio Barba focuses on a physical technique he calls "luxury balance" (as opposed to "natural balance"), beginning with the act of shuffling (Barba 1986). In the "walking dance" that is noh theater, the effect of walking by slowly sliding the soles of the feet along, and in a particular posture with the knees bent and center of gravity placed on the hips, has long been known. This, needless to say, is not a normal, natural way of walking, yet neither is human bipedalism originally "natural," but rather something learned and acquired subsequently within a specific habitat (perhaps somewhat like language). A range of factors are involved in the process of walking normally and our bodies reshape themselves somewhat. Once

一度習得されるや、概ね意識せず半ば自動的に行われる(中動態の?)動作となる(國分 2017)。他方、緩急や方向性など、意志が働く余地もあるので、ある程度調節可能(呼吸のように?)。その「自然なバランス」による当人にとって比較的安定度の高い歩き方を離れて、「デラックス・バランス」、特有の移動の様態を身につけなければならない時、一旦自動性は失われる。だが、当初の抵抗を克服して新たな作り変えが完了すると、アタマが全部忘れても身体が覚えている境地が回復する(非意志的/非意識的な主体の状態、脱主体化の状態への転換)。一定の伝統・技法に裏打ちされた身体の再秩序化によって、上演芸術の要となるエネルギーの放射が可能となる——と、ひとまず乱暴にまとめておく(外山 2022)。

ダンサー・振付家スティーヴ・バクストンの《サティスファイン・ラヴァー》(1967、以下《SL》と略記)は、ふつうの、ただの歩行を舞台に乗せた。ダンスと非ダンスの間を架橋するポストモダンダンス/ジャクソン・ダンス・グループの代表例としてアンディ・ウォーホルの《ブリロ・ボックス》(1964)(Carroll 2003)、ジョン・ケージの《4分33秒》(1952)にもなぞらえられている(Burt 2006)。すでに半世紀以上前の初演の記録は写真やバクストンのノート以外にほとんどないが、2011年12月3日にパリのポンピドゥー・センターで再演された時の動画サイトで(*1)その雰囲気はうかがえる。思い思いの服装・体型の人々が数人ごとのグループに分かれ、一人ずつステージを横切って、歩いたり、途中で止まったり、椅子に座ったりする。いつでもどこまで歩くか、何秒停止するか、キューの出し方、舞台上の椅子の数や向き、人数やスペースの長さの幅等々を含め、細かくスコアで決められているのだが(Banes 1987)、全くもって「ただの歩行」。ミンクスの甘美な音楽にのせたデヴィッド・ゴードンの《マターへの序曲》(1979)やフリッツ・ラングの映画を下敷きにしたイヴォンヌ・レイナーの《ストリート・アクション》(1970)と比べても、その素っ気なさ、統一感のなさ、あっけなさが際立っている。

この作品を「踊る」のにプロのダンサーである必要はない。そこそこの身体的条件をクリアしていれば誰にでも開かれている(「デモクラシーの身体」)。他方、ワークショップやグループ・セラピーの類ではなく、あくまで観客に見せることを想定した上演作品だ(Banes 1987)。ファウンド・オブジェやノイズの導入と違って、ファウンド・ムーブメントは生身の人間が行うほかない。素のまま、未加工の身体の「ありきたりの動き」をダンスとして提示する時、「見られている」というだけでたちまち自然さが失われる。実際、30余年後の回想の中で、ユタ大学での初演は「失敗」だったとバクストン。「<自然に歩いて>と言うインストラクションは、その指示がもたらす自意識だけでも、まして観客を前にしてそれを実

learned, it becomes a (perhaps mediopassive) action that is in general undertaken half-automatically and unconsciously (Kokubun 2017). On the other hand, there is also leeway for volition, such as in terms of speed and direction, meaning it is adjustable (perhaps somewhat like breathing). When performers must leave behind the way of walking through natural balance that has comparatively high stability and adopt the form of movement peculiar to luxury balance, they lose their automaticity. But when the initial resistance is overcome and the new reshaping is complete, we recover the state where the body remembers even if the mind has forgotten (a shift to a state of non-volitional or nonconscious subjectivity, to a state of desubjectivity). For now, let's sum up a little roughly like this: by reordering the body underpinned by fixed traditions and techniques, it becomes possible to radiate the energy crucial to the performing arts (Toyama 2022).

The dancer and choreographer Steve Paxton's *Satisfyin' Lover* (1967) put plain, ordinary walking onstage. A representative example of Judson Dance Theater, the postmodern dance collective that straddled dance and non-dance, it is comparable to Andy Warhol's *Brillo Boxes* (1964) and John Cage's *4'33"* (1952) (Burt 2006, Carroll 2003). More than a half a century on, little in the way of documentation remains of the premiere other than photographs and Paxton's notes, though a video posted online from the revival on December 3, 2011, at the Centre Pompidou in Paris gives a sense of what it was like.¹ People, dressed to their own liking, with various physiques, and divided into groups, each cross the stage, walk, stop, and sit on a chair. Though everything is determined in detail in the score (Banes 1987)—including when and how far each performer walks, how many seconds they stop, how the cues are given, the number of chairs onstage and the direction in which they face, the number of performers, and the length of the space—*Satisfyin' Lover* is still ultimately just walking. Even in comparison with David Gordon's *Overture to The Matter* (1979), which used the dulcet music of Léon Minkus, and Yvonne Rainer's *Street Action* (1970), which was based on a Fritz Lang film, it is strikingly brusque, nonuniform, and abrupt.

To dance in *Satisfyin' Lover*, you don't need to be a professional dancer. As long as you meet certain physical conditions, anyone can take part (what Sally Banes would call "democracy's body"). Nonetheless, *Satisfyin' Lover* is not a kind of workshop or group therapy, but a performance premised on being shown to an audience (Banes 1987). Unlike found objects or noise, found movement can only be undertaken by a living human being. When the "ordinary movements" of an unprocessed body just as it is are presented as dance, they immediately cease to be natural just by dint of being watched. In his memoirs published thirty years later, Paxton looked back on the premiere at the University of Utah as a failure: "I did not foresee that the instruction to 'walk naturally'

73

行するとすると、不可能だということを見ることができなかった」(Paxton 2003: 206-207)。特定の様式／技法に基づく再秩序化を封印しているために、ポストモダンダンスという「テクニックなしのダンス」、とりわけ「歩く」という最小限の防具しか与えられない《SL》は、それだけ困難を伴うものだった。

バルバの「演劇実験室」で行われる「スピードをかぎりなく遅くする」「く中心で歩く練習」では、自分が自分の身体をコントロールしているのではなく「動きが肚から発出する」「身体の論理」で動いているという感覚への気付きが重視されていた(松嶋 2014)。作曲家ポーリン・オリヴェロスも、「ディープ・リスニング(深い聴取)」「ソニック・メディテーション」の一環として「ひじょうにゆっくりと歩く」ワークショップを行って同様の観察を記し、「見た目にも美しいダンス」だったと述べている(Oliveros 2005/藤枝守 2016)。

パクストンの場合そのような「デラックス・バランス」の模擬実験は当てはまらないだろう。《SL》用ノートには、「ペースは楽な歩行、しかしゆっくりではなく」(強調筆者)。他方、「パフォーマンスの際の態度は落ち着いて、自若として」「心は安らいでいなければならない」といった心の在り方に関わるような繊細なインストラクションも含まれている。エリック・サティの奇作《ヴェクサシオン》の指示(「このモチーフを連続して840回くり返して演奏するためには、あらかじめ、心の準備を整えることが大切であろう。深い沈黙と、真剣な不動性の姿勢によって」*2)を思い出す?あるいはマース・カニングガムがダンサーに求めた「平静」「内なる落ち着き」の状態から踊ること、さらには70年代以降パクストンのライフワークとなるコンタクト・インプロビゼーション、そのペースにあった合気道や武道全般とも通ずるもう一つの脱自? 「このダンスは歩くこと、立つこと、座ることについてのものだ。これらの要素をクリアーで純粋なままに維持するように」(Banes 1987: 74)。いつもうまくいくとは限らないが、時には、ニューヨーク近代美術館での再演時(2012年10月)のように、「集中した落ち着きと静まり」に撃たれ、「スマートフォンもない、マルチタスクもない」ただ歩くだけ、立っているだけ、たまに位置を変えるだけのミニマルで反復的なソースに豊かな振付の可能性が見出される場合もあった(Claudia La Rocco, The New York Times, Oct. 18, 2012)。

与えられたタスクに集中し、同時にリラックスしている。ただの歩行をそのまま舞台に乗せる、人目に晒され



ステイヴ・パクストンが参加し、ポストモダンダンスを牽引したジャドソン・ダンス・グループが拠点としたNYのジャドソン記念教会。(2007年9月、筆者撮影)。
The Judson Memorial Church in New York where Judson Dance Theater, which Steve Paxton participated in and which led the postmodern dance movement, was based. Photo by the author, September 2007.

would be impossible with the self-consciousness brought about by the instruction, let alone performing it in front of an audience" (Paxton 2003: 206-207). An example of the "dance without technique" that is postmodern dance, offering only the thinnest layer of "armor" that is walking because it seals up the process of reordering based on a particular style and technique, *Satisfyin' Lover* involved this level of difficulty.

The "boundless deceleration" and "training to walk via the "center" that took place at Barba's "theater laboratory" did not emphasize the performer's control of their own body, but rather realizations toward "movement as coming from the abdomen," toward a sense of moving through the "logic of the body" (Matsushima 2014). The composer Pauline Oliveros held "extreme slow walk" workshops as part of her practices of "deep listening" and "sonic meditation," and similarly observed that such walking is a "visually beautiful dance" (Oliveros 2005, Fujieda 2016).

In the case of Paxton, such attempts to simulate luxury balance are not applicable. In his notes for *Satisfyin' Lover*, he writes: "The pace is an easy walk, but *not slow*" (emphasis added). On the other hand, the notes include subtle instructions in regard to mindset: "performance manner is serene and collected" and "the mind should be at rest." One is reminded perhaps of the inscription for Erik Satie's peculiar work *Vexations*: "*pour se jouer 840 fois de suite ce motif, il sera bon de se préparer au préalable, et dans le plus grand silence, par des immobilités sérieuses*" (in order to play the motif 840 times in succession, it would be advisable to prepare oneself beforehand, and in the deepest silence, by serious immobilities). Or perhaps it is another form of *extase* aligned with the states of stillness and inner calm that Merce Cunningham demanded of his dancers, and, moreover, with the aikido and martial arts that underlay Paxton's post-1970s lifework, Contact Improvisation. "This dance is about walking, standing, and sitting. Try to keep these elements clear and pure," Paxton said (Banes 1987: 74). Though this may not always succeed, sometimes, like at the October 2012 revival at the Museum of Modern Art in New York, one might be struck by "the quality of focused calm and stillness," and find rich possibilities of choreography in this minimal and repetitive source that is "no smartphones, no multitasking," just walking and standing, just sometimes changing position (Claudia La Rocco, *New York Times*, October 18, 2012).

Concentrating on the task assigned and yet, at the same time, relaxing. This was the quiet legacy of the

ていることから一旦失われる自然さ=意図/意志を外れておのずから成る流れの中にある「気の身体」の優美、それを回復するための脱力身体が、ポスト「モダンダンス」をポストモダンのダンスにつなぐひそやかな遺産だったのでは——という、未だ朦朧とした仮説です。

*1 <https://youtu.be/jhbhol7o9PM>
*2 Pour se jouer 840 fois de suite ce motif, il sera bon de se préparer au préalable, et dans le plus grand silence, par des immobilités sérieuses.



ダンサー・振付家、ステイヴ・パクストン(1939-)。1967年(サティスファイン・ラヴァー)を制作し、1972年に「コンタクト・インプロビゼーション」を創始した。Dancer and choreographer Steve Paxton (b.1939) created *Satisfyin' Lover* in 1967 and founded Contact Improvisation in 1972. Photo by Jerome De Perlinghi/Corbis Outline via Contour by Getty Images.

参考文献

- Banes, Sally (1987) *Terpsichore in Sneakers: Post-Modern Dance* (with a new introduction), Wesleyan University Press.
- Barba, Eugenio (1986) *Beyond the Floating Islands* (trans. Judy Barba, Richard Fowler, Jerrold C. Rodesch, Saul Shapiro), PAJ Publications (A Division of Performing Arts Journal, Inc.).
- Burt, Ramsay (2006) *Judson Dance Theater: Performative Traces*. London & New York: Routledge.
- Caroll, Noël (2003) "The Philosophy of Art History, Dance, and the 1960s," *Reinventing Dance in the 1960s: everything was possible*, ed. Sally Banes, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press [RDと略記]
- Oliveros, Pauline (2005) *Deep Listening: A Composer's Sound Practice*. iUniverse / Deep Listening Publications.
- Paxton, Steve (2003) "PASTForward Choreographers' Statements: Steve Paxton," RD.
- 國分功一郎(2017)『中動態の世界: 意志と責任の考古学』医学書院
- 外山紀久子(2022)「歩行について: 境界例からのライヴ・アート考」、酒井邦嘉 監修、日本科学協会編『科学と芸術 自然と人間の調和』、中央公論社、pp.127-144
- 藤枝守(2016)「『聴くこと』のスピリチュアリティ——ディープ・リスニングから群衆音響による現代神楽へ」鎌田東二企画・編『スピリチュアリティと芸術・芸能』講座スピリチュアル学第6巻、ピング・ネット・プレス
- 松嶋健(2014)『フシコ ナウティカ: イタリア精神医療の人類学』世界思想社

外山紀久子(とやまきくこ)

1957年生まれ。埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授。専門は美学・芸術学。著書に『帰宅しない放蕩娘: アメリカ舞踊におけるモダニズム・ポストモダニズム』(勁草書房、1999)、共編著に『musica mundana: 気の宇宙論・身体論』(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書6、2015)、『老いと踊り』(勁草書房、2019)など。

elegance of the "body of subtle energies (qi)" within the flow that arises all by itself, away from the naturalness (that is, intent or volition) lost from placing just the act of walking onstage and exposing it to public view, and the body left loose to recover that naturalness, connecting post-modern dance to postmodern dance. It is a hypothesis that remains rudimentary.

1 <https://youtu.be/jhbhol7o9PM>

References

- Sally Banes, *Terpsichore in Sneakers: Post-Modern Dance*, Middletown: Wesleyan University Press, 1987.
- Eugenio Barba, *Beyond the Floating Islands* (trans. Judy Barba, Richard Fowler, Jerrold C. Rodesch, Saul Shapiro), New York: PAJ Publications, 1986.
- Ramsay Burt, *Judson Dance Theater: Performative Traces*, London & New York: Routledge, 2006.
- Noël Caroll, "The Philosophy of Art History, Dance, and the 1960s," in *Reinventing Dance in the 1960s: Everything Was Possible*, ed. Sally Banes, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 2003.
- Mamoru Fujieda, "Kiku koto no supurichuariti: Depu risuningu kara hakko onkyo ni yoru gendai kagura" [Spirituality of Listening: Contemporary Kagura of Fermentation Sounds from Deep Listening], in *Supurichuariti to geijutsu geino* [Spirituality and Art/Performance], Spiritual Studies Vol. 6, ed. Toji Kamata, Sagami-hara: BNP, 2016.
- Koichiro Kokubun, *Chudotai no sekai: Ishi to sekinin no kokogaku* [The Mediopassive World: An Archaeology of Will and Responsibility], Tokyo: Igaku Shoin, 2017.
- Takeshi Matsushima, *Pushiko nautika: Itaria seishin iryo no jinruigaku* [Psico-nautica: An Anthropology of Italy Psychiatric Care], Kyoto: Sekai Shisoshu, 2014.
- Pauline Oliveros, *Deep Listening: A Composer's Sound Practice*, New York, Lincoln, Shanghai: iUniverse / Deep Listening Publications, 2005.
- Steve Paxton, "PASTForward Choreographers' Statements: Steve Paxton," in *Reinventing Dance in the 1960s*.
- Kikuko Toyama, "Hoko nitsuite: Kyokairei kara no raibu ato-ko" [On Walking: Thoughts on Live Art via Borderlines], in *Kagaku to geijutsu: Shizen to ningen no chowa* [Science and Art: Harmony between Nature and Humankind], eds. Kuniyoshi Sakai, The Japan Science Society, Tokyo: Chuokoron-sha, 2022.

Kikuko Toyama

Born in 1957, Kikuko Toyama teaches at the Saitama University Graduate School of Humanities and Social Sciences. She specializes in aesthetics and art theory. Her writings include *Kitaku shinai hoto musume: Amerika buyo ni okeru modanizumu posutomodanizumu* [The Prodigal Daughters Wouldn't Come Home: Modernism and Postmodernism in American Dance] (Keiso Shobo, 1999) and co-writings include *musica mundana: Ki no uchuron shintairon* [Musica mundana: Cosmology and Body Theory of the Spirit] (Saitama University Faculty of Liberal Arts Liberal Arts Series Vol. 6, 2015) and *Oi to odori* [Aging and Dance] (Keiso Shobo, 2019).

「批評プロジェクト 2021 AUTUMN」選出作品 Performing Arts Criticism Project 2021 Autumn: Selected Review

76

KYOTO EXPERIMENTでは、既存の価値観では捉えきれない実験的な作品の見方を考え、作品と鑑賞者、社会をつなぐ批評・評論ができる人材を育成するプロジェクトを2020年度より実施している。前年度(2021 AUTUMN)は、対象作品のレビューを公募し、演劇批評家 森山直人氏の審査で2作品を選出。森山氏の指導を受けてブラッシュアップされた両作品を公式サイトで公開した。ここでは、本誌掲載のため最終選出された1作品を紹介する。対象演目を鑑賞した人もそうでない人も、ぜひ一読いただければうれしい。

芸術作品の解釈はひとつではない。さまざまな批評にふれ、他者の視点を理解したり、作品理解を深めることで、鑑賞体験はより豊かになることだろう。そこから新しい生き方、オルタナティブな未来を見出す可能性だってあるかもしれない。SNSの普及で「一億総批評家時代」となっているいま、あらためて批評の役割を見つめ直す意義はきっとあると思うのだ。

☞ 2022年度も批評プロジェクトを開催します。詳細はp.43へ!

☞ 2021 AUTUMNの選出作品2点、及び審査評は kyoto-ex.jp/news/2021a-criticismproject で公開中

対象作品: 和田ながら×やんツー『擬娩』

上演日:2021年10月16日(土)、17日(日)

「擬娩(ぎべん)」という「妻の出産の前後に、夫が出産に伴う行為の模倣をする習俗」から着想した演劇作品。出産未経験の男女の出演者が、自らの身体と想像力を駆使して、妊娠・出産のプロセスを舞台上でシミュレートしていく。本作は演出家・和田ながらの2019年初演作品のリクリエーション版で、メディアアーティスト・やんツーがコラポレーターとして舞台美術を手がけ、公募で集まった10代の若者3名が出演者に加わり、上演された。

Since 2020 Kyoto Experiment has continued a project to develop new talent that can interpret work not easily grasped by existing values, connect works to audiences and society, and write criticism. Last year (2021 Autumn), reviews of a selected performance were gathered through an open call and two reviews were chosen by theater critic Naoto Moriyama. Both reviews, fine-tuned under Moriyama's guidance, were then published on the festival website. Here we introduce the review that was finally selected for publication in this magazine. Whether you have seen the performance or not, we hope you enjoy reading it.

There is of course more than one interpretation of a work of art. By being exposed to various criticisms, understanding the perspectives of others, and deepening one's understanding of the work, one's experience of viewing a work of art is enriched. There may even be a possibility of finding a new way of life or an alternative future from there. Due to the spread of social media platforms we live in an "age of 100 million critics"; there is surely significance in taking a fresh look at the role of criticism and the critic at this time.

☞ The criticism project will be held again in 2022. Go to p.47 for more information!

☞ The two selected reviews for 2021 Autumn and the judge's comments can be read at the following link: kyoto-ex.jp/news/2021a-criticismproject

Performance selected for the Criticism Project: Nagara Wada & yang02's *Couvade*

Performed on October 16th (Sat) and 17th (Sun),
2021

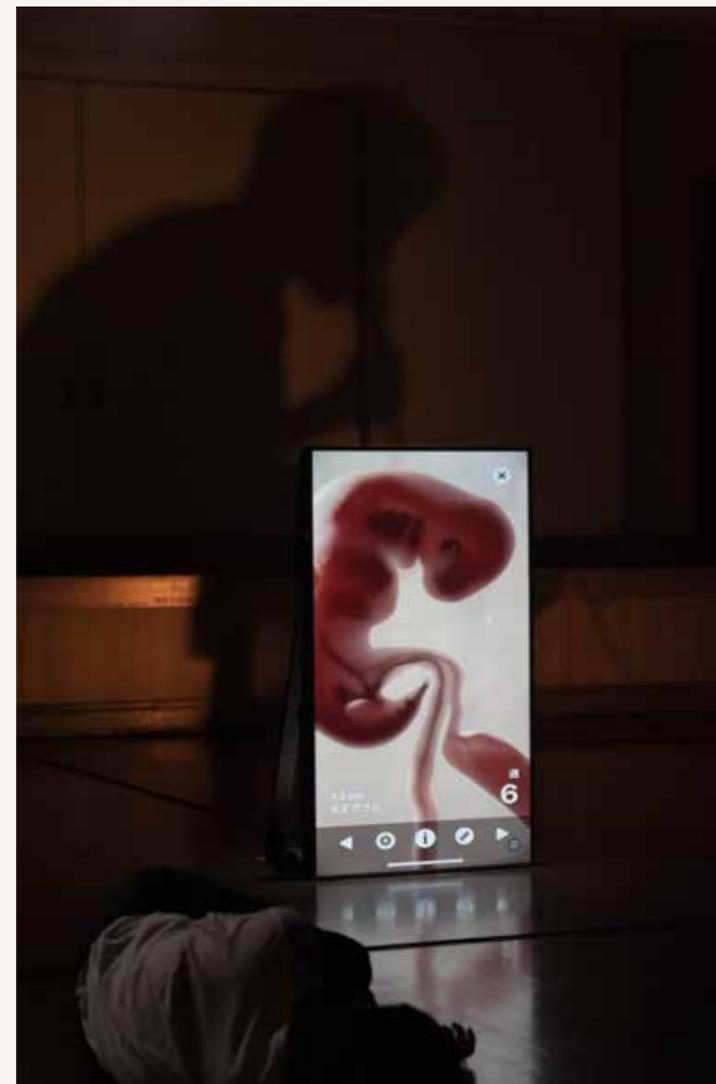
This theater work is inspired by "couvade" a custom in which a man experiences some of the same symptoms and behaviors as his pregnant partner before and after they give birth. In the work both male and female performers, who have never given birth before, use their own bodies and imagination to simulate the process of pregnancy and childbirth on stage. The work is a re-creation of a work by Nagara Wada that premiered in 2019. In this re-creation, media artist yang02 worked with Wada as collaborator on the stage design and three teenagers recruited from an open call joined the cast for the performance.

2021 AUTUMN 選出作品

「恐怖と祈りを、^{はら}孕む」 文・美女丸

Selected Review 2021 Autumn
Pregnant—with Fear and Prayers
Bijomaru

77



和田ながら×やんツー『擬娩』(2021) 撮影:白井茜 (p.77, 81)
Nagara Wada & yang02, *Couvade*, 2021, Photo by Akane Shirai. (pp.77, 81)

擬娩(ぎべん)とは、妻の出産前後に、夫が出産にまつわる行為を模倣する習俗である。

和田ながらが2019年に初めて上演し、KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMNにてメディアアーティストのやんツーをコラポレーターに迎え再制作された『擬娩』。本作では、出産未経験の俳優が演じる男女4人が、擬娩という習俗になぞらえて、実際に妊娠した場

Couvade is a cultural custom in which a husband, prior to his wife giving birth, performs acts imitative of giving birth.

Nagara Wada first performed this piece in 2019 and recreated it for Kyoto Experiment 2021 Autumn in collaboration with the media artist yang02. In the work, four male and female performers with no experience of giving birth experience the changes

合に想定される日常生活における変化や苦労を体現する。そこで描かれるのは、命を我が身に孕むということの“恐怖”と、それに二律背反するかのように捧げられる“祈り”である。

現代に暮らすばらばらの男女4人——在宅ワークで働く男、高校三年生の少女、高校二年生の少年、中学生——の日常が、ある日突然妊娠することによって一変する様子が描かれる。調べると、登場人物の年齢はそれぞれ、出演する俳優自身の年齢と同じになるよう設定されているようである。つまり俳優は、自分に限りなく近い境遇にある役を演じるなかで、俳優という役割を超え、自分事のような感覚で妊娠を疑似体験するという仕組みになっている。

舞台上には、やんツーの手がける5台の舞台美術——大型モニター、送風機、セグウェイ、ルンバ、3Dプリンター——が点在している。舞台中央に置かれた大型モニターに映されるのは、若者のものらしいスマートフォンの操作画面である。このスマートフォンの所有者は作中で特定されることはなく、現代における妊娠を象徴するものとして示喩的に鎮座している。送風機の口には赤い風船が繋がれており、これが物語の進むにつれ巨大に膨らんでいき、胎児が腹の中で成長していく様に喩えられる。また、セグウェイとルンバは常に舞台上を動き回っているうえ、送風機と、リングを造形し続ける3Dプリンターも、リモートコントロールされた台車に乗ってこれまた動き回っている。駆動する四台のマシンが発するハム音や、セグウェイに取り付けられたスピーカーから物語が節目を迎える度に聴こえる「声」による無機的なモノローグが、異化効果を生み、「妊娠を擬態する”ための独特な仮想空間を演出している。

さて、いつも通りの快活な日常を終えた明るく日の朝、4人の男女は妊娠する。大型モニターではスマホの持ち主が、それまでただ流行や話題を追いかけるためにしか使わなかったSNSで、妊娠にまつわる情報をかき集めるようになる。リモートで働く男性や学生たちの日常は、快活だった昨日とは一変し、身に宿した新しい命を気にかけてながら慎重に一挙手一投足をとるようになる。

本作を観劇し終えた時点でまず気がつくのは、妊娠することへの眼差しが、作家自身の生活の及ぶ範囲に留まっていた点である。日本の、さらに都市部における生活への想像力のみが働いており、地方での生活や諸外国の文化はあらゆる描写に介在しない。作家は、妊娠という非常事態における、身体的違和感、そして畏怖を、終始あくまで自分事として再現しようとしている。この作家にとってのリアリティが、4Dエコーの映像をモニターに表示するなどといった、微に入り細を穿つ具象化によって、生身の肌触りを伴って客席に伝播し、本作の骨子を形成していく。

and difficulties of daily life that would occur were they actually pregnant, based on this custom of couvade. What is then portrayed is the fear of being pregnant with another life in your own body, and the prayers that they offer up almost like an antinomy.

It depicts how the present-day, unconnected lives of these four—a teleworking man, a female high schooler in third grade, a male high schooler in second grade, and a junior high school student—completely change when they find themselves suddenly pregnant one day. Checking the details, the ages of the actors seem to match those of characters. As such, the actors perform a role whose circumstances are incredibly similar to their own, thus experiencing a simulation of pregnancy as if it is their personal experience and transcending their function as an actor.

The five items of yang02’s scenography are dotted around the stage: a large monitor, air blower, Segway, Roomba, and 3D printer. The interface of what seems to be a young person’s smartphone is shown on the large monitor in the middle of the stage. The smartphone’s owner is never identified during the performance; it is enshrined, redolent of a symbol of present-day pregnancy. A red balloon is tied to the nozzle of the air blower and swells massively as the story progresses, analogous to the growth of a fetus in the belly. The Segway and Roomba constantly move around the stage, while the 3D printer, continuing throughout to create an apple-shaped object, and the air blower are placed on remote-controlled carts that also move around. The operating hum of the four machines and the inorganic monologue of the “voice” audible from the speaker attached to the Segway when the story reaches a turning point have a distancing effect, conjuring up a unique virtual space for imitating pregnancy.

One morning after another carefree and ordinary day, four people (both male and female) are pregnant. On the large monitor, the smartphone’s owner starts to collect information about pregnancy on social media, which they had only used until then for following the latest trends and buzz. The everyday lives of the students and the man who works from home that were yesterday so full of cheer suddenly change, and they make each and every slightest movement with caution and care for the new life they now carry inside their body.

After watching this work, the first thing you realize is that its view of pregnancy extends only as far as the artist’s private life. The vision at work here is solely of Japanese lifestyle, and the one that we find in cities, while regional lifestyles and foreign cultures make no appearance. From start to finish, the artist is attempting to recreate the physical disquiet and dread that resides in the extraordinary situation that is pregnancy as something utterly personal. What is reality for the artist is imparted to the audience through the finely detailed embodiment that is displaying a 4D echocardiogram on the screen, and with the texture of a living body, and so shapes

懐妊した4人の日常は、物語が進むにつれ、暗澹たる^{あんたん}様相を強めていく。いつもなら気にならない些細な匂いを強烈な悪臭に感じてしまう。学校を休み、横になって一日中動くことができない中学生。高校三年生の少女が鼻歌交じりに身支度していた洗面所も、今や憂鬱に支配されている。高校二年生の少年は「(男だから実際の痛みは)分からないけど」と言いながらも全力で腹痛を想像し、身を切るように演技してみせる。

このように本作では一貫して、妊娠当事者の現実が努めて写実的に描かれる。それは、作家が“妊娠”を考えるにあたり、まずその姿をできるだけ実情に近い形で直視しようとした結果であると推察できる。『擬婉』を初めて制作した当時の心境について演出家・和田ながらは、「妊娠と出産に対する自分のあまりの無知が恥ずかしく、むさぼるように検索し、すがりつくように経験者の話を聞いた。想像が及ばない身体的経験への恐れと憧れ、無知が許されてきた非対称な世界への怒りのようなものに衝き動かされていた」と、今公演のパンフレットの中で述懐している。自身の閉じた世界に失望し、未知の領域を怖れながらも、果敢に自己を未知の世界へ裂開せんとする和田のこの葛藤が、彼ら4人の“擬婉”をこれほど切実にしているのである。

物語中盤、高校二年生の少年と高校三年生の少女はそれぞれ、自分の孕んだ胎児と直接話す夢を見る。どちらの胎児もまだ生まれてもいないのにとても良識人で、親の心身を気丈にも気遣う。他人行儀な会話が軽微なニューモアとともに繰り返られるなか、胎児は「産み育てるだけのお金はあるのか」「もし迷惑なら、自分は居なくなった方がいいのではないか」と問う。親は自信なさげに、しかしそれが親の務めとでもいうように「大丈夫」「生まれてきてほしい」と言葉をかける。

人類が古くより、妊娠というものをどこか神聖視し、子を産むことを人々に半ば強制してきた歴史があることは、時代や民族の違いによって程度の差はあれ、認めざるをえないだろう。たとえばかつての習俗「擬婉」では、夫は、身籠った母親が産褥期さんじょくきを終えるまで、特定のあるものを食べてはならない、無闇に外出してはならないといった禁忌を課せられることが多かった*。村落全体がそのような雰囲気の中、自分を最優先にして生きることが容易でないことは、想像に難くない。一方で現代では、自己の決定によって人生をある程度自由に生きることへのハードルは、着実に下がってきている。子を持つことを想定しないライフプランを選ぶ人間も今では珍しくない。

しかしだとしたら、今まさにその現代での出産を考えているこの高校生2名が、これほど苦悩しているというのはどういうわけか。彼らが直面している問題は、種／個という二項対立を用いて読み解くことができる。つまり、種＝人類として子孫を残そうとするヒトとしての本能

the framework of the performance.

The daily lives of the pregnant four become more dismal as the story progresses. The inconsequential smells they would usually pay no attention to now seem like intensely foul odors. The junior high school student takes time off school and spends all day lying down, unable to move. Even when humming and getting dressed in the washroom, the female high schooler is still weighed down by her depression. While saying that he doesn’t know what it’s like (since he’s not a woman), the male high schooler does his best to imagine the abdominal pain, and acts as if afflicted by it.

The work consistently strives to portray the reality of actual pregnancy with accuracy. We can infer that this is the result of the artist’s attempt to look squarely at the subject in a way as close to reality as possible when she reflected on the nature of pregnancy. In the pamphlet for the performance, the director Nagara Wada recalls her feelings when she first created the work: “Embarrassed by my own ignorance in regard to pregnancy and childbirth, I searched ravenously and listened desperately to the stories of people with firsthand experience. I was spurred on by my awe and yearning for a physical experience beyond my imagination and something akin to anger at the asymmetric world that has allowed such ignorance.” In despair of her insular world and yet fearful of the unknown, boldly endeavoring to open herself up to an unfamiliar world, it is Wada’s conflict that makes the couvade of the four so compelling.

In the middle of the story, the male and female high school students each has a dream in which they talk to the fetus inside their body. Despite their unborn status, both fetuses have a lot of common sense and confidently express their worries about their parent’s mind and body. Over exchanges that unfold aloofly but also somewhat humorously, the fetuses ask if their respective parent has enough money to have a child, and suggest that it might be better for them to “disappear” if they are causing trouble for their parent. Doubtfully, almost dutifully, the parents reassure the fetuses, and tell them that they want to give birth to them.

That humankind has since ancient times deified pregnancy, and effectively forced people in the past to give birth must be recognized at one level or another according to differences of era and ethnic group. In the former custom of couvade, for instance, the husband was frequently forbidden from doing various things until the pregnant mother reached the end of her postpartum period, including eating certain foods or going out.* It is not hard to imagine how difficult it must have been to prioritize your own life when such an atmosphere pervaded the entire village. Today, however, the barriers preventing you from living your life more or less as you wish are steadily decreasing. It is not especially rare for people to choose a life not premised on having children.

と、個＝自己として人生を生きようとする人間としての本能とが共存し、せめぎ合うということ、それこそが“妊娠”の現代における(いや、ともすれば普遍的な)苦悩なのである。和田はKYOTO EXPERIMENTが行ったインタビューにて、「アーティストとしてのキャリアに自信を持てるようになる前に子どもが生まれたら創作活動は続けられないだろう、と思い込んでいた」という悩みが、本制作の初期衝動にあったと語っている。子を持つということが、自分の人生を諦めることの言い換えになってしまふ場合が、現代においても未だ少なくない。新しい生命が誕生する喜びは、その後の親の幸福も、子の幸福も保証してくれない。それでもなお「大丈夫」と子に語りかける彼らの横顔には、命への期待と、それを上回る不安とが色濃く滲む。

物語終盤、高校三年生の少女はついに分娩の時を迎える。送風機の威圧的なモーター音にその体軀を何倍にも膨張させていく風船は、いつキャパシティの閾値を超え、破裂するかわからない。観客はその緊張感に、彼女の身が裂けるような恐怖を重ねながら、ただ見守ることしかできない。少女は身体にその瞬間起こっていることを悪寒交じりにレポートするが、それは彼女が冷静だからではなく、そうすることでしか平静を保つことができないからであるように見えた。それほどの痛みにも拘わらず、しかし逃げず立ち続けることができるのは、そこに希望を見出し、祈るからであるように思えてならない。

彼女がこの瞬間に直面している恐怖とは、腹の異物感が今まさに己が股を割き生まれんとしていることに対するものばかりではない。出産することによって、親である自分と、子という他者、その両方の人生に責任を持つことになるという苦難に直面するからこそ、これほど恐れ、また祈るのである。子を産むことで親は、後世に子孫を残すという種としての使命と、自己を生きるという個としての使命の、二律背反のはざまに立ち、引き裂かれるのである。そうとわかりながら、風船が破裂するその瞬間まで、彼女はそこに、立ち続けた。

風船が破裂し、静謐^{せいひつ}につつまれる舞台に、セグウェイから発せらる無機的な駆動音と光、そして「声」だけが響く。そこで語られるのは、妊娠とは「中断せず続くこと」であり、そして人には「“親”でも“子”でもなくなる時」が来るということである。これらはこう解釈できる。妊娠は、種を途絶えさせないための営みでもあるが、そういう生物的存在あるいは社会的属性から解放され、人が単なる「個」となる瞬間が重要であると。

現代では、インターネットにおけるSNSの発達、そして動画作成ツールの普及により、誰しもが、誰かかつながり、また個性を簡単に発揮しうる時代となった。しかし、では「個」が重視される時代になったのかというと、必ず

In which case, why is it that these two high school students thinking about giving birth in a time like today are agonizing so much? We might decode the problems that they face using the dichotomy of species and the individual. To wit, the instinct as a person to try to leave descendants behind as a member of the species (that is, the human race) coexists and conflicts with the instinct as a human being to live your life as an individual (that is, as yourself), and this is the anguish over pregnancy today (or rather, universally). In an interview conducted by Kyoto Experiment, Wada describes the anguish she felt in the initial impulse to create the work: "Before I had confidence in my career as an artist, I was convinced that I wouldn't be able to continue working artistically if I had a child." Even today, it is still often the case that having a child is synonymous with giving up having your own life. The joy that comes from giving birth to a new life does not guarantee subsequent happiness for either the parent or the child. Their profiles of the two students as they nonetheless reassure their children exude their expectations for life and the even greater unease that they feel.

At the end of the story, the female high schooler reaches the final stage of pregnancy. The balloon massively inflating with the menacing sound of the air blower's motor, it seems like it will exceed its capacity threshold and burst any moment. In the midst of this tension, the audience can only watch with fear that her body may rip apart. Though the girl tremblingly reports what is happening to her body at that moment, this is not a sign of her composure, but rather seems to be the only way for her to stay calm. That she is able to remain standing without fleeing in spite of the pain is almost as if it is because she is finding hope there and praying.

The fear that she feels of this moment is not only a fear stemming from the sense of something foreign in her belly that is on the verge of tearing open her groin and being born from her body. It is fear, and a prayer, because she is facing the ordeal of, through giving birth, becoming responsible for two lives: that of herself as a parent and that of another person, her child. By giving birth to a child, the parent stands torn by the antinomy between their mission as a member of the human species to leave descendants behind and their mission as an individual to live their life as themselves. Cognizant of this, she continues to stand there until the moment that the balloon bursts.

After this finally happens, the stage is shrouded in calm, with only the inorganic motor sounds, lights, and "voice" emitted by the Segway resonating. What we are then told is that pregnancy is "continuing without interruption," and that for people, there comes "a time when they are neither parent nor child." This can be interpreted as follows: that pregnancy is a condition that ensures the perpetuation of the species, but that the moment when people are liberated from biological or social attributes, and

しもそうとは言えない。You Tuberやインフルエンサーの台頭に代表される、世界を舞台に活躍するインターネット上の“人気者”の乱立は、人の個性を重んじることに貢献するどころかむしろ、「強い個人」と「その他大勢」とに人類を大きく分断してしまった側面があると考え。そして、乱立する個性を前に人々は、よりおもしろい個性や出来事を求め、それらを次々に消費していくようになったと感じている。

これほど高度な文明的発展を遂げた現代にあって、擬娩という古い習俗は、それゆえに分断されてしまった個人同士を、想像力という糸で縫い、ふたたび繋ぎ合わせる針のような存在として、いま一度よみがえる。やんツーは、同インタビューにて次のように語った。「(擬娩という習俗について:引用者注)昔は他者の痛みとかを想像することで、人間関係がうまくいくっていうことを本能的にやっていたってことですよ。すごいなと思って。むしろ今、人類は想像する力が退化してるなって気がしています」。

妊娠することに対する作家や俳優の等身大の“恐怖”と、それがゆえに生命そのものへ捧げられる“祈り”に、持ちうる限りの想像力でもって真摯に向き合った『擬娩』。作家は制作を通じ、「人間とは、生命とは、個性とは本来なんだったか」と鑑賞者に問い、またその答えを探究しているように思えてならない。身の裂けるほどみずみずしく愚直な命の正しさに、われわれがいくら怯えようとも、想像し、憧れることをやめられないのは、生命に畏怖しながらも、その幸福を祈るからではないのか。



*参考文献

池田光穂、「擬娩／偽娩(ぎべん)」、大阪大学COデザインセンター、閲覧日2021-11-29
<https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/030806repro06.html>

美女丸

ソキユウ主宰。作劇、演出を務める。大学入学と共に演劇に触れ、活動を開始。京都学生演劇祭に2015年、2016年と個人ユニットとして参加。2017年にユニット名をソキユウに変え、芸術制作を本格化させる。ソキユウ第四回公演『顔皮-ganpi-』(2019)では、「私語、立ち歩き、飲水、写真撮影すべて自由」という観劇ルールの中で行う実験作を上演。最新作である第五、五回公演『蟻のプール』(2021)では、「静かな演劇」の系譜を踏襲しながら、小学生たちの肉薄したリアルを描いた。

become simply individuals is vital.

The development of social media online and the spread of tools for making videos has turned the present day into an age when anyone can connect with others and easily exhibit their individuality. This, however, does not necessarily mean that we live in an age when individuals are valued. Far from contributing to an esteem for people's individuality, the deluge of online "celebrities" active across the globe, led by the likes of the YouTubers and influencers, have deeply divided humankind into "strong individuals" and "the many others." Faced with this mass of individuality, people seem to seek out more interesting individuality and incidents, and to consume them one after another.

In the modern era, having advanced so far as a civilization, the old custom of couvade is once again revived as something akin to a needle that uses the thread of the imagination to stitch together and rejoin the individuals divided by those very advances. In the aforementioned interview, yang02 said the following about the custom of couvade: "Long ago, people instinctively did something that improved human relations by imagining the pain of others. What an amazing thing that is. Now, if anything, the ability of humanity to imagine seems to be on the decline."

With as much imagination as it is possible to have, *Couvade* sincerely confronted the life-size fear of the artist and actors toward pregnancy, and the prayer that is accordingly offered to life itself. It is almost as if Wada is, through the work, asking the audience about the fundamental nature of humankind, of life, of individuality—and searching for the answer. That we can never give up imagining or aspiring, no matter how frightened we are by the body-sundering, innate, and blunt certainty of life, is surely because we remain fearful of life while still praying for its happiness.

*Mitsuho Ikeda, "Couvade", Osaka University CO Design Center, <https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/030806repro06.html>, 29 November 2021

Bijomaru

Playwright, director, and artistic director of sokyū. He came into contact with theatre after entering university, during which time he took part in Kyoto Student Theater Festival in 2015 and 2016 under his own name. Bijomaru then adopted the company name sokyū in 2017 and launched his artistic career fully. The company's fourth production, *ganpi* (2019), was an experimental performance in which audiences were allowed to hold private conversations, walk around, drink, and take photographs. Its most recent production, *Pool of Ants* (2021), was a realistic, close-up portrayal of elementary school students that followed in the footsteps of the Japanese Quiet Theater movement.



KYOTO EXPERIMENT



TAKEKAKA

株式会社タケナカは KYOTO EXPERIMENT に映像機材協力しています



株式会社タケナカ 京都営業所

〒612-8415 京都府京都市伏見区竹田中島町 251 TEL 075-647-3111(代) <http://www.takenaka-co.co.jp>

TOKYO OSAKA NAGOYA SHANGHAI

SYMUNITY GROUP

D

dancereflections-vancleefarpels.com

DANCE REFLECTIONS BY VAN CLEEF & ARPELS

SUPPORTING CONTEMPORARY DANCE

R

サンエムクオリティーな印刷を
小部数でも対応可能になりました。

JetPress
B2サイズ枚葉型インクジェットデジタルプレス
オフセット印刷を凌駕する、この革新的な高画質が、印刷に
新たな付加価値をもたらします。

ギガピクセルアートスキャナ
〈最大 120 億画素 1 ショット 6.74 億画素〉
凹凸情報 (N map, H map) 取得可能

swissQprint KASANE GRAPHIC
大型プリンター swissQprint Oryx 3
(2,500×2,000mm 印字、50mm の厚みまで対応)
凹凸プリント、部分レンデュラー

ハイデルベルグ XL-105-8-P 8色機
(LED-UV 仕様)

株式会社 サンエムカラー

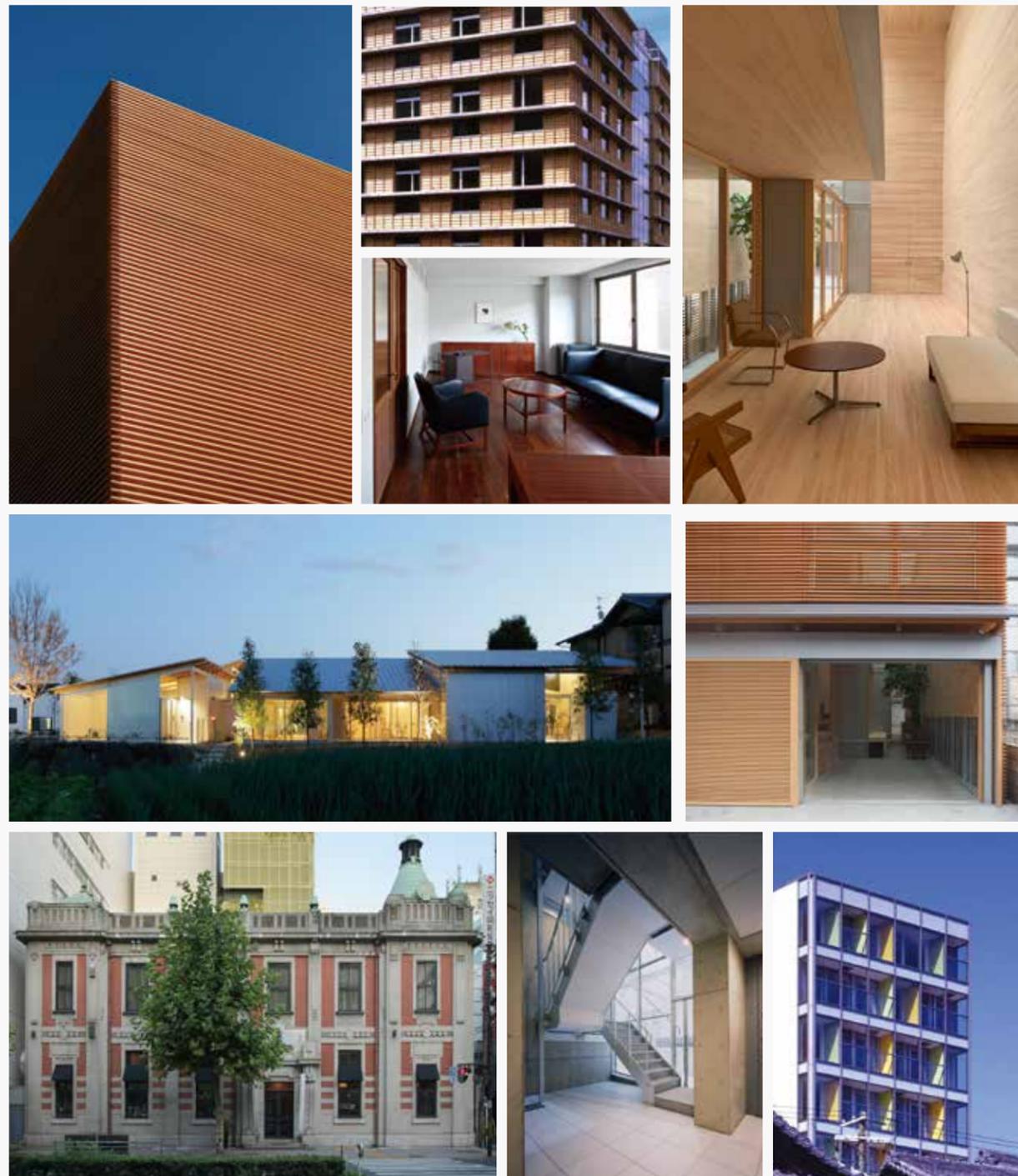
本社 〒601-8371 京都市南区吉祥院嵯峨山町37
Tel.075-671-8458 (直) Fax.075-671-0154 www.sunm.co.jp

Home Page Twitter Instagram



HASE BUILDING GROUP

OFFICE, WORK SPACE, APARTMENT
EVENT SPACE etc...



株式会社 長谷ビル

604-8152 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 TEL 075-213-2020 | FAX 075-213-2010 | hase-building.co.jp

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2022

主催
京都国際舞台芸術祭実行委員会
京都市
ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)
京都芸術大学 舞台芸術研究センター
THEATRE E9 KYOTO(一般社団法人アーツシード京都)

助成
文化庁文化芸術振興費補助金(国際芸術交流支援事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
一般財団法人地域創造
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造
ファンド

Performing Arts Fund NL
オランダ王国大使館
オーストリア文化フォーラム東京
豪日交流基金

共同主催
スペースノットブランク
(小野彩加、中澤陽/スペースノットブランク『再生数』)
独立行政法人国際交流基金
(メルツバウ、バラージ・バンディ、リチャード・ピナス with 志賀理江子
『Bipolar』)
Dance Reflections by ヴァン クリーフ&アーペル
(ティノ・セーガル『これはあなた』)

協賛
株式会社長谷ビル、株式会社サンエムカラー、
株式会社グランマール

特別協力
ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都、京都中央信用金庫、
ケベック州政府在日事務所

機材協力
照明機材協力: 株式会社流(RYU)
音響機材協力: 有限会社クワット
映像機材協力: 株式会社タケナカ

協力
UrBANGUILD、エースホテル京都、オーストラリア大使館、
KAGANHOTEL、河原町商店街振興組合、城崎国際アートセンター
(豊岡市)、京都岡崎 萬屋書店、京都学生演劇祭、京都国際映画祭
2022、京都市京セラ美術館、京都伝統文化の森推進協議会、
四条繁栄会商店街振興組合、高槻芸術時間「インターロード」、
豊岡演劇祭2022、どんがはたキャンパ場、ニュー・ブランシュKYOTO 2022、
node hotel、BnA Alter Museum、プリティッシュ・カウンスル、
ホテルアンテルーム京都、Port B、ままごと、READYFOR、祇園商店
街振興組合、加藤安臣(バズブランカ、京都カポエラスポーツセンター
Capoeira Gerais)、前田亜美(忍者堂)、MAGASINN KYOTO

サポーター
中浜美也子
クラウドファンディングにご協力いただいた皆様

Organized by
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee
Kyoto City
ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting
Foundation)
KYOTO ART CENTER (Kyoto Arts and Culture Foundation)
Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of the Arts
THEATRE E9 KYOTO (Arts Seed Kyoto)

Supported by
The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, through
the Japan Arts Council, Fiscal Year 2022
Japan Foundation for Regional Art Activities
Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund
for Creation of Society by the Arts and Culture

Performing Arts Fund NL
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Austrian Cultural Forum Tokyo
Australia-Japan Foundation

Views by Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank is
co-presented by Spacenotblank
Bipolar by Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga is
co-presented by The Japan Foundation
This You by Tino Sehgal is
co-presented by Dance Reflections by Van Cleef & Arpels

Sponsored by
Hase Building Co., Ltd., SunM Color Co., Ltd., GRAND MARBLE

With the special cooperation of
Goethe-Institut Osaka Kyoto, Kyoto Chuo Shinkin Bank, Délégation
générale du Québec à Tokyo

With the stage equipment cooperation of
Lighting Equipment: RYU Co., Ltd.
Audio Equipment: KWAT Co., Ltd.
Video Equipment: Takenaka Co., Ltd.

With the cooperation of
UrBANGUILD, Ace Hotel Kyoto, Australian Embassy Tokyo,
KAGANHOTEL, Kawaramachi Shopping Street Promotion Association,
Kinosaki International Arts Center (Toyooka City), Kyoto Okazaki
Tsutaya Books, Kyoto Student Theater Festival 2022, KYOTO
INTERNATIONAL FILM AND ART FESTIVAL 2022, Kyoto City
KYOCERA Museum of Art, Council for Kyoto Traditional Forest
Culture, Shijo Han'eikai Shopping Street Promotion Associations,
Takatsuki Art Hour "interlude", Toyooka Theater Festival 2022,
Donghata Campsite, Nuit Blanche KYOTO 2022, node hotel, BnA
Alter Museum, British Council, HOTEL ANTEROOM KYOTO, Port B,
mamagoto, READYFOR, Gion Shopping Street Promotion Association,
Yasuo Kato (BaseBranca, Capoeira Gerais), Ami Maeda (Ninja-Do),
MAGASINN KYOTO

Supporters
Miyako Nakahama
Crowdfunding Supporters



令和4年度日本博イノベーション型プロジェクト
(独立行政法人日本芸術文化振興会/文化庁)
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan,
through the Japan Arts Council, Fiscal Year 2022

京都国際舞台芸術祭実行委員会

委員長：

天野文雄(京都芸術大学 舞台芸術研究センター特別教授／能楽研究)

副委員長：

森川佳昭(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事)

委員：

安藤善隆(京都芸術大学 舞台芸術研究センター所長／同大学教授)

小倉由佳子(ロームシアター京都 事業課長)

小崎哲哉(ICA京都 REALKYOTO FORUM 編集長)

蔭山陽太(一般社団法人アーツシード京都理事／THEATRE E9 KYOTO 支配人)

小山田 徹(美術家／京都市立芸術大学教授)

畑 律江(毎日新聞大阪本社学芸部専門編集委員)

牧澤 憲(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課事業推進担当課長)

山下 聡(公益財団法人京都市芸術文化協会専務理事兼事務局長)

吉岡 洋(美学者／京都芸術大学 文明哲学研究所教授)

監事：

高畑重勝(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団／ロームシアター京都副館長)

森 貴之(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)

顧問：

太田耕人(演劇評論家／京都教育大学学長)

茂山あきら(狂言師／NPO 法人京都アーツミーティング理事長／THEATRE E9 KYOTO館長)

篠原資明(京都大学名誉教授)

千 宗室(裏千家家元)

建畠 哲(京都芸術センター館長／多摩美術大学学長)

平田オリザ(劇作家・演出家／劇団「青年団」主宰／芸術文化観光専門職大学学長)

(五十音順)

京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

共同ディレクター：

川崎陽子、塚原悠也、ジュリエット・礼子・ナップ

事務局長：垣脇純子

事務局：井上美葉子、門脇俊輔、渡邊裕史

広報：豊山佳美、前田瑠佳

広報サポート：多胡真佐子

制作統括：山崎佳奈子(KANKARA Inc.)

制作：小島寛大(Bassline Arts Management)、芝田江梨、清水 翼(KANKARA Inc.)、平野春菜、藤村南帆、眞鍋集介

〔ロームシアター京都〕齋藤 啓、寺田貴美子、栢谷雄一郎

〔京都芸術センター〕瀬藤 朋、中谷圭佑、平居香子、八木志菜

〔京都芸術大学 舞台芸術研究センター〕川原美保、後藤孝典

〔THEATRE E9 KYOTO〕奥山愛菜、木元太郎

テクニカルディレクター：夏目雅也

テクニカルコーディネーター：北方こだち、小林勇陽、さかいまお

事務局インターン：小田島しあ、山際美優

ドキュメントコーディネート：MUESUM(多田智美、永江 大、羽生千晶)

和文英訳：Art Translators Collective(リリアン・キャンライト、アレックス・デュドク・ドゥ・ウィット、水野 響、森本優芽、内山もにか)、ウィリアム・アンドリュース

クラウドファンディング運営：西谷枝里子(リレーリレー LLP)

アートディレクション・デザイン：小池アイ子

映像・写真ディレクション：slide//show(松見拓也、金成基、嶋田好孝、守屋友樹)

ウェブディレクション：bank to LLC.(光川貴浩、早志祐美、松田寛志)

ウェブデザイン：吉田健人(bank to LLC.)

ウェブプログラム・コーディング：人見和真(bank to LLC.)

アドバイザーボード：

レザ・アフィシナ(コレクティブ「ルアンルバ」ビジュアルアーティスト／ドクメンタ15芸術監督／インドネシア、

ジャカルタ・Gudskul:コレクティブスタジオと現代美術のエコシステムメンバー)

細尾真孝(株式会社細尾 代表取締役社長)

アンナ・ヴァグナー(フランクフルト・ムゾントゥルム劇場 アーティスティック・マネージングディレクター)

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

Chair

Fumio Amano (Professor, Kyoto Performing Arts Center)

Vice Chair

Yoshiaki Morikawa (Managing Director, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)

Committee Members

Yoshitaka Ando (Professor, Director of Kyoto Performing Arts Center)

Yukako Ogura (Program Director, ROHM Theatre Kyoto)

Tetsuya Ozaki (Editor-in-Chief, REALKYOTO FORUM, ICA KYOTO)

Yota Kageyama (Director, Arts Seed Kyoto / Theatre Manager, THEATRE E9 KYOTO)

Toru Koyamada (Artist / Professor, Kyoto City University of Arts)

Ritsue Hata (Editorial committee member of Arts and Cultural News Department, Osaka head office of The Mainichi Newspapers)

Ken Makizawa (Manager, Culture and Arts Planning Section, Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City)

Satoshi Yamashita (General Manager and Secretary-General, Kyoto Arts and Culture Foundation)

Hiroshi Yoshioka (Aesthetician / Professor, Institute of Philosophy & Human Values Kyoto University of The Arts)

Supervisors

Shigekatsu Takahata (Deputy Director, ROHM Theatre Kyoto, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)

Takayuki Mori (Manager, Culture and Arts Planning Section, Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City)

Advisors

Kojin Ota (Theater Critic / President, Kyoto University of Education)

Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting / Director, THEATRE E9 KYOTO)

Motoaki Shinohara (Professor Emeritus, Kyoto University)

Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master)

Akira Tatehata (Director, Kyoto Art Center / President, Tama Art University)

Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan / President, Professional College of Arts and Tourism)

Names are listed in gojuun order (a system for ordering Japanese kana characters).

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

Co-directors:

Yoko Kawasaki, Yuya Tsukahara, Juliet Reiko Knapp

Administrative Director: Junko Kakiwaki

Office: Miwako Inoue, Shunsuke Kadowaki, Hiroshi Watanabe

Public Relations: Yoshimi Toyoyama, Ruka Maeda

Public Relations Support: Masako Tago

Chief Production Coordinator: Kanako Yamasaki (KANKARA Inc.)

Production Coordinators: Hiroতোmo Kojima (Bassline Arts Management), Eri Shibata, Tsubasa Shimizu (KANKARA Inc.), Haruna Hirano,

Naho Fujimura, Shunsuke Manabe

[ROHM Theatre Kyoto] Kei Saito, Kimiko Terada, Yuichiro Masuya

[Kyoto Art Center] Tomo Setou, Keisuke Nakaya, Kanoko Hirai, Yukina Yagi

[Kyoto Performing Arts Center] Miho Kawahara, Takanori Goto

[THEATRE E9 KYOTO] Mana Okuyama, Taro Kimoto

Technical Director: Masaya Natsume

Technical Coordinators: Kodachi Kitagata, Yuhi Kobayashi, Mao Sakai

Interns: Shia Odajima, Miyu Yamagiwa

Text Coordination: MUESUM Co.Ltd., (Tomomi Tada, Dai Nagae, Chiaki Hanyu)

English translation from Japanese: Art Translators Collective (Lillian Canright, Alex Dudok de Wit, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto,

Monika Uchiyama), William Andrews

Crowdfunding Management: Eriko Nishitani (Relay Relay LLP)

Art Direction / Design: Aiko Koike

Archive Video and Photo Direction: slide//show (Takuya Matsumi, Kim Song-Gi, Yoshitaka Shimada, Yuki Moriya)

Web Direction: bank to LLC. (Takahiro Mitsukawa, Yumi Hayashi, Hiroshi Matsuda)

Web Design: Kento Yoshida (bank to LLC.)

Web Programming / Web Coding: Kazuma Hitomi (bank to LLC.)

Advisory Board:

Reza Afisina (Visual Artist from collective ruangrupa / Artistic Director for documenta fifteen /

Member of Gudskul: collective study and contemporary art ecosystem from Jakarta, Indonesia)

Masataka Hosoo (President & CEO, Hosoo Co.Ltd.)

Anna Wagner (Artistic and Managing Director, Künstler*innenhaus Mousonturm, Frankfurt am Main)

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2022 magazine

京都国際舞台芸術祭実行委員会
京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
Tel 075-213-5839 E-mail info@kyoto-ex.jp
https://kyoto-ex.jp

発行日 2022年9月5日

アートディレクション・デザイン:小池アイ子
デザインアシスタント:田中ヴェートリ美南海
編集:山口紀子、前田瑠佳、豊山佳美、川崎陽子、塚原悠也、ジュリエット・礼子・ナッブ
和文英訳:Art Translators Collective(リリアン・キャンライト、アレックス・デュドク・ドゥ・ウィット、
水野響、森本優芽、内山もにか)、ウィリアム・アンドリュース(p.3, 7-11, 52-54, 64-75, 77-81)
ドキュメントコーディネーター:MUESUM(多田智美、永江 大、羽生千晶)
イラスト:星野ロビン(p.72)

印刷・製本:大日本印刷株式会社

Kyoto Experiment: Kyoto International Performing Arts Festival 2022

Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee
6F, 7 Hase Bldg. 229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku Kyoto
Tel +81-(0)75-213-5839 E-mail info@kyoto-ex.jp
https://kyoto-ex.jp/en

Published September 5th, 2022

Art Direction & Design: Aiko Koike
Design assistant: Minami Wetli Tanaka
Editing: Noriko Yamaguchi, Ruka Maeda, Yoshimi Toyoyama, Yoko Kawasaki, Yuya Tsukahara, Juliet Reiko Knapp
English translation from Japanese: Art Translators Collective (Lillian Canright, Alex Dudok de Wit, Hibiki Mizuno, Yume Morimoto, Monika Uchiyama), William Andrews (pp.3, 7-11, 52-54, 64-75, 77-81)
Text Coordination: MUESUM Co.Ltd., (Tomomi Tada, Dai Nagae, Chiaki Hanyu)
Illustration: Robin Hoshino (p.72)

Printing: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

© KYOTO EXPERIMENT

プログラムチケット料金 Tickets

*1 ... 25歳以下 25 and under

*2 ... 取扱い・前売のみ Advanced tickets only

前売料金 Advance Ticket Price	一般 Adult	ユース*1・学生 Youth/ Students	高校生以下 High School Students & Younger	ペア*2 Pair ²	席種 Seating
Kansai Studies: dot architects & 和田ながら dot architects & Nagara Wada	¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500	自由 Unreserved
小野彩加、中澤陽/スペースノットブランク Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500	自由 Unreserved
サマラ・ハーシュ Samara Hersch	¥3,000	¥2,500	×	¥5,500	入場券 Admission ticket
フロレンティナ・ホルツインガー Florentina Holzinger	¥4,000	¥3,000	×	¥7,500	自由 Unreserved
松本奈々子、西本健吾/チーム・チープロ Nanako Matsumoto & Kengo Nishimoto / team chiipro	¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500	自由 Unreserved
メルツバウ、バラージ・バンデイ、 リシャール・ピナス with 志賀理江子 Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga	¥3,500	¥3,000		¥6,500	自由 Unreserved
梅田哲也 Tetsuya Umeda	¥3,000	¥2,500		¥5,500	入場券 Admission ticket
ジャールナン・バンタチャート Jarunun Phantachat	¥3,000	¥2,500		¥5,500	自由 Unreserved
フォースド・エンタテインメント Forced Entertainment 『もしも時間を移動できたら』 To Move In Time	¥3,000	¥2,500		¥5,500	自由 Unreserved
『リアル・マジック』 Real Magic	¥3,500	¥3,000		¥6,500	自由 Unreserved
アーザー・デ・シャーミーリー Azade Shahmiri	¥3,000	¥2,500	¥5,500	自由 Unreserved	
ミーシャ・ラインカウフ Mischa Leinkauf	入場無料 Free admission			×	
ティノ・セーガル Tino Sehgal	入場無料 Free admission			×	
Super Knowledge for the Future [SKF]	無料・予約優先(一部有料) SKFのプログラムはウェブサイトより ご予約ください。 Some events require a fee / Please make reservations for the SKF program through the festival website.			Free admission	自由 Unreserved
ミーティングポイント Meeting Point	入場無料 Free admission			×	

- ★当日券は前売料金+¥500(高校生以下は同額)
- ★前売券が完売した場合は、当日券の販売がない公演もあります。
- ★当日券の有無については、公演当日に公式Twitterアカウントでご案内します。
- ★チケットの諸注意はp.90をご覧ください。

- ★ Day tickets +¥500. Day tickets for high school students & younger are the same price as advance tickets.
- ★ If advance tickets for a performance sell out, there may be some cases in which day tickets for that performance are not available.
- ★ Please check our official Twitter account on the day of the performance for information on whether day tickets are available.
- ★ See p.91 for more information about tickets.

チケット取扱

📍 KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

オンライン <https://kyoto-ex.jp> (セブン-イレブン引取)[年中無休、24時間受付]
 電話予約 075-213-0820 (セブン-イレブン引取)
 窓口 京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
 取扱時間 11:00-19:00 日曜・祝日休(開催期間中は無休)

📍 ロームシアター京都 チケットカウンター

オンライン <https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/>(要事前登録)[年中無休、24時間受付]
 電話予約 075-746-3201
 窓口 京都市左京区岡崎最勝寺町13 1F
 取扱時間 10:00-19:00 無休(臨時休館日を除く)
 *電話、窓口は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため短縮営業する場合あり。

📍 チケットぴあ

オンライン <http://t.pia.jp> [年中無休、24時間受付]

※一部演目はKYOTO EXPERIMENT チケットセンターでのみ取扱い
 ※その他、各会場でもプログラムのチケット取扱いあり。(各会場で開催するプログラムのチケットのみ販売)
 [京都芸術センター、京都芸術劇場チケットセンター、THEATRE E9 KYOTO]

フリーパスチケット&各種割引チケット

📍フリーパス ¥27,000 **完売**

📍学生フリーパス ¥16,000

Shows、Kansai Studiesの有料公演11演目をご覧いただけます。(枚数限定)

※1演目につき1回。フォースド・エンタテインメントは両演目鑑賞いただけます。
 ※学生フリーパスは要学生証提示。20歳未満のお客様はサマラ・ハーシュの公演はご覧いただけません。
 ※KYOTO EXPERIMENTチケットセンターのみの取扱い／前売のみ／本人のみ有効

📍3演目券 ¥8,100

Shows、Kansai Studiesの有料公演11演目の中からお好みの3演目を選び、すべて同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

📍学生3演目券 ¥6,600

Shows、Kansai Studiesの有料公演11演目の中からお好みの3演目を選び、すべて同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。(要学生証提示)

📍フォースド・エンタテインメント 2演目券 ¥5,000

フォースド・エンタテインメント『もしも時間を移動できたら』、『リアル・マジック』の2演目をお得に観劇できるセット券です。

📍KEX半券割引

当日受付で、対象公演の観劇済み公演チケットの半券／クーポン(パートナーホテル利用時、KYOTO EXPERIMENT フリーペーパーに付与)をご提示いただくと、Shows、Kansai Studiesの当日券が¥500OFF(前売料金)にてご購入いただけます。[対象公演:KYOTO EXPERIMENT 2022プログラム/フリンジ「More Experiments」] ※チケット1枚につき1名、1回のみ有効。 ※当日券のみの取扱で、残席がある場合に限ります。

ご注意

- ★各公演の受付開始は、開演時間の60分前からです。(梅田哲也公演を除く)
- ★ユース・学生、高校生以下チケットをご購入の方は公演当日、証明書のご提示が必要です。
- ★ペアは2枚分の料金です。同一演目・日時の公演を2人で観劇する場合のみ有効です。
- ★団体割引(10名以上)を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENTチケットセンターまで。
- ★車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引きとなります。お席の場所を指定させていただく場合がございます。車椅子または障害者手帳をお持ちのお客様の介助者は、1名無料となります。ご予約・お問合せはKYOTO EXPERIMENTチケットセンターまで。
- ★年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各プログラムページをご覧ください。
- ★演出の都合上、開演時刻を過ぎると入場できない場合がございます。その際払い戻しはいたしません。
- ★ご購入後の日時の変更はできません。

♥託児サービスについて

各プログラムページ、またはカレンダー(p.96)で♥マークがついた公演は、託児サービスをご利用いただけます。料金は¥1,500(1公演、お子さま1名あたり)。事前予約が必要で、締切は各公演の7日前まで。ご予約・お問合せは、下記のKYOTO EXPERIMENTチケットセンターまで。

※新型コロナウイルス感染症に伴い、ご来場が困難なお客様に対しまして、チケット代金の払い戻しを行います。

【希望者払戻し受付期間】
 2022年9月16日⑤～お手持ちのチケットの公演日時まで

※払戻し期間を過ぎますと対応いたしかねますので、必ず期間内に手続きをお願いいたします。払い戻し方法についてはウェブサイトをご確認ください。

KYOTO EXPERIMENT チケットセンター
 ☎ 075-213-0820
 [11:00-19:00 日曜・祝日休。開催期間中は無休]

Ticket Information

📍 Kyoto Experiment Ticket Center

Online <https://kyoto-ex.jp>
 Phone +81 (0)75-213-0820
 Box Office 6F, 7th Hase Bldg. 229-2 Shoshoicho, Nakagyo-ku, Kyoto
 Open 11:00-19:00
 (closed on Sundays and public holidays, open every day during the festival period)
 Tickets bought by phone must be paid for and collected at the convenience store Seven-Eleven.

📍 ROHM Theatre Kyoto Box Office

(only select performances available to purchase)
 Online <https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/>
 Phone +81 (0)75-746-3201
 Box Office 1F, 13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
 Open 10:00-19:00 (open every day except special closure days)
 Please note telephone and box office services may be shortened due to Covid-19 restrictions.

In addition, tickets are available at each venue for the performances taking place at that venue (Kyoto Art Center, Kyoto Art Theater Ticket Center and THEATRE E9 KYOTO).

Passes & Discounts

📍 Festival Pass | ¥27,000 **Sold out**

📍 Student Festival Pass | ¥16,000

This pass allows the holder to see all eleven performances in the Shows and Kansai Studies programs. (limited numbers).

Pass holders cannot see the same performance multiple times. Pass holders are admitted to each Forced Entertainment performance once.

Student ID is required for the student festival pass. Please note holders aged 19 and under cannot be admitted to Samara Hersch's performances.

Only available for purchase at Kyoto Experiment Ticket Center. Cannot be purchased on the day. Valid only for the ticket holder.

📍 3 Performance Pass ¥8,100

See three performances from the eleven performances in the Shows and Kansai Studies programs at a discounted price.

📍 Student 3 Performance Pass ¥6,600

See three performances from the eleven performances in the Shows and Kansai Studies programs at a discounted price. (Student ID required)

📍 Forced Entertainment 2 Performance Pass ¥5,000

See Forced Entertainment's *To Move in Time* and *Real Magic* at a discounted price.

📍 KEX Discounts Stubs

Purchase day tickets for any performance in the Shows and Kansai Studies program at a ¥500 discount (the advance ticket price) upon presentation of a used ticket stub (of any Kyoto Experiment 2022 program or Fringe: More Experiments program), the Kyoto Experiment free newspaper or a festival partner hotel coupon.

One stub is a one-time discount valid for one person.
 Only valid for a full-price ticket on the day of the performance and when seats are available.
 Please check the Kyoto Experiment Twitter account for the latest information on ticket availability on the morning of each performance.

Notes

★The venue box office opens one hour before each performance (excludes Tetsuya Umeda).

★Proof of age is required for youth, student and high school student & younger tickets.

★The price of a pair ticket includes two seats. A pair ticket is valid for two persons for the same performance (date and time) only.

★Group rates are available for groups of more than ten people. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for details.

★A ¥500 discount per ticket is available for customers using a wheelchair. We may guide you to specific seats. One complimentary ticket per helper is offered to those with disabilities. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for further information.

★There are age restrictions for certain performances, please see each performance page for more information.

★Entrance to some performances may be refused after the start time. Please note that no refund is given to latecomers.

★Please note changes to the date and time of a performance cannot be made after purchase.

♥Childcare Service

A childcare service is available for performances marked with a ♥ on each program page and in the calendar on p. 96. ¥1,500 per child per performance. Please reserve through the online form on the festival website. Reservation is required seven days before the performance. For inquiries, please contact the Kyoto Experiment Ticket Center below.

Tickets will be refunded to customers who are not able to attend a performance due to being impacted by Covid-19.

Refund Period:
 September 16th (Fri), 2022 until the date and time of the performance booked. Please note we will not be able to accept refunds after this period. Please see the festival website for full details.

📍 Kyoto Experiment Ticket Center
 075-213-0820 (11:00-19:00, closed on Sundays and public holidays, open every day during the festival period)

Partner Hotels

泊りがけで夜までゆっくり楽しむ

Stay overnight and enjoy the festival until late

Ace Hotel Kyoto (エースホテル京都)



建築家の隈研吾と、長年エースホテルのパートナーであるコミュニンデザインとのコラボレーションによりデザインされたホテル。「イースト ミーツ ウェスト」をコンセプトに、地元およびアメリカ西海岸のアーティストや職人によるオリジナルアートや工芸品が特徴です。コード「KYOEXP2022」の入力で、特別プランにてご予約いただけます。

Ace Hotel Kyoto is designed in partnership with acclaimed architect Kengo Kuma and longtime Ace collaborators Commune Design. The hotel is grounded in an East meets West design philosophy, featuring original art and craft from local and West Coast-based artists and artisans. Receive special rates on rooms during the festival period with the promo code "KYOEXP2022".

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 075-229-9000
<https://jp.acehotel.com/kyoto>



KAGANHOTEL (河岸ホテル)



京都中央卸売市場にある青果卸女子寮を改装して作られたアートホテル。アーティストが住み、制作活動をしており、ホテル・ホステルとしての宿泊も可。宿泊の際、作品を選べる部屋があり、作家スタッフと会えることも。カフェギャラリーや収録スタジオ、室内で楽しめるワークショップボックスもあり。

*公式予約ページから宿泊ご予約の際、コード入力(kyotoex)をすると宿泊代金5%オフ。

Kagan Hotel was created by renovating a warehouse and women's dormitory of a vegetable wholesaler at the Kyoto Central Wholesale Hall. The hotel has a cafe, gallery, recording studio, atelier and workshop box. The hotel's staff but also artists live and work in the hotel. There is also a service that allows guests to select a piece of artwork from the hotel's collection to be displayed in their room for the duration of their stay. Receive a 5% discount on rooms during the festival period with the promo code "kyotoex".

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 050-1741-0627
<https://kaganel.com>



node hotel (ノードホテル)



「アートコレクターの住まいのようなホテル」がコンセプト。非日常の贅沢ではなく、理想の暮らしを体験する場所として、暮らしの中でアートを身近に感じる豊かな時間をお過ごしください。

*宿泊ご予約時に「KYOTO EXPERIMENTに来場」とお伝えいただくと、朝食サービスあり。

node hotel's concept is "like the home of an art collector". Opposed to extraordinary luxury, experience an ideal way of living in which art feels like a natural part of life. Receive a complimentary breakfast service during the festival period when you mention you are attending Kyoto Experiment upon reservation.

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 075-221-8800
<https://nodehotel.com>



KYOTO EXPERIMENTとパートナーシップを結んでいるホテルです。会場からの交通の便もよく、観劇や京都観光を夜まで楽しんだ後は宿でゆっくり過ごせます。ホテルに宿泊するお客様には、フェスティバルのShows(上演プログラム)の「当日券¥500 OFFクーポン」を提供します。

※各ホテルの割引やサービスはフェスティバル開催期間中のみになります。

Kyoto Experiment has partnered with the following hotels to offer special discounts for staying overnight when you visit the festival. The hotels offer good access to the festival venues as well as general Kyoto sightseeing. Guests staying at the hotel will be provided with a 500 yen discount coupon for same-day tickets for the festival's Shows (performance program).

(Please note discounts and services for each hotel are only available during the festival period.)

HOTEL ANTEROOM KYOTO (ホテルアンテルーム京都)



HOTEL ANTEROOM KYOTOは、2011年当時、学生寮として使用されてきた建物をコンバージョンしオープンしたホテル&アパートメントです。館内には、ギャラリー・朝食レストラン・バーを併設。「アート&カルチャー」「和」という3つのテーマを現在進行形の視点で捉え、「京都の今」を発信しています。

HOTEL ANTEROOM KYOTO opened in 2011 after converting a building that used to be used as a student dormitory and offers hotel rooms and apartments just south of Kyoto station. ANTEROOM consists of a gallery, breakfast restaurant, and bar. It brings together art and culture expressing the essence of 'ever-changing contemporary Kyoto' through various activities.

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 075-681-5656
<https://www.uds-hotels.com/anteroom/kyoto>



BnA Alter Museum



Photo by Tomooki Kengaku

31の泊まれるアート作品、高さ30メートルの縦型ギャラリー、世界に広がるコミュニティと心地よい音楽。そこは美術館でもホテルでもない実験と発信の場、宿泊型ミュージアム、「BnA Alter Museum」。

オフィシャルサイトの「宿泊予約/Book Now」より日程をご指定ののち、プロモーションコード「CAMP-EXPERIMENT2022」を入力すると、フェスティバル期間中に限り20%割引となります(限定数)。

A boutique art hotel in Kyoto featuring 31 unique art rooms you can sleep in, a 10-story vertical art gallery showcasing the best of Japanese contemporary art, and a bar where the locals hang out, enjoying weekly art and music events. You can bet your visit to BnA Alter Museum will be an unforgettable travel experience. Select your dates from the "Book Now" page on the official website and enter the promotion code "CAMP-EXPERIMENT2022" to receive a 20% discount for the duration of the festival (limited availability).

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 075-748-1278
<https://bnaaltermuseum.com>



MAGASINN KYOTO (マガザンキョウト)



[泊まれる雑誌]マガザンキョウトは、触って、使って、泊まって、買える。五感をフルに使って京都カルチャーを体験できる、京都二条城そばにある宿です。宿泊は1日1組、京町家一棟を貸切。お土産雑貨や公開イベントは、毎シーズンさまざまなパートナーと協働しアップデートしていきます。

*宿泊ご予約時に「KYOTO EXPERIMENTに来場」の旨をお伝えいただけましたら、オリジナル風呂敷をプレゼントいたします。

Magasinn Kyoto is a Machiya hotel located near Nijo Castle, Kyoto. One group per day can rent the whole house. The concept is a "Stay-able magazine" where you can experience Kyoto culture through all five senses. The space and events are updated seasonally through collaborations with diverse partners. Mention you will be visiting Kyoto Experiment when you make a reservation and receive a complimentary original furoshiki (traditional Japanese wrapping cloth).

ご予約・お問合せ / Reservations & Inquiries
Tel: 075-202-7477
https://www.airbnb.jp/rooms/12844982?source_impression_id=p3_1661124915_fnVAnzSLyaf9xQRF



会場アクセス Access

A: ロームシアター京都 /
ミーティングポイント(ローム・スクエア内)

ROHM Theatre Kyoto
Meeting Point at ROHM Square, ROHM Theatre Kyoto



京都市左京区岡崎最勝寺町113
☎ 075-771-6051
・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約10分
・市バス32、46系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場なし(近隣にみやこめっせ駐車場・岡崎公園駐車場あり)

13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
・10 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto City Subway Tozai Line)
・Kyoto City Bus Nos. 32, 46 to "Okazaki Koen / ROHM Theatre Kyoto / Miyakomesse-mae"
・Bicycle parking available. For car parking please use the Miyako Messe or Okazaki Park parking lots.

B: 京都芸術センター
KYOTO ART CENTER



京都市中京区室町通蛸薬師下ル山伏山町546-2
☎ 075-213-1000
・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22・24番出口より徒歩5分
・駐輪場あり、駐車場なし

546-2 Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
・5 minutes' walk from exits 22 and 24 of Shijo Station (Kyoto City Subway Karasuma Line) and Karasuma Station (Hankyu Kyoto Line)
・Bicycle parking available. No car parking.

C: 京都芸術劇場 春秋座
Kyoto Art Theater Shunjuza



京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都芸術大学内
☎ 075-791-8240
・叡山電車「茶山駅」より徒歩約10分
・市バス3、5、204系統「上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場なし(原付・バイクはご遠慮下さい)

2-116 Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto (Kyoto University of the Arts)
・10 minutes' walk from Chayama Station (Eizan Railway)
・Kyoto City Bus Nos. 3, 5 or 204 to "Kamihatecho / Uryuyamagakuen Kyoto Geijutsudaigaku-mae (Kyoto Univ. of the Arts)"
・Bicycle parking available. No car parking.

D: 京都中央信用金庫 旧厚生センター
Former welfare center, Kyoto Chuo Shinkin Bank



京都市下京区烏丸通七条西入中居町113
・JR「京都駅」中央口より徒歩約5分
・市バス5、205、206系統「烏丸七条」より徒歩約1分
・駐輪場、駐車場なし(隣接地にコインパーキングあり)
113, Nakai-cho, Shimogyo-ku, Kyoto
・5 minutes' walk from the Central (Chuo) gate of Kyoto Station (JR)
・Kyoto City Bus Nos. 5, 205 or 206 to "Karasuma Nanajo". 1 minute walk from stop.
・No car or bicycle parking available.

E: THEATRE E9 KYOTO



京都市南区東九条南河原町9-1
☎ 075-661-2515
・JR「京都駅」八条口より徒歩約14分
・JR・京阪「東福寺駅」より徒歩約7分
・地下鉄烏丸線「丸太町駅」より徒歩約11分
・駐輪場あり、駐車場なし

9-1, Higashikujo-minamikawaramachi, Minami-ku, Kyoto
・14 minutes' walk from Hachijoguchi exit of Kyoto Station (JR)
・7 minutes' walk from Tofukuji Station (JR or Keihan railway)
・11 minutes' walk from Kujo Station (Kyoto City Subway Karasuma Line)
・Bicycle parking available. No car parking.

F: 京都市京セラ美術館
Kyoto City KYOCERA Museum of Art



京都市左京区岡崎円勝寺町124
☎ 075-771-4334
・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約8分
・市バス5、46系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ
・駐輪場あり、駐車場あり(有料、数台限定。近隣に有料駐車場あり)

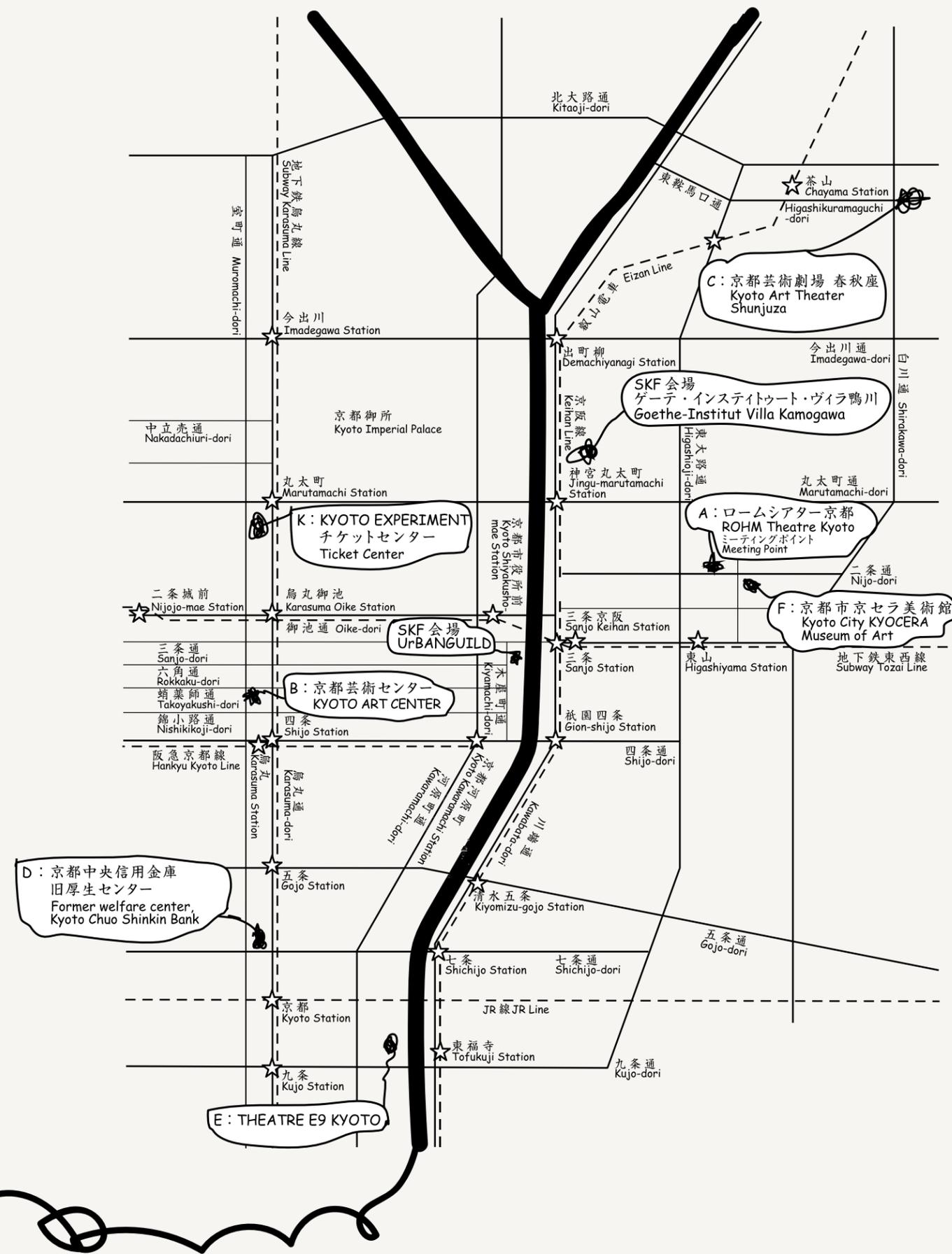
124 Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto
・8 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto City Subway Tozai Line)
・Kyoto City Bus Nos. 5 or 46 to "Okazaki Koen / Bijutsukan, Heian Jingu-mae"
・Bicycle parking available. Limited number of car parking spaces available for a fee. Parking lots nearby.

K: KYOTO EXPERIMENT チケットセンター
Kyoto Experiment Ticket Center

京都市中京区少将井町229-2 第7長谷ビル 6F
☎ 075-213-0820
・地下鉄烏丸線「丸太町駅」下車、6番出口より徒歩1分
・駐輪場、駐車場なし

6F, 7 Hase Bldg. 229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
・1 minute walk from exit 6 of Marutamachi Station (Kyoto City Subway Karasuma Line).
・No car or bicycle parking available.

地図 Map



カレンダー Calendar

☆開演前に、プレトーク(演目解説)があります(会場ロビーにて開演30分前より)。 ☆ Pre-talk in the lobby 30 minutes before the performance.
 ★終演後に、ポスト・パフォーマンス・トークがあります。 ★ Post-show Talk
 ♥託児サービスをご利用いただけます。詳細はp.90へ ♥ Childcare Service is available. Please see p.91 for more details.

9月 September | 10月 October

アーティスト Artists	上演時間 Duration	25 Sun	29 Thu	1 Sat	2 Sun	3 Mon	4 Tue	5 Wed	6 Thu	7 Fri	8 Sat	9 Sun	10 Mon	11 Tue	12 Wed	13 Thu	14 Fri	15 Sat	16 Sun	17 Mon	18 Tue	19 Wed	20 Thu	21 Fri	22 Sat	23 Sun
Kansai Studies dot architects & 和田ながら dot architects & Nagara Wada	90 min (予定)TBC																	19:00	13:00 16:00★	16:00★♥						
小野彩加、中澤陽 / スペースノットブランク Ayaka Ono & Akira Nakazawa / Spacenotblank	90-120 min (予定)TBC			14:30 19:00	14:30★♥																					
サマラ・ハーシュ Samara Hersch	105 min			15:30 19:00	15:30♥				19:00	19:00	18:00	18:00	18:00													
フロレンティナ・ホルツィンガー Florentina Holzinger	120 min			18:30★★	18:30★★♥																					
松本奈々子、西本健吾 / チーム・チープロ Nanako Matsumoto, Kengo Nishimoto/team chiipro	75 min (予定)TBC										15:00★	13:00 16:00★	15:00													
メルツバウ、バラージ・バンディ、 リシャール・ピナス with 志賀理江子 Merzbow, Balázs Pándi & Richard Pinhas with Lieko Shiga	60 min (予定)TBC										19:00	19:00♥														
梅田哲也 Tetsuya Umeda	60 min (予定)TBC																17:00-20:20	13:00-16:20								
ジャールナン・バンタチャート Jarunun Phantachat	90 min (予定)TBC																	19:00	13:00★♥ 19:00							
フォースド・エンタテインメント Forced Entertainment もしも時間を移動できたら To Move In Time	55 min																						19:00★		14:00♥	
リアルマジック Real Magic	100 min																							19:00	14:00★♥	
アーザーデ・シャーミーリー Azade Shahmiri	55 min																							19:00★	17:00	17:00♥
ミーシャ・ラインカウフ Mischa Leinkauf	*			10:00 22:00	展示 Exhibition 10:00-20:00																					
ティノ・セーガル Tino Sehgal	*			← 10:00-18:00 ※月曜休館 (10.10は開館) Closed on Mondays, except 10.10. →																						
Super Knowledge for the Future [SKF] ①『TANZ』をめぐるとーク ① About TANZ ②GEISTI:聞く ② What Geist teaches us ③フロレンティナ ワークショップ ③ Workshop with Florentina Holzinger ④サマラ ワークショップ&ディスカッション ④ Workshop and Discussion with Samara Hersch ⑤写真家 志賀理江子トーク ⑤ Talk with Photographer Lieko Shiga ⑥実践「ニューテック」 ⑥ New teku teku: hiking across time and space ⑦LGBTQ勉強会 ⑦ LGBTQ Study Group ⑧アートとポリティクス<1> 沖縄 ⑧ Art and Politics 1: Okinawa ⑨アートとポリティクス<2> タイ ⑨ Art and Politics 2: Thailand ⑩アートとポリティクス<3> ロシア ⑩ Art and Politics 3: Russia		① 18:00	② 18:00		③ 19:00	④ 17:00	⑤ 17:00		⑥ 10:00	⑦ 11:00								⑧ 18:00						⑨ 11:00	⑩ 11:00	
ミーティングポイント Meeting point				← 12:00-18:00* (休場日: 火・水曜) (Closed on Tuesdays and Wednesdays) *(10/1, 2, 8, 15, 16, 21, 22, 23 ☞ 12:00-21:30) →																						
関連プログラム Related Programs ⑪舞台芸術プロデュース講座 ⑪ Performing Arts Producer Course アーティストイン・レジデンス: デイナ・ミシェル Artist-in-Residence: Dana Michel ⑫ 成果発表トーク (in 城崎) ⑫ Talk (in Kinokuniya) ⑬ 成果発表トーク (in 京都) ⑬ Talk (in Kyoto)															⑪ 18:30				⑬ 11:00							

